國譯大藏經

一

840
40
51

帙入四冊

國譯大藏經

第一册（第一之一帙）

根岸信輔氏寄贈

第一冊（之第一）

國語辭典

目次

法華三部經解題……一―三二
國譯無量義經……一―三一
國譯妙法蓮華經……一―二七二
國譯佛說觀普賢菩薩行法經……一―二九
淨土三部經解題……一―一四
國譯佛說無量壽經……一―八一
國譯佛說觀無量壽經……一―三七
國譯佛說阿彌陀經……一―一〇
淨土三部經大意……一―三七

漢譯原文

無量義經……一—一一
妙法蓮華經……一—二四
佛說觀普賢菩薩行法經……一—一〇
佛說無量壽經……一—二五
佛說觀無量壽經……一—一一
佛說阿彌陀經……一—三
淨土三經校訂記……一—六

以上

蕭齊天竺三藏曇摩伽陀耶舍譯（無量義經）
姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯（妙法蓮華經）
劉宋罽賓三藏法師曇摩密多譯（佛說觀普賢菩薩行法經）

法華三部經解題

譯者　島地大等

【法華三部】無量義經、法華經、普賢觀經、これを合せて法華の三部と稱す。是れ實に無量義經は開經、法華經は本經、普賢觀經はその結經にして、若し法華一經に立ちて云はば無量義經は法華經の序品を、普賢觀經は其の普賢菩薩勸發品を開說せるものとなり、此等の三部は法華一經の始中終を爲し、三者相待ちて一體系をなすが故なり。而かも斯の如く法華の三部を說定するものは、もと天台一家の所談に出でたり。

【三部の名稱】無量義經の名稱は鳩摩羅什譯法華經序品には無量義敎菩薩法佛所護念とし、南條博士は其の梵名を Amitārtha-sūtra ならんと云ふ。法華經の名稱は竺法護は正法華經と譯し、鳩

摩羅什は妙法蓮華經と改め、其他譯家に依り梵名のままを存するあり。而して、其梵名は何れも Saddharmapuṇḍarika-sūtra なり。普賢觀經は具さに觀普賢菩薩行法經と云ひ、單に觀經とも稱し、別に出深功德經の名あり。梵に Samanta-bhadra-bodhisattva-dhyāna-caryādharma-sūtra と云ふ。

【三部の說主】　法華三部の說主は今を距ること約二千五百年の昔、印度に出現せる大聖釋迦牟尼佛と傳へらる。佛はもと中印度迦毗羅衞城の太子なりしが、求道の念止み難く二十九歲に至り決然王城を逃れて苦修練行し、更に其の苦行の益なきを悟り河に浴し乳糜を受け、佛陀伽耶畢波羅樹下に端坐して魔を降伏し、朗然大覺の境に入れり、時に實算三十五。而して出城已來實に六年を經たり。爾來八十の入滅に至るまで一化五十年、擧げて說法度生のことに從ひ給へり。此法華三部は大小半滿の諸敎を四十餘年の間橫說竪說し給へる後に、其出世の一大事因緣として說示せられし眞實義なり。所謂爾前四十餘年の說敎は月待つまでの手ずさみに外ならず、而かも法華の後に說かれし涅槃經等の如きも亦法華經に對しては補助の位置にあり、卽ち法華は秋收の如く涅槃は捃拾として落穗を拾ふが如しと喩へらるる所以なり。

【三部の說時】　法華三部の開經たる無量義經には四十餘年の間未だ眞實を顯はさずとあり、法華經中亦これと同意味の文言あり。又法華經及び普賢觀經には遠からず涅槃に入るとの豫告見ゆ。

然れば此等三部の經は佛成道の後、四十餘年を經て說き出されたるものと謂ふべし。趙宋天台の學者等が五時を年時に配せる說に從へば、四十餘年の後八年間の所說なりとす。卽ち佛七十餘歲已後のことに屬するなり。

【三部の說處】無量義經及び法華經の說處は、王舍城の東北方なる耆闍崛山(Gṛdhrakūṭa-giri)にあり、所謂靈鷲山若くは靈山なり。法華經には此山を以て、劫火にも燒かれざる衆寶莊嚴の淨土なりとせり。此山にては法華の已前に大般若經等幾多の大乘經典を說かれたり。普賢觀經の說處は恆河の北なる毗舍離國の大林精舍なる重閣講堂にあり。此大林精舍は竹林精舍、祇園精舍ともに佛が多く居住說法し給ひし聖蹟なり。

【滅後の流傳】佛の直弟等に由りて大乘經典の結集せられし事實は未だ證明せられず、從つて大乘經典の成立に就ては學者兎角の異論ある所なり。爾るに、此法華經が大乘經典の中にて頗る古くより存在せしことには誰人も異議なからん。支那梁代の眞諦三藏の如きは、此經は佛滅後に於て大衆部の手に祕傳せられしものなりとさへ云へり。佛滅後七百年の出世なる南印度龍樹菩薩の著書には屢此經を引用せらるるを見れば、少くも其當時には證權となり得る程社會より認められしものに似たり。龍樹菩薩より少しく降りて北天竺の天親菩薩に至れば、親しく此經に就て

論釋を著せるあり。又支那の六朝、隋唐の時代の學者の意見に依れば、西紀二百五十年前頃には已に于闐國或は其國の東南なる遮拘迦國に於て此經典の流行を見たりと云ふ。

【梵本及び新譯】　法華經の梵本は一種に止まらざりしが如く、竺法護の正法華經は多羅葉梵本六千五百偈のものより譯し、鳩摩羅什の妙法蓮華經は白氎梵本六千偈のものより譯せりと傳へらる。但し漢譯法華經の梵本は何れも今日之を見るを得ず。現今、印度にては尼波羅國の佛教徒の間に九大寶典の一として傳へらるる法華經の梵本あり。佛人ビュルヌフ氏は此梵本を西紀千八百五十二年其佛譯と刊行し、其後西紀千八百八十四年に至り和蘭のケルン氏更に英譯を出版したり。ケルン氏の所譯は東方聖書第二十一卷に收めらる。我國の南條博士は此梵本を和譯せられ梵漢對照新譯法華經と題して刊行したり。又尼波羅傳來の梵本はケルン氏、南條博士校訂し高楠博士露都帝國大學委員等の斡旋により、西紀千九百八年より千九百十二年に至る間に全部五卷として刊行せらるるに至れり。

尙ほ尼波羅傳來の梵本の寫本は南條博士に依るに倫敦の亞細亞學會、英國博物館、劍橋大學、ワッタルス氏、河口慧海氏、佛國巴里圖書館、印度カルカッタ亞細亞學會、維廉堡學校等にありまた刊行せられしものには佛人フコー氏の信解品、英人ワイリキ氏普門品等あり。又尼波羅傳來

の梵本の外に印度カシユガルの地方に法華經梵本の斷片發見せられ、尼波羅の梵本よりも數百年を遡る古寫本なりと云ふ。

【無量義經の飜譯】支那譯の無量義經に二つあり一は劉宋代、中印度沙門求那跋陀羅の譯出にかかり、他は蕭齊の代、中印度沙門曇摩伽陀耶舍の譯出にかかれり、兩本ともに無量義經と題すと云ふ。然るに前者の譯本は開元釋敎錄卷五には、闕本となれることを記せり。後者の譯本は現存せるが、其內容には齊の劉虬居士の序を冠し、德行品第一、說法品第二、十功德品第三の三品を收めたり。尙ほ至元錄卷二には西藏の藏經中に此經無しと云へり。

【法華經の飜譯】法華經は舊時唯支那に於て漢譯せられしのみならず、西藏譯、蒙古譯、滿州譯、等あり。其他西域國の語にて譯せられし形迹あり、現にウイーグル語の普門品、西夏語の法華經の一部等のあることさへ近く知られしなり。但し其の廣く流傳し使用せられしは漢譯にあり。而して此經の支那に譯傳せられし最初は西紀三世紀の初、三國時代の吳の時に月支國の優婆塞支謙が江南に於て佛以三車喚經一卷を譯出したるに始まれり。開元錄卷十一には全譯六部、分譯二部ありとし、其の中四部は已に唐の開元已前に逸失せることを示せり。これを略示すれば下の如くなるべし。

	經名	卷數	存闕	譯人	譯年	摘要
一	佛以三車喚經	一	闕	吳月支優婆塞支謙	四紀二二三—二五三	譬喩品ならん。
二	法華三昧經	六	闕	吳外國三藏支彊梁接	同二五五—二五六	一本經名に正の字を加ふ、或は法護の所譯たるを疑はる。
三	薩芸芬陀利經	六	闕	西晉三藏竺法護	同二六六—二七四（大始年中）	
四	正法華經	十廿六品	存	西晉月支三藏竺法護	同二八六（太康七年）	或は方等正法華經と云ふ、縮刷藏經に收む。
五	薩曇分陀利經	一	存	失譯人名	同二六五—三一六	もと西晉錄に出づ、見寶塔、提婆品中の少分、縮刷藏經に收む。
六	方等法華經	五	闕	東晉沙門支道根	同三三五	
七	妙法蓮華經	廿八品	存	姚秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什奉詔譯	同四〇〇	或は七卷とす、縮刷藏經に收む。
八	添品法華經	廿七品	存	隋天竺三藏闍那崛多與達摩笈多共譯	同六〇一	或に八卷とす、縮刷藏經に收む。

然るに此等諸譯の中に於て、竺法護譯の正法華經と鳩摩羅什譯の妙法蓮華經と竝に闍那崛多、達摩笈多共譯の添品法華經との三部は、全譯の經典として今日に傳はり重視せらる。此等の三本に就て注意すべき所は、下の如き諸點にあり。先づ竺法護譯にては麗本を除きて餘の三本は提婆品を別立して梵志品第十二とせり。次に鳩摩羅什譯にては開元錄卷七の細注に依れば、經の第五卷の初の提婆品は揚都の沙門法獻が于闐國より將來せる梵本を蕭齊の武帝の時瓦官寺に於て外國三藏

達摩菩提と共譯せる所のものなり。また普門品の重頌の偈はもと北周武帝の時、北天竺三藏闍那崛多が益州龍淵寺に於て譯せる所にして、後に羅什所譯の經中に編入すとなし、尙大唐の玄奘三藏の重譯せる藥王菩薩等の呪六首あり、音義中にありて別出せずと附言せり。三論宗の嘉祥大師は羅什所譯の經はもと二十七品にして提婆品なし、後に上定林寺の法獻なる者、此品の梵本を于闐國に得て歸來し、永明八年十二月瓦官寺の法意と共に譯出し提婆達多品と名づけしも未だ藏に入れず。梁末に迫んで眞諦三藏亦此品を譯出し始めて見寶塔品の次に安せらるに至れりと云へり。

闍那崛多、達摩笈多共譯の經にては多く經文を羅什譯に取れり、而かも法護、羅什の兩譯に缺く所を補ふ、是れ添品と稱する所以なり。添品の序に依るに法護、羅什の兩譯はもと原本に於て異り、前者は多羅葉の梵本を用ひ後者は龜茲國の梵本を用ふ、從つて其の內容に異る所を生じたり。而して兩譯ともに闕くる所あり、卽ち法護譯は普門品の偈を闕き、羅什譯は藥草諭品の半と富樓那、法師二品の初と及び提婆達多品と普門品の偈頌となり。又品の順序に關しては羅什譯は囑累品を藥王品の前に置き、兩譯ともに陀羅尼品を普門品の後に置きたり。然るに隋の仁壽元年辛酉に至り普曜寺の沙門上行の請に由り、崛多、笈多の二師と共に大興善寺に於て重ねて多羅葉

本を勘へて譯出し、斯くて富樓那、法師の二品の初を加へ、藥草諭品の半ばを益し、提婆達多品を見寶塔の中に入れ、また陀羅尼品は神力品の次に、囑累品は最後に置けり。而して字句にも亦差殊ありとなせり。

【漢譯三本】　法護譯と羅什譯と竝に崛多、笈多共譯との三部を漢譯三本と稱す。而かも此中、最も流行したるは第二の羅什譯なり。仍りて羅什譯を中心として品目を比較し、以て其等の三本の內容を推測する方便となさしめん。

妙法蓮華經	添品法華經	正法華經	尼波羅梵本
明太宗御製序	序		
唐道宣弘傳序			
序品第一	序品第一	光瑞品第一	(1) Nidāna-parivarta
方便品第二	方便品第二	善權品第二	(2) Upayakauśalya
譬諭品第三	譬諭品第三	應時品第三	(3) Aupamya
信解品第四	信解品第四	信藥品第四	(4) Adhimukti
藥草諭品第五	藥草諭品第五	藥草品第五	(5) Ośadhi
授記品第六	授記品第六	授聲聞決品第六	(6) Vyākaraṇa
化城諭品第七	化城諭品第七	往古品第七	(7) Purvayoga

五百弟子授記品第八
授學無學人記品第九
法師品第十
見寶塔品第十一
提婆達多品第十二
勸持品第十三
安樂行品第十四
從地涌出品第十五
如來壽量品第十六
分別功德品第十七
隨喜功德品第十八
法師功德品第十九
常不輕菩薩品第二十
如來神力品第二十一
囑累品第二十二
藥王菩薩本事品第二十三
妙音菩薩品第二十四

五百弟子授記品第八
授學天學人記品第九
法師品第十
見寶塔品第十一
勸持品第十二
安樂行品第十三
從地涌出品第十四
如來壽量品第十五
分別功德品第十六
隨喜功德品第十七
法師功德品第十八
常不輕菩薩品第十九
神力品第二十
囑累品第二十七
藥王菩薩本事品第二十二
妙音菩薩品第二十三

授五百弟子決品第八
授阿難羅云決品第九
藥王如來品第十
七寶塔品第十一
(梵志品)
勸說品第十二
安樂行品第十三
菩薩從地涌出品第十四
如來壽量品第十五
御福事品第十六
勸助品第十七
歎法師品第十八
常被輕慢品第十九
如來神足行品第二十
囑累品第二十七
藥王菩薩品第二十一
妙吼菩薩品第二十二

(8) Pañcabhikṣuśatavyākaraṇa
(9) Ānanda-rāhulābhyām anyeṣām ca dvābhyām bhikṣusahasrābhyām vyākaraṇa
(10) Saddharmabhāṇaka
(11) Stūpasaṃdarśana
(12) Utsāha
(13) Sukhavihāra
(14) Bodhirṛkṣa-pṛthivīvivara samudgama, or Bodhisattva-pṛthivī
(15) Tathāgatāyuṣapramāṇa
(16) Puṇyaparyāya
(17) Anumodanapuṇyanirdeśa
(18) Dharmabhāṇakānuṣaṃsāsadāyatanaviśuddhi
(19) Sadāparibhūta
(20) Tathāgatarddhyabhisaṃskāra
(21) Dhāraṇi
(22) Bhaiṣajyarāja
(23) Gaṅgadāsvara (?) (Maṅgaṣvara?)

觀世音菩薩普門品第廿五	觀世音菩薩普門品第廿四	光世音普門品第二十三	(24) Samantamukha-parivarta A-valokiteśvara-vikurvaṇanirdeśa
陀羅尼品第二十六	陀羅尼品第二十一	總持品第二十四	(25) Śubhavyūhapūrvayoga
妙莊嚴王本事品第二十七	妙莊嚴王品第二十五	淨復淨王品第二十五	(26) Samantabhadrotsāha
普賢菩薩勸發品第二十八	普賢菩薩勸發品第二十七	樂普賢品第二十六	(27) Dharmaparyāya

僧叡後序

明の智旭の意に依るに羅什譯と崛多笈多共譯との內容所說の異點は、添品には藥草諭品の後に生育の喩を出だすにあり。又羅什譯と法護譯とを對すれば、法護譯には藥草品第五の中に迦葉との問答、生育の喩あり、授五百弟子品の初には海に入り寶を取るの喩あり、又法師品を藥王如來品と名づけ、寶蓋王及び千子と善蓋太子との法供養のことあり、尙ほ呪文は一切これを漢譯した る如き主なる相違點なりとす。尙ほ妙法蓮華經の卷を分つに七卷とすると八卷とするとあり、兩者ともに隋唐時代よりその說あるか。又我國の宗淵法師は七卷本十七種、八卷本五十九種を集めて此經の文字の異同を校正したり。

【普賢觀經の飜譯】　普賢觀經には三譯あり、一は普賢觀經一名觀普賢菩薩經一卷、東晉西域三藏祇多蜜多譯にして、二は觀普賢菩薩經一卷姚秦三藏鳩摩羅什譯なり。開元錄卷十四には此二本は

闕失すとせり。三は觀普賢菩薩行法經一卷と題して、劉宋の元嘉年中、罽賓國沙門曇摩蜜多が揚州に於て譯出せる所なり。縮刷藏經中に收む、內容は別に品を分たず。又至元錄卷三には此經西藏の大藏になしと云へり。

【無量義經の內容】 德行品第一には佛が王舍城耆闍崛山にて萬二千人の大比丘衆、八萬の大菩薩等と居給ひける時、大莊嚴菩薩なる者あり、衆中より進み出でて佛を讚歎し奉れることを說けり。說法品第二には大莊嚴菩薩に對して何の法か速かに菩提を成ずるやと問ひ、佛は一法門ありて速かに菩提を成す、卽ち是れ無量義なり、無量義は一法より生ず、一法は是れ實相なりと答へたり。此中に有名なる四十餘年未顯眞實の語あり。十功德品第三には此經に十不可思議力あることを示せり。尙ほ劉虬居士の經序には此經譯傳の事實を記す。

【妙法蓮華經の內容】 序品第一には佛が王舍城耆闍崛山に大比丘衆萬二千人、菩薩八萬人等と在ましける時、先に已に無量義經を說き了り、乃ち無量義處三昧に入り眉間の白毫を放ちて、東方萬八千の世界を照らし給ふ。彌勒菩薩は此の神變の相に疑念を生じ以て文殊菩薩に問へり。文殊菩薩は往昔の事實を說きこれを法華經を說かるる前相ならんと判答しつ。方便品第二には佛正く出定して舍利弗に對し、諸佛の智慧は甚深無量にして難解難入なり、是れ唯佛と佛とのみ究盡

せる諸法實相の境界なりと告げ給ひて、說かず。舍利弗は爲めに三請し、五千の增上慢の比丘は退席す。是に於て佛は一大事因緣を以て出現せるものにして、衆生をして佛知見に開示悟入せしめんが爲めなり、則ち唯一佛乘ありて二乘三乘あることなし、諸佛方便力を以て一佛乘に於て分別して三乘と說き給ふに過ぎずと示されたり。譬諭品第三には佛、舍利弗に對し未來世に於て作佛し、華光如來と號すべしと授記し給ふ。又諸佛は方便力を以て衆生を化導し給ふことを示し、火宅の諭を說かれたり。信解品第四には須菩提、迦旃延、大迦葉、目犍連の四人が佛旨を解了し、其所得を告白して長者窮兒の諭を說けり。此諭の中に羊鹿牛車、大白牛車のこと見ゆ。藥草諭品第五には佛が大迦葉等の四人の所說を印可し、三草二木の諭を說き更に推廣して說かれたり。授記品第六には佛が大迦葉、須菩提、迦旃延、目犍連の四人に成佛の記を授けられたり。化城諭品第七には佛は先づ三千塵點劫の往昔の出世なる大通智勝如來の法華經を說き給ふことを述べ、其の在俗の子たる十六王子沙彌が覆講結緣せし事を示し、次に化城の諭を說き三百由旬の化城に止まらず、進んで五百由旬の寶處に至るべしと示せり。五百弟子授記品第八には佛、富樓那を上首とし憍陳如、優樓頻羸迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、迦留陀夷、優陀夷、阿㝹樓馱、離婆多、劫賓那、薄拘羅、周陀、莎伽陀等の五百の弟子を授記せらる。乃ち五百阿羅漢は領解を述べて繫珠の

諭を說けり。授學無學人記品第九には佛、阿難、羅睺羅を上首とし學無學の二千人に授記せらるとあり。法師品第十には佛、藥王菩薩に因せて八萬の大士に、此經を持するものは速かに佛道を成ずべしと告げ、鑿井の諭を說きたり。見寶塔品第十一には佛前に於て寶塔地より涌出し、塔中より大音聲を以て讚歎し、佛は大樂說菩薩の問に對し、これ多寶佛塔にして大誓願力に由り、此經を聞き之を證明せんが爲めに涌出せるものなりと告げ、佛は神力を以て土田を變じ娑婆世界をして淨國となし、乃ち分身の十方諸佛を召集し給ひ、斯くて佛自ら右の指を以て塔扉を開き、多寶佛は半座を分ちて釋迦多寶竝坐し給ふことを述べたり。提婆達多品第十二には佛、往昔道を求めて阿私仙に奉仕し、爲めに此經を聞くことを得たることを云ひ、其の時の仙人は今の提婆達多なりとして提婆の成佛を豫言せり。又智積菩薩の問に答へて文殊菩薩、海に入つて弘經し、龍女現はれて寶珠を佛に獻じ速疾に無垢世界に於て正覺を唱ふることを說けり。勸持品第十三には藥王、大樂說等の菩薩は各經を持して弘布せんと誓ひ、又姨母大愛道、佛妃耶輸陀羅に授記し、尙ほ八十萬億那由他の諸の菩薩を見給ひ、諸菩薩は卽ち亦持說せんと誓ひたり。安樂行品第十四には文殊菩薩は末世持經の方法を請問し、佛は身、口、意、誓願の四安樂行を說き、また輪王髻珠の諭を出し、更に夢中妙相のことを明して惡世弘經の大利を說けり。從地涌出品第十五には佛

滅後の末世、持經の人たる六萬恆沙の菩薩は各眷屬を將ゐて大地より涌出す。此等の菩薩衆の上首は上行菩薩等の四人なり。時に在會の大衆は此盛事を見て驚異し、彌勒菩薩は衆心を量り父少子老の妙論を用ひて、佛の開說を求めたり。如來壽量品卷十六には佛自ら成佛已來甚大久遠なることを顯はして衆疑を決す。此の下に無量劫の意を明すに五百塵點の論を用ひたり。又良醫の論を說いて方便力を以て滅度を現じ益物することを示せり。其の偈頌の中には常在靈山、我此土安穩等の句あり。分別功德品第十七には大衆が佛の壽命長遠の說を聞いて大饒益を得ることを明し又五品弟子の功德を明かせり。隨喜功德品第十八には聞經隨喜のものの種種の功德を述べたり。法師功德品第十九には此經を受持、讀誦、解說、書寫するものは六根淸淨を得ることを明せり。常不輕菩薩品第二十には佛、得大勢至菩薩に對して往古の威音王如來滅後像法の時に、常不輕菩薩あり、四衆を禮拜讚歎して隨喜の行を修し、爲めに六根を淸め速かに佛道を成せしことを語られたり。如來神力品第二十一には佛は無量の大衆の前に於て大神力を現じ、廣長舌を出だし、毛孔の光を放ち、聲咳彈指の響、十方に徧せることを示せり。囑累品第二十二には佛は右の手を以て三たび諸菩薩の頂を撫でて此經を付囑し、是を以て自行化他に盡さんことを望めり。藥王菩薩本事品第二十三には佛、宿王華菩薩の問に對して藥王菩薩の本事を說き、藥王は過去無量劫の出

世なる日月淨明德佛の時、一切衆生喜見菩薩と稱し、その身體を燃して彼佛及び法華經を供養したり。此の下に是れ眞の精進なり、是を眞法を以て如來を供養すと名づくとの語あり。また藥王は彼佛の滅後に其臂を然して彼佛の舍利を供養したりと告げらる。妙音菩薩品第二十四には佛、眉間の光明を放ちて東方世界を照し。淨光莊嚴國の妙音菩薩を召致して佛事をなさしむ。又佛は華德菩薩の問に答へて、妙音菩薩の神通攝化のことを示せり。觀世音菩薩普門品第二十五には佛、無盡意菩薩の問に答へて、觀音の種種の利益及び三十三身自在の化益あることを說けり。陀羅尼品第二十六には藥王等の菩薩竝に護法の天神等が、各法華の行者を守護せんとて呪を述べたり。妙莊嚴王本事品第二十七には往昔無量劫の時、淨德夫人竝に淨藏、淨眼の二子、同じく父の妙莊嚴王を化して、其當時出世せる雲雷音宿王華智佛の所に詣でしめ、法華の行者とならしむ。此の妙莊嚴王は今の華德菩薩なりと云へり。普賢菩薩勸發品第二十八には佛、普賢菩薩の爲めに重ねて四法を示し、普賢はまた持經者を守護し、彼の六牙の白象に乘りて其の前に現ずべしと說けり。

【普賢觀經の內容】佛は毗舍離國なる大林精舍の重閣講堂に在給ひし時、阿難、迦葉、彌勒の三人が同じく佛滅後に於ける大乘修行の法要を請問せり。佛は爲めに普賢の觀門及び懺悔六根罪法

を說かる、卽ち觀門に於ては六牙の白象に乘れる普賢を觀じ、而かも實相觀に入りて懺悔を徹底せしむることを示せり。此の中に若し懺悔せんと欲せば、端坐して實相を念ぜよ、衆罪は霜露の如く慧日能く消除す等の有名なる文あり。

【譯者略傳】唐の義淨三藏の詩に、晉宋齊梁唐代間、高僧求レ法離ニ長安一、去人成レ百歸無レ十、後者安知前者難、路遠碧天唯冷結、沙河遮レ日力疲彈、後賢如ニ未レ暗ニ此旨一、往往將經容易看とあり、譯經三藏の辛酸を語りて以て讀經者を警覺す、當今、安坐して經典を繙き得るもの、是全く譯經三藏千辛萬苦の餘澤なりと謂はざるべからず。而かも經典を手にせん者は、必ず其譯經者の如何なる人物なりしかを知らんと欲するなり。仍りてここに法華三部の譯者に就て其略傳を掲ぐべし。

【無量義經の譯者】本經の譯者は中印度の沙門曇摩伽陀耶舍（Dharmajātayaśas）なり。此に法生稱と飜す。兩乘に通じ、亦語學に巧なり、遊化して支那に來る。南齊高帝の建元三年辛酉に廣州の朝亭寺に於て、此無量義經一部を譯出せり。越えて武帝の永明三年九月に至り、武都山の慧表なるもの、此經を賫らして揚州に至りて繕寫流布せりと云ふ。

【妙法蓮華經の譯者】鳩摩羅什三藏なり。鳩摩羅什（Kumārajīva）ここに童壽と譯す、龜玆國の

人なり。其の父は印度人にして母は龜茲國王の妹なり。什は天稟聰明英俊にして眞の神童なり。七歲にして出家し、日に千偈を誦持し又毗曇を習得す。九歲の時母に伴はれて印度河を渡り罽賓に行き、當時の名僧盤頭達多に就て中長二阿含及び雜藏を學ぶ。時に王勅を受けて外道の學者輩と論戰し、之を服す。十二歲にして母と俱に龜茲國に歸る。幾時もなくまた母と俱に月支の北山に出で、進んで沙勒國に至り停ること一年、阿毗曇、六足等の蘊奧を究む。時に須利耶跋陀、須利耶蘇摩なる兄弟の大乘義に深達せるものあり。乃ち隨て學び中、百、十二等の大乘諸論の要義に達す。後母と龜茲の地界溫宿國に到るに、龜茲國王は之れを迎へて歸國せしむ。什、時に大乘義を宣說せしに國人大に喜べり。什の二十歲の時、其の母は獨り印度に行けり。去るに臨んで什を訓誡し大乘義を東土に傳ふるは偏に汝の任なりと勸勵せりと云ふ。實に此母ありて此子あるを知るなり。其の後、什は龜茲に止まること二年に及ぶ。偶、前秦王符堅其盛名を聞知し、將軍呂光に命じて龜茲を伐ち羅什を伴うて歸らんことを命ず。呂光乃ち龜茲を伐ち羅什を獲て歸路に就き涼州に至るに、符秦亡び姚秦興ると聞く。是に於て呂光は涼州姑臧に據り僭して王と稱す。仍りて什亦涼に止まること十二年に及べり。呂光の後、呂紹、呂纂を經て呂隆に至り姚興に降れり。羅什乃ち姚秦に迎へられ長安に入る、時に東晉の隆安五年、西紀四百一年なり。姚興は國師

の禮を以て什を優遇し、逍遙園を譯場とし天下の學賢を集めて大に經論を譯出せしむ。而して長安に入りてより六年度の夏、卽ち東晉義熙二年草堂に於て此法華經を譯出せり。所譯の經論は總じて七十四部、三百八十四卷に上る。什の門下三千に達し、四聖、十哲あり。所譯の經論亦出づるに隨て、多く其の研究し講說する所となりしが如し。一傳に依るに、弘始十五年四月十三日西紀四百十三年長安に卒す、壽七十なり。

【普賢觀經の譯者】　沙門曇摩蜜多（Dharmamitra）なり。其の名ここに法秀と譯す。印度罽賓國の人なり。少くして遊方を好み、遂に龜茲國に至る。國王之を優遇し就て戒を受く。更に去つて流沙を渡り、燉煌に至り、涼州に適き展轉して獨に達す、時に劉宋の元嘉元年なり。既にして荆州に出で長沙に禪堂を建て、舍利を感得して道俗に歸敬を受く。流れに沿うて東下し建業に至り中興寺、祇園寺等に居る。道譽高く帝室の歸依淺からず。また禪道を以て學徒に敎授せり。元嘉元年甲子より同十八年辛巳に至るまで翻譯する所十二部に及ぶ。普賢觀經も其の中の隨一なり。復會稽太守孟顗と同遊し、乃ち鄮縣の山に塔寺を建て東境の道俗を化す。後建業の定林下寺に住し、更に景勝の高地に上寺を營建す。元嘉十九年七月六日上寺に寂す、春秋八十七なり。

【法華經の講說】　印度に於ては龍樹菩薩に法華論の著ありと傳ふるも定かならず。然れども彼の

著書中には諸所に此法華經を引用せり。特に大智度論卷一百には法華經は阿羅漢受決作佛のことを說ける祕密の勝敎なりと判ぜり。天親菩薩は親しく法華經を講說し妙法蓮華優婆提舍の著あり、後世法華研究の唯一の指南なり。但し其の法華論には二譯あり、一は菩提流支譯にして上下二卷とし、他は勒那摩提譯にして一卷とせり、其內容はともに序品、方便品、譬諭品の前三品の註釋を含めり。

支那にては竺法護の法華を講ぜること詳かならず。鳩摩羅什に至つては此經を譯出するや其門下と共に之を譯成し、僧叡に命じて講說せしめたり。特に其の門下の道融、僧叡、僧肇、道生、曇影、慧觀等は或は講じ或は注疏を造り、僧叡の法華經序、慧叡の喩疑、慧觀の法華宗要序及び道生の法華經疏二卷等の如きは今日に存せり。乃至梁光宅寺法雲は前後百回此經を講說したり、法華義疏八卷の著あり。其の中に說ける因果乘體、敎、行、理、人の四一の釋の如きは多く人の知る所にして發揮するところ多し。

陳隋代に及んで法華の講說は盛んとなり、これを正依として一宗を創開するものあるに至れり、卽ち天台宗是れなり。而して此宗の慧思禪師は法華安樂行義を著し、其法嗣たる天台大師智顗は大に此經を講說し、法華玄義、法華文句、摩訶止觀の三大部及ぶ觀音玄義、同疏等の書を殘

せり。其三大部は章安大師灌頂が師の講座に侍して筆記せるものにして、其識見の高邁、組織の雄大、教綱の廣汎、理趣の幽深なること、餘家之に及ぶものなく全く古今獨歩なり。彼の系統には唐代に妙樂大師湛然出でて三大部の注疏を造り、趙宋代には法智大師知禮出でて觀音玄義、同疏の解釋を作り其他幾多の著書を出せり。

天台大師の少しく後輩に嘉祥大師吉藏あり、三論宗の見地より法華經を講説せり。其著書として傳はるものに法華遊意二卷、法華玄論十卷、法華義疏十二卷、法華統略六卷、法華論疏三卷等あり。唐代に入りて法相宗に慈恩大師窺基あり、三乘眞實一乘方便の見識より此經を講説し、法華玄贊十卷を著したり。又慈恩の少しく後輩に賢首大師法藏あり、華嚴經に依りて華嚴宗を開く、別に此經に就て講説せざるも亦大に法華經を利用し、之を判じて三輪判にては攝末歸本法輪、同別二教判にては同教一乘なりとしたり。彼の繼承者を以て任ずる清涼大師澄觀は法華を漸圓教として華嚴を頓圓教とするに對せしめたり。又眞言家にては不空三藏あり、其の所譯の中には成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌あり、法華の教と眞言の修法とを合せたる説を示せり。一行阿闍梨の大日經疏亦大に法華經を重視せり。降りて宋代に入つては溫陵戒環禪師あり、禪意を以て法華を講じ法華要解を著したり。その他漢土講讃の盛なること一朝夕の談に非ず。

日本に於ては推古朝に於て聖德太子出で、法華經を講じて法華經疏四卷を著さる。但し此疏は太子の勝鬘・維摩述作の後にして、四十一歲正月八日に起稿し、四十二歲四月十五日脫稿せられしものなりと傳ふ。太子の釋は主として光宅寺の法雲の法華義疏の說に則れり。乃ち法華を判じて漸敎五時の中の同歸敎なりとせるが如き以て見るべし。而かも書中に自ら出藍の釋なきにあらず、彼の法華經は萬善同歸を說いて前を會し、佛壽無極を說いて後を開くが故に此經最も第一なりとして、法華中心の義を述ぶるが如き是れなり。奈良朝にては聖武帝篤く佛法を信じ國分寺竝に國分尼寺に於て常に此經を講讚せしめ給へり。

平安朝に至りては傳敎大師最澄入唐求法して歸り、比叡山を闢き天台法華宗を弘む。殊に圓、戒、禪、密の四宗を開拓して一經の深旨を敍す。偶弘法大師空海あり、眞言義に居して之を扶く。尋で叡山より慈覺、智證の二大師入唐して歸り顯密を雙べ說くあり。是に於てか平安朝の全期は法華經の講演は都鄙を動かし、其結果國民の精神界には至大の靈感化を與ふるに至れり。鎌倉時代の後半に降れば日蓮上人あり。本門唱題の法幢を建て專ら此經の弘傳に努め一經の宗敎的深意を開說して餘蘊なからしむ。その他聖淨顯密敎禪を分たず諸宗爭つてこれが讚仰に從ふもの終始かはるところなし、誠に是希有殊勝の妙典圓頓一乘の極說なり。誰か感戴受持せざらむや。

【一論七釋】　上述の如くなれば、三國に亙て法華經の講說せられたるもの枚擧するに暇あらず、從て法華の論釋章疏は又頗る多數あるべし。然るに此中に於て代表的のものを求むれば、天親菩薩及光宅、天台、嘉祥、慈恩、戒環、弘法、智證の七家を擧ぐる事を得べきなり。略示すれば下の如し。

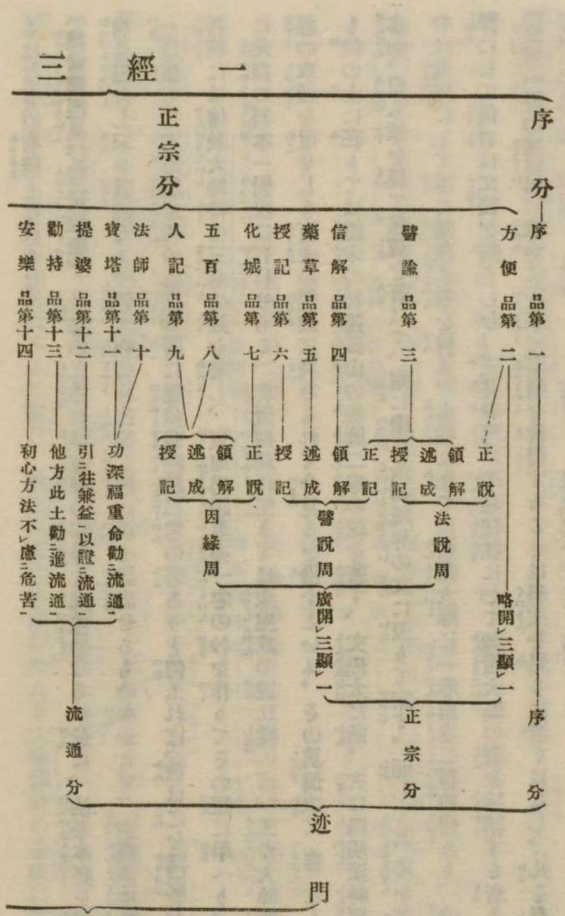
復此等の論釋中に於て超然獨峙の風あるものは、天台大師の法華三大部なり。其の量に於ても質に於ても、餘の論釋の企及し能はざることは、恐らく誰人も異存なかるべし。爾來法華を講說するもの、此三大部を見ずして之をなす能はずと稱するも、過言には非ざるべきなり。而かも支那、日本に亙りて天台宗の流行するに從ひ、此三大部の思想が殆んど大乘佛敎の全般に影響せざ

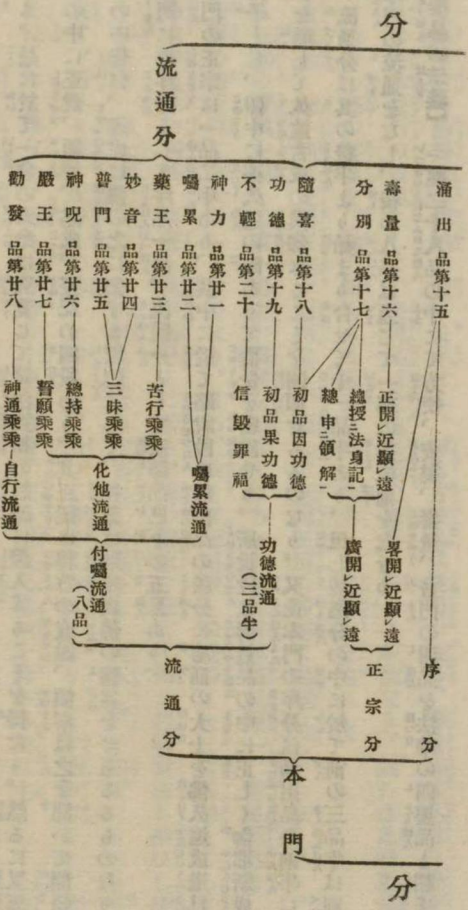
るはなきの有樣となれるなり。

【無量義經及び普賢觀經】　此等の二經は法華經の序分と流通分なるが故に、法華本經を講ずれば自ら包含し來る道理なり。從て別行の此等二經に就て講說せるもの多からず。新編諸宗敎總錄卷一に依るに支那趙宋代の孤山智圓に無量義經疏二卷の著ありと傳ふれば、彼は之を講說したるか。吾朝には傳敎大師特に三卷の註を著し、實地房證眞亦一卷の抄を作りてその顰に學へり。また別に此經の科本一冊現に刊行せらる。普賢觀經に至りては宋處咸の說に從へば、天台大師既にこの經の章疏を遺せしも唐末の焚毀に災せられて今見るを得ずといふ。その眞僞未だ審ならずと雖も彼の土に在りては趙宋の初運孤山の智圓二卷の疏を著す、文理太だ簡。次に四明派神照家の祖本如、自ら筆を操て義疏を著はす、爾に總に最初境界の文に至りて寂す。而して其志を遂ぐるものは處咸にして現に義疏二卷を傳ふ。本朝に在ては智證大師に一卷兩卷二種の釋あり、前者は科釋にして後者は文義を知らしむ。三井寺門の學者往往にして智證大師の疏を註講する者あり。

【法華一經の總科】　速かに一經の要領を會得することは科文を見るに若くはなし。凡そ科文は古來佛典研究者の常用せし所にして、一目して其經典の大體を識得せしめんとするものなり。然るに學者の見地の異なるに隨ひ科文亦一樣なる能はずして、各蘭菊美を競ふの狀を呈するに至れり。

今は且く天台大師の意に依準して之を示さん。





法華一經の文學的結構竝に理論的内容は總科を以て略ぼ之を推知することを得べし。乃ち少しく其の總科の意義を解かんに、先づ初に一經を兩分して本迹二門を立つ。天台の意に依れば迹門とは諸法實相の理を詮はす一段を云ひ、本門とは久遠實成の事を顯はす一段を云ふ。日蓮上人は

此本門を重視して久成の事を究め、本地無作の三身を詮はすを本門の眞詮としたり。而して迹門正宗八品の中に於て、略說段は十如實相の文にして廣說段は三周說法なり。三周の第一は法說周にして上根の爲めに直ちに諸法實相の理を說くを云ひ、次の譬說周は中根の爲めに更に譬諭を籍り來たりて之を說くを云ひ、第三の因緣周は下根の爲めに重ねて又往昔の因緣を敍して之を說くを云ふ。是に於て一會の大衆は究竟して諸法實相の妙諦に證入することを得たり。然るに又三周說法の中に正說、領解、述成、授記の四段あり。其正說は釋尊の直說、領解は之を聞いて開悟せるものの告白、述成は佛の之に對する證認にして、授記は將來成佛の豫言をせらるるものなり。此迹門には序分として序品一品、流通分として法師品已下の五品あり。

本門の正宗は一品二半あり、其中に於て略說段は涌出品の後分に地涌の大士を佛久遠成道已來の弟子とし、頌中に亦久遠の語ありて壽量を密說せり。廣說段は壽量品の中に正しく伽耶新成の近執を破して久遠古成の眞佛なることを開顯せるものなり。又此本門の序分は涌出品の前半にあり、流通分は其の後半より始まり合せて十一品半あり。但し流通分の中に於て前の三品半は別して本門の流通をなし、後の八品は通じて一部の總流通をなせり。

【四要品の法義】　一經二十八品の中にて方便、安樂、壽量、普門の四品を法華の四要品と稱す。

是れ支那唐代の妙樂大師湛然の說に由來せり。卽ち方便品は迹門の眼目、壽量品は本門の精要、安樂品は法華修行の規範にして、普門品は化他無窮の應用を示せるが故なり。然れば此四要品を解明すれば一經の要領を了知し得らるる道理なり。今少しく其法理を述べん。

一　方便品　此一品は迹門正宗の眼睛なり、而して迹門正宗の歸趣は開顯の二字に盡きたり。開顯とは三乘の權執を開して唯一佛乘の眞實を顯はすにあり。是れ所謂開三顯一、開權顯實若しくは開會等の語を以て顯はさるるものなり。其の三乘とは聲聞乘と緣覺乘と竝に菩薩乘とにして、此三乘は修道者の個性と素養と及び境遇とに鑑み個個の要求に應じて佛が隨機說與し給ひし法なり。一乘とは一は絕對の謂なり。人性もとより平等にして高下なく萬人悉く佛陀たるべき可能性を有す。而かも自ら局分して然るを知らず、仍つて佛は其情執を去るとき當體卽佛なりと說けり、此法これ一乘なり。然るに五時の中の前四時、卽ち成道已來四十餘年の間は主として三乘の法を說き、全く一乘の說なきに非ざるも未だ權實を判ずるに至らず。今ここに第五の法華時に來たり始めて三乘を權、一乘を實なりと判じ、三乘を開して卽ち一乘なりと顯はしたり。而して斯くの如く開顯せらるる所以の理を抽象し來たれば、方便品に所謂諸法實相の一語に盡くべし、是れ卽ち現象卽實在の意なり。彼の開三顯一と云ふが如きは敎法を史的に該括する上より名づけ、修

道者の人格に就かば二乘開會、二乘作佛の如き語あるなり。仍て天台大師は此經の所詮は敎に約すれば三乘卽一乘、行に約すれば汝等所行是菩薩道、人に約すれば二乘作佛にして、理に約すれば諸法實相四佛知見なりと云へり。

然り而して方便品の文に入るに略開顯と廣開顯との二あり、略開顯は所謂十如是の文にして、廣開顯の大義は收めて其內にあり。古來之を略法華、破地獄の文と稱す。天台大師は此文に依りて一念三千圓融三諦の妙理を啓き、諸法實相の義をして彰彰乎たらしむ。次に此甚深の大義を說く一段を廣開顯となす、其中には世諦常住、四佛知見、四一開顯、五佛同道、五乘開會等の妙義の光彩陸離たるものあり。大智の舍利弗は此品所說の理を聞いて佛知見に悟入せりと云ふ。其他の所化の衆は更に譬說周、因緣周の敎化に遇うて遂に開悟の目的を達したるなり。

二　安樂行品　此品は迹門流通の第四段にして、佛乃ち淺行初心の弘經方軌として四安樂行を說けり。其安樂行に四種あり。身、口、意、誓願是れなり。而して止と觀と慈悲との三法を以て、此の身、口、意、誓願の四安樂行を導くに歸せり。但し止と觀とは是れ定と慧とにして自行なり之に對して慈悲を化他とし自行化他不二なるを要とす。則ち身安樂行に於ては十惱亂を離るるは止、諸法性(空)、如實相(假)、無所有性(中)の觀(三觀)に住して一切の業作なく住著なきは觀、

之に依りて禮拜行道乃至一切の威儀悉く利他の爲にするは慈悲なり。口安樂行に於ては四制は止、但だ大乘を說くは觀、止觀俱行し一切の口密が自然に利他するは慈悲なり。意安樂行に於ては心に四種の散動惡想を離るるは止、心正觀に住し四人四觀あるは觀、之に依りて所修の一切所念悉く利他の爲にするは慈悲なり。誓願安樂行に於ては怨親平等なるは止、所緣の衆生に著せざるは觀、之に依りて拔苦與樂の誓願を起すは慈悲なり。然れば則ち四安樂行の要は止、觀、慈悲の三法に歸し、其三法の極致は諸法實相の理に安住し(止觀)自在にこれを用ゆる(慈悲)にあり。

三　壽量品　此品は法華本門の精要にして方便品と相竝んで一經の雙瞳たり。天台大師は本門を重視して諸法實相の理は餘經に通ずと雖、本地久成を明かすことは今經に局れりと云へり。之に依りて日本天台の古德は此の義を皇張して、本地無作三身の深義を立て、之を密敎と關係せしめて無盡に莊嚴す。日蓮上人の主張なる第三法門の所說も實にここに立脚せり。

然るに其の經文を檢するに法說段と譬說段とあり。其の法說段には三世益物を明かすに過去より現在に說を轉じ終りに不虛を結し、譬說段は其の意を再說したり。而して說法段の中心思想は總じては三世益物にあり、別しては過去益物を明かして如來の過去常を顯はすを其の面目とす。蓋し此經の文相は過現の常を明かし以て當常を自知せしめ、彼の大涅槃經に正しく當常を明かす

と表裏したり。而かも三世の常の中にて過常は最も了し難し、是れ佛の說明を下だし給ふ所以なり。而して此一品の中に於て佛が三請を受け已りて徐ろに金口を開き、汝等諦かに聽け、如來祕密神通の力をと宣へる文は、後段一切の所說を總括し本地久成の內證を提唱せるものなり。天台には之を釋して如來の二字は三身相卽の義を示し、祕の字は一身卽三身の義を、密の字は三身卽一身の義を示す、又神通力の三字は次での如く法報應の三身を表すと釋顯せり、之に依りて後代の釋家は如來祕密の四字を俱體の三身、神通之力の四字を俱用の三身に約し、更に俱體を本地、俱用を垂迹の三身となしたり。我國の先德に至りては或は體を重んじて毘盧一本の元始を尙び、或は用を重しとして事本理末の玄旨を談せり。又正しく本地の久成を開顯せる文に我れ實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由他劫なりとあり。之に就て天台大師は有名なる十重顯本の說を創說せり。其の無量劫の意を明瞭にする爲めに說かれし五百塵點の數量に就ては天台大師は有始の數量と解し、日本天台は之と異りて機情に寄するが故に有量とするも無始を佛意とすとなせり。斯くて所謂文上文底の談玄はこれより起れり。又過去の益物を明かす中、益物の所宜を說きて攝化の本國土は此娑婆を中心となし、中間無量の三藥の化益は畢竟本佛の大用にして非生現生非滅現滅の相用に外ならずとし、また現在の益物を明かす中、非生を明かす下に照理の不虛を

明かすに就て如來は如實に三界の相を知見す等の有名なる知見の六句あり。非滅現滅を明かす下、本實の不滅を說きて我れ成佛してより已來、甚だ大に久遠なり、壽命は無量阿僧祇劫なり、常住にして滅せずとあり。之に就て天台大師は從因向果の義に順ひて釋し、日本天台の古德は無作本證の義によりて解す。日蓮上人の妙法は實にこの本覺無作の義を力說するに在り。

四 普門品　觀世音菩薩の普門示現の妙用を明かすを以て主眼とす。此の中には觀音の名號に由りて七難、三毒を消除し、二求の兩願を滿足すべきことを說き、更に觀音の身口二業に約して三十三身、十九說法することを述べ、普門示現の妙用の不可思議なることを明かしたり。仍りて天台にては十普門なる者を釋出せり、卽ち慈悲普、弘誓普、修行普、斷惑普、入法門普、神通普、方便普、說法普、供養諸佛普、成就衆生普にして、此等の十法は周徧の圓法にして能く實相に通入せしむるものなり。之を此品の文に就て云へば諸の衆生を惑みて瓔珞を受くるは慈悲普なり、慈悲あれば任運に弘誓普の義あり、種種の形を以て諸の國土に遊んで衆生を度脫するは卽ち佛國を淨むる者にして修行普なり。自ら、無縛にして能く他の縛を解き一時稱名すれば解脫を得しむるは斷惑普なり、普門示現は卽ち入法門普なり。方便力あるは方便普なり、神通力あるは神通普なり、能く說法するは說法普なり、瓔珞を受けて二分し以て二佛に上るは供養諸佛普なり、饒益

する所多きは成就衆生普なり。又天台大師の別行玄疏は通別五雙十隻の細釋ありて詳細を極む。以上略して四要品の大義を示す。これを要するに方便品はこれ吾等が依て立つべき哲學的根底を明にし安樂行品は正にその修道的實際方法を示し、壽量品は卽ちその遂に到着すべき究竟的理想を知らしめ、普門品は次で所謂最高理想の自在表現を敎ゆるに外ならず。爾者則ち此四品以て事理因果自行化他を盡くして遺すところなし、方便品は自行因中の理、安樂行品はその事行にして、この因究竟するとき壽量品の佛果を圓滿す、これを自行の因果とす。これを全ふして化他に趣くに普門圓慈の相これ普門品なり。乃至本門無作の法敎更に別に祕要を傳ふ、一朝の談に非ず。且く一葉を拾ふて大方を察するの弄引に擬すと云爾。

法華三部經解題　終

國譯無量義經

德行品第一

是の如きを我聞きき。一時佛、(一)王舍城(二)耆闍崛山の中に住したまひ(三)大比丘衆、萬二千人と俱なりき。(四)菩薩摩訶薩八萬人あり。(五)天、(六)龍、(七)夜叉、(八)乾闥婆、(九)阿脩羅、(十)迦樓羅、(十一)緊那羅、(十二)摩睺羅伽あり。諸の(十三)比丘、比丘尼、及び(十四)優婆塞、(十五)優婆夷も俱なり。(十六)大轉輪王、小轉輪王、金輪、銀輪、諸輪の王、國王、王子國臣、國民、國士、國女、國大長者、各の眷屬、百千萬數にして、而も自ら圍繞せる

【一】王舍城は中印度摩揭陀國の都、羅閱祇(Rājagṛha)の譯名にして、現にその遺址ビハール州(Behar)中ラジギル(Rajgir)村附近一帶に存ぜり。

【二】耆闍崛山(Gṛdhrakūṭa Giri)は王舍城の東北に聳え王舍山城五山の一、今のサイラギリ(Saila Giri)に當る、靈鷲山、鷲頭山又は略して靈山、鷲峰等の譯名あり。頂頭現に說法華經處の遺址と傳ふるものあり。

【三】大比丘衆。比丘は梵語苾芻(Bhikṣu)の音譯除鉢男と譯す、淸淨なる生活に依りて佛道修行に從ふものの稱。今大比丘衆と云ふは持律護戒智德超勝なる比丘中の秀拔なるものを云ふ。

【四】菩薩摩訶薩は菩提薩埵摩訶薩埵(Bodhisattva mahāsattva)の略、更に略して單に菩薩とも通稱す。覺有情大有情と譯す、自ら道を成じまた他をも成ぜしめんとの大心を有する聖者の通稱。

【五】天は提婆(Deva, Devī)の譯、天界諸神の通稱。已下の八種を八部衆と總稱するを例

と、佛の所に來詣して、頭面に足を禮し、遶ること百千帀して、香を燒き、華を散じ、種種に供養すること已りて、退きて一面に坐す。其の菩薩を名けて、(一七)文殊師利(一八)法王子、大威德藏法王子、無憂藏法王子、大辯藏法王子、彌勒菩薩、導首菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩、華幢菩薩、華光幢菩薩、陀羅尼自在王菩薩、觀世音菩薩、大勢至菩薩、常精進菩薩、寶印首菩薩、寶積菩薩、寶杖菩薩、越三界菩薩、毗摩陁羅菩薩、香象菩薩、大香象菩薩、師子吼王菩薩、師子遊戲世菩薩、師子奮迅菩薩、師子精進菩薩、勇銳力菩薩、師子威猛伏菩薩、莊嚴菩薩、大莊嚴菩薩、是の如き等の菩薩摩訶薩、八萬

とす。

【六】龍は那伽(Naga, Nagi)の譯龍神なり。

【七】夜叉(Yaksa)は鬼神の一種にして勇健、捷疾等と譯せられ、毘沙門天の眷屬と云はる。

【八】乾闥婆(Gandharva)は樂神なり、尋香行と譯す。

【九】阿修羅(Asura)は非天、不端正等と譯す、印度神話に在りては暴惡の鬼神と稱せらる。

【一〇】迦樓羅(Garuda)は金翅鳥と譯す、一切鳥類の王と稱せらる。

【一一】緊那羅(Kimnara)は歌神なり、疑神又は人非人と譯す。

【一二】摩睺羅伽(Mahoraga)は大腹行と譯す、鬼神の一種なり。

【一三】比丘比丘尼。比丘(Bhiksu)は男僧、比丘尼(Bhiksuni)は女僧。

【一四】優婆塞(Upasaka)は淸信士と譯す、在俗の信男子なり。

【一五】優婆夷(Upasikai)は淸信女と譯す、在俗の信女子なり、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四種を四衆と總稱す。

【一六】大轉輪王。轉輪聖王(Cakravartin)は印度古來の理想的帝王にして、これに二轉三轉四轉等の別あり、鐵輪王は一天下の主、銅輪王は二天下の主、銀輪王は三天下の主、金輪王は四天下の主と傳へらるゝは四轉の分類にして今の文その二を出し餘の二を略す、大轉輪王小轉輪王は大小二轉の分類に從ひ、大千世界を領するものと小千世界を領するものとに依て大小二王を分てり。

人と俱なり。是の諸の菩薩は、皆是(一九)法身大士ならざること莫し。(二〇)戒、定、慧、解脫、解脫知見の成就せる所なり。其の心禪寂にして、常に三昧に在り。恬安澹怕に無爲無欲なり。顚倒亂想復入ることを得ず、靜寂清澄に志玄虛漠なり。之を守りて動せざること億百千劫なり。無量の法門悉く現在前せり。大智慧を得て諸法に通達し、(二一)性相の眞實を曉了し、分別するに、有無、長短、明現顯白なり。

又、善能く諸の根性欲を知り、陀羅尼無碍辯才を以て、諸佛の(二二)轉法輪に隨順して能く轉ず。微潘先づ墮ちて以て欲塵を淹し、涅槃の門を開き解脫の風を扇ぎて、世の惱熱を除き、法の淸涼を致す。次に甚深の(二三)十二因緣を降して、用て無明、老病、死等の猛盛熾然なる苦聚の(二四)日光に灑ぎ、爾して乃ち洪いに無上の大乘を注ぎて、衆生の諸有の善根を潤漬し、善の種子を布きて功德の田に遍し、普く一切をして(二五)菩提の萌を發さしめ、智慧の日月、方便の時節、大乘の事業を扶蔬し增長して、衆をして疾く(二六)阿耨多羅三藐三菩提を成じ、

(一七)文殊師利法王子。以下二十九聖は八萬の大菩薩中より代表的に列擧したるもの、法華經序品に十八聖を出すと大同なり。

(一八)法王子。法王の子卽ち佛子と云ふに同じ菩薩の異名なり、又これ菩薩の位中第九住の名、四法王子は位名を出し餘は通稱を出す。

(一九)法身大士。肉身に對して法身と云ふ、法性身の義なり、中道法性の理智を以てその體とせる大菩薩なるを以て法身大士と云ふ。

(二〇)戒定慧等。この五を無漏の五蘊と總稱し、多劫修道の結果として成れる法身大士の德性なるが故に又これを五分法身とも名く。

(二一)性相の眞實とは十如實相の

常住の快樂、微妙眞實に、無量の大悲、苦の衆生を救はしむ。是諸の衆生の眞善知識、是諸の衆生の大良福田、是諸の衆生の請せざるの師、是諸の衆生の安穩の樂處、救處、護處、大依止處なり。處處に衆生の爲に、大良導師、大導師と作る。能く衆生の盲たるが爲には眼目を作し、聾・劇・瘂の者には耳鼻舌を作し、諸根毀缺せるをば能く具足せしめ、顚狂荒亂なるには大正念を作さしむ。船師、大船師なり、羣生を運載し、生死の河を度して涅槃の岸に置く。醫王、大醫王なり、病相を分別し、藥性を曉了して病に隨つて藥を授け、衆をして藥を服せしむ。調御、大調御なり、諸の放逸の行なし、猶し象馬師の、能く調ふるに調はざること無きが如く、師子の勇猛なる、衆獸を伏して、殂壞すべきこと難きが如し。菩薩の(二十)諸波羅蜜に遊戯して、如來地に於て堅固にして動せず、願力に安住して廣く佛國を淨め、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。是の諸の菩薩摩訶薩は、皆斯の如き不思議の德有り。

法門を云ふ、法華方便品の下參照すべし。

【二二】轉法輪。說法と云ふに同じ。

【二三】十二因緣とは無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死にしてこの十二相繼ぎて相續し無窮に輪轉するを生死輪廻の理法と云ふ今の甚深の十二因緣とはこれなり。

【二四】日光は火宅と云はむが如し、この三界の苦聚を喩ふ。

【二五】菩提。梵語(Bodhi)の音譯、覺、道、智等と譯す。

【二六】阿耨多羅三藐三菩提。梵語(Anuttarasamyaksambodhi)の音譯、無上正徧智と譯す、佛果菩提と云ふに同じ。

【二七】諸波羅蜜。波羅蜜は梵語(Pāramitā)の音譯、度または到彼岸と譯す、之を布施、持

其の比丘の名をば、(二八)大智舍利弗、神通目犍連、慧命須菩提、摩訶迦旃延、彌多羅尼子富樓那、阿若憍陳如等、天眼阿那律、持律優婆離、侍者阿難、佛子羅雲、優波難陀、離波多、劫賓那、薄拘羅、阿周陀、莎迦陀、頭陀大迦葉、優樓頻螺迦葉、迦耶迦葉、那提迦葉と曰ふ。是の如き等の比丘、萬二千人なり。皆(二九)阿羅漢にして、諸の結漏を盡して復縛著無く、眞正解脫(を得たる諸聖)なり。

爾の時に大莊嚴菩薩摩訶薩、遍く衆の坐して、各の定意なるを觀じ已りて、衆中の八萬の菩薩摩訶薩と俱に、座より起ちて佛の所に來詣し、頭面に足を禮し、遶ること百千帀して、天華、天香を燒散し、天衣、天瓔珞、天無價寶珠、上空の中より旋轉來下し、四面に雲集して、而も佛に獻る。天廚、天鉢器に、天の百味充滿盆溢せる、色を見香を聞ぐに、自然に飽足す。天幢、天旛、天軒蓋、天妙樂具、處處に安置し、天の伎樂を作して、佛を娛樂せしめたてまつり、卽ち前んで(三〇)胡跪し合掌し、一心に俱共に聲を同じうして、偈を說いて讚めて言

戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六種に分つ時は六波羅蜜或は六度と名け更に方便、願、力、智の四を加へて十種となす時は十波羅蜜或は十度と名く。

【二八】大智舍利弗。已下二十尊は所謂大比丘衆中代表的なる佛弟子なり。そのうち、大智、神通、慧命、天眼、持律、侍者、佛子、頭陀は何れもその尊の德稱。例せば阿難は釋尊常隨の侍者なりし故侍者の語を加へ、阿那律は諸弟子中天眼通力最も勝れたりきとて天眼阿那律と云へるが如し。

【二九】阿羅漢(Arhan)。梵語の音譯、應供、不生、殺賊等の譯あり。見惑、思惑の煩惱を斷盡して擇滅無爲の涅槃を證得したる聖者の通稱なり。

【三〇】胡跪は印度の禮法。右膝を

さく、

『大いなる哉大悟聖主、(三一)垢無く染無く著する所無し、天人象馬の調御師、道の風德の香一切に薫じて、智恬に情泊にして慮凝靜なり、(三二)意滅し識亡じて心亦寂なり、永く夢妄の思想を斷じて、復(三三)諸大陰入界無し、其の身は有に非ず亦無に非ず、因に非ず緣に非ず自他に非ず、方に非ず圓に非ず短長に非ず、出に非ず沒に非ず生滅に非ず、造に非ず起に非ず爲作に非ず、坐に非ず臥に非ず行住に非ず、動に非ず轉に非ず閑靜に非ず、進に非ず退に非ず安危に非ず、是に非ず非に非ず得失に非ず、彼に非ず此に非ず去來に非ず、青に非ず黃に非ず赤白に非ず、紅に非ず紫種種の色に非ず、(三四)戒定慧解脫知見より生じ、(三五)三昧(三六)六通(三七)道品より發り、(三八)慈悲(三九)十力(四〇)無畏より起り、衆生善業因緣より出でたり、示して(四一)丈六紫金の暉を爲し、方整照曜として甚だ明徹なり、

(三一)垢、染、著は煩惱妄執の異稱。

(三二)意、識、心は一意識の異稱。或は云ふ、前六識を識と云ひ、第七末那識を意と名け、第八阿賴耶識を心と名くと。

(三三)諸大陰入界。四大、五陰、十二入、十八界なり。

(三四)戒、定、慧、解脫、解脫知見是を無漏の五蘊と名け、又は是を五分法身とも名く。永劫修道の結果として得たる佛陀の屬性なり。

(三五)三昧。空、無相、無願の三三昧の略。三昧は梵語(Samādhi)または三摩地とも音譯し等持と譯す。禪定の異稱。

(三六)六通。天眼通、天耳通、他心通、神足通、宿命通、漏盡通の總稱。

地に著け左膝を立つ。

毫相月如く旋り項に日光あり、旋る髪紺青にして項に肉髻あり、
淨き眼明鏡の如く上下に眴ぎ、眉睫紺にして舒び方き口頰なり、
唇舌赤好にして丹華の若く、白き齒の四十なる猶珂雪のごとし、
額廣く鼻脩く面門開け、胸に萬字を表して師子の臆なり、
手足柔軟にして千輻を具へ、腋掌合縵ありて内外に握れり、
臂脩く肘長く指直に纖し、皮膚細輭にして毛右に旋れり、
踝膝露現し陰馬藏にして、細筋鎖骨鹿膊脹なり、
表裏映徹し淨して垢無く、濁水も染むること莫く塵をも受けず、
是の如き等の相三十二あり、八十種好見るべきに似たり、
而も實には相非相の色無し、一切有相の眼の對絶せり、
無相の相にして有相の身なり、衆生身相の相も亦然なり、
能衆生をして歡喜して禮し、心投じ敬を表て慇懃ある事を成しむ、
是自高我慢の除くるに因て、是の如き妙色の軀を成就し給へり、
今我等八萬の衆、俱に皆稽首して咸く、

【三二】道品。三十七科道品の略稱。四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺、八正道の通計。修道の方法種類なり。

【三八】慈悲。四無量心の略稱。慈、悲、喜、捨の四中其二を略す。

【三九】十力。是處非處力、業智力、定力、根力、欲力、性力、至處道力、宿命力、天眼力、漏盡力の總稱。佛陀の有する十種の力能。

【四〇】無畏。一切知、漏盡、說障道、說盡苦道の四無所畏の略。また佛陀の德能。

【四一】丈六紫金。已下の文佛陀の三十二相を擧げて讚嘆す。

【四二】八種。一說に八轉聲也と。

【四三】四諦。迷悟兩界の因果を說明したる四種の眞理なり。苦諦、集諦、滅諦、道諦これなり。

【四四】六度。六波羅蜜の譯、前に

善く思相心意識の、象馬闘御無著の聖に歸命したてまつる、
稽首して法色身、戒定慧解知見聚に歸依したてまつる、
稽首して妙種相に歸依し奉る。稽首して難思議に歸依し奉る、
梵音雷震の響、(四三)八種あり微妙清淨にして甚だ深遠なり、
(四四)四諦(四五)六度(四六)十二緣、衆生の心業に隨順して轉じたまふ、
若聞くこと有らば意開けて、無量生死の(四七)衆結斷せざること莫し、聞くこと有らば或は(四八)須陀洹、斯陀阿那阿羅漢、
無漏無爲の緣覺處、無生無滅の菩薩地を得、
或は無量の(四九)陀羅尼、(四九)無碍の樂說大辯才を得て、
甚深微妙の偈を演說し、遊戲して法の清渠に澡浴し、
或は躍り飛騰して神足を現じ、水火に出沒して身自由なり、
如來の法輪相是の如く、清淨無邊にして思議し難し、
我等咸復共に稽首して、法輪を轉給に時を以するに歸命し奉る、
稽首して梵音聲に歸依し奉る、稽首して(五〇)緣諦度に歸依し奉る、

示すが如し。

【四四】十二緣。十二因緣の略、字句を整むが爲に略せるなり。

【四五】衆結。諸の煩惱と云ふと。

【四六】須陀洹以下の十字は字句を整へんがための略語なり。須陀洹は梵語(Sroto-āpanna)預流果と譯す。斯陀は梵語斯陀含(Sakrdāgāmin)の略、一來果と譯す、阿那は梵語阿那含(Anāgāmin)の略、不還果と譯す、阿羅漢(Arhan)は前に示せるが如し。以上の四種なこれを四果の聖者と總稱し、終局阿羅漢果に到著するに至る修道上の歷程なり。所謂聲聞の位なり。

【四八】陀羅尼(Dhāraṇī)なる梵語の音譯、總持、能遮等の譯なり。種々の善法を集持して失はず、又能く一切の害障を遮

世尊往昔の無量劫に、勤苦に衆の德行を修習して、
我人天龍神王の爲にし、普く一切の諸の衆生に及ぼしたまへり、
能く一切の諸の捨て難き、財寶妻子及び國城を捨てて、
法の內外に於て悋む所無く、頭目髓腦悉く人に施せり、
諸佛の淸淨の禁を奉持して、乃至命を失へども毀傷したまはず、
若人刀杖をもて來つて害を加へ、惡口罵辱すれ共終に瞋り給はず、
劫を經て身を挫も倦惰し給ず、晝夜に心を攝て常に(五)禪に在り、
遍く一切の衆の道法を學して、智慧深く衆生の根に入り給へり、
是の故に今自在の力を得て、法に於て自在にして法王と爲給へり、
我復咸く共に俱に稽首して、能諸の勤難を勤給るに歸依し奉る。』

して起らざらしむるの用。

【四九】無礙の樂說大辯才。無礙は四無礙辯の略、說法に自在なる四種の智辯なり、またこれを四無礙智とも云ふ。法無礙、義無礙、詞無礙、樂說無礙の四種にしてその第四を樂說大辯才と云ふ。衆生の根性欲望を知りて說法の無礙利益無窮なる辯才の謂なり。

【五〇】緣諦度。は十二因緣、四聖諦、六度の略なり。

【五一】禪。禪那の略。梵語(Dhyāna)の音譯。靜慮と譯す。禪定と云ふに同じ。

說法品第二

爾の時に、大莊嚴菩薩摩訶薩、八萬の菩薩摩訶薩と、是の偈を說きて佛を讚めたてまつること已りて、俱に佛に白して言さく、『世尊、我等八萬の菩薩の衆、今者如來の法の中に於て、諮問する所有らんと欲す。不審し世尊、愍聽を垂れたまひなんや、不や。』佛、大莊嚴菩薩及び八萬の菩薩に告げて言はく、『善い哉善い哉、善男子、善く是時なることを知れり。汝、所問を恣にせよ。如來は久しからずして、當に(一)般涅槃すべし。涅槃の後も、普く一切をして、復餘の疑無からしめん。何の所問をか欲する、便ち之を說く可し。』是に於て大莊嚴菩薩、八萬の菩薩と、卽ち共に聲を同うして佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成することを得んと欲せば、當に何等の法門をか修行すべき。何等の法門か能く菩薩摩訶薩をして、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成せしむる。』佛、大莊嚴菩薩、及び八萬の菩薩に告げて言はく、『善男子、一つの法門有り。能く菩薩をして、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成することを得しむ。若し菩薩ありて是の法門を學せば、則ち能く阿耨多羅三

【一】般涅槃。梵語(Parinirvāṇa)の音譯。圓寂、滅度等と翻す。略して涅槃(Nirvāṇa)と云ふことあり。一切の煩惱を斷滅して眞如法性の妙理を證得したる大悟の境界の通稱なれども今は如來の死を顯はす語として用ひらる。

藐三菩提を得ん。』世尊、是の法門とは、號をば何等と字くる。其の義云何。菩薩は云何が修行せん。』佛の言はく、『善男子、是の一つの法門をば、名けて無量義と爲す。菩薩、無量義を修學することを得んと欲せば、當に一切諸法は、(二)自ら本來今も、性相空寂にして、無大無小、無生無滅、非住非動、不進不退、猶虛空の如し、二法有ること無しと觀察すべし。而るに諸の衆生、虛妄に是は此是は彼、是は得是は失と橫計して、不善の念を起し、衆の惡業を造りて(三)六趣に輪廻し、諸の苦毒を受けて、無量億劫に自ら出づること能はず。菩薩摩訶薩、是の如く諦かに觀じて憐愍の心を生じ、大慈悲を發して、將に救拔せんと欲し、又復、深く一切の諸法に入る。法の相、是の如くして是の如き法を生ず。法の相、是の如くして是の如き法に住す。法の相、是の如くして是の如き法を異す。法の相、是く如くして是の如き法を滅す。法の相、是の如くして能く惡法を生ず。法の相、是の如くして能く善法を生ず。住異滅も亦復是の如し。菩薩、是の如く(四)四相の始末を觀察して、悉く遍く知り已り、次に復、諦かに一切の諸法は、念念に住せず、新新に生滅すと觀じ、復、卽時に生住異滅すと觀せよ。是の如く觀じ已りて、而して衆生の

【二】自ら本來今。此句、傳敎大師の釋に、總じて十世を擧ぐと云ひ、本と來と今とを次の如く過去の三世と未來の三世と現在の三世とに配釋せり。

【三】六趣。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、これを六道、六趣、六界等と云ふ。

【四】四相。次上の本文に見えたる生、住、異、滅を四相と總稱す。

諸の根性欲に入る。性欲無量なるが故に說法無量なり。說法無量なるが故に義も亦無量なり。

㊄無量義とは一法より生ず。其の一法とは卽ち無相なり。是の如き無相は、相無く相ならず。相無きを、名けて㊅實相と爲す。菩薩摩訶薩、是の如き眞實の相に安住し已りて、發す所の慈悲、明諦にして虛しからず。衆生の所に於て、眞に能く苦を拔く。苦旣に拔き已りて、復爲に法を說き、諸の衆生をして快樂を受けしむ。善男子、菩薩、若し能く是の如く、一切の法門無量義を修せん者は、必ず疾く、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ん。善男子、是の如き甚深無上の大乘無量義經は、文理眞正に、尊にして過上無し。三世の諸佛の、共に守護したまふ所なり。衆魔羣道、得入すること有ること無く、一切の邪見生死に壞敗せられず。是の故に善男子、菩薩摩訶薩、若疾く、無上菩提を成せんと欲せば、當に是の如き、甚深無上の大乘無量義經を修學すべし。『爾の時に大莊嚴菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、世尊の說法は不可思議なり。衆生の根性も亦不可思議なり。法門解脫も亦不可思議なり。我等、佛の所說の諸法に於て、復、疑難無けれども、而も諸の衆生、迷惑の心を生せんが故に、重ねて世尊に諮ひたてまつる。如來

【五】無量義とは一法より生ず、これより已下敷行、これこの經破地獄の文なり等閑に讀過すること勿れ。

【六】實相。法華經中に廣說せる諸法實相の理趣全くこの二字に在り。次上に無相と云ひ、一法と云ひ、不相と云ふ皆同義の異語なり。餘經には法性、眞如、如く藏、法身等と說來と全く同じ。

の（七）得道より已來四十餘年、常に衆生の爲に、諸法の四相の義、苦の義、空の義、無常、無我、無大、無小、無生、無滅、一相、無相、法性、法相、本來空寂、不來不去、不出不沒を演說したまふ。若聞くこと有る者は、或は（八）煖法、頂法、世第一法、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、（九）辟支佛道を得、菩提心を發し、（10）第一地、第二地、第三地に登り、第十地に至りき。住日說きたまふ所の諸法の義と今說きたまふ所と何等か異ること有らんに、而も甚深無上の大乘無量義經のみ菩薩修行せば（二）必ず疾く無上菩提を成ずることを得んと言ふや。是の事云何。唯願はくば世尊、一切を慈哀して、廣く衆生の爲に、而も之を分別し、普く現在及び未來世に、法を聞くこと有らん者をして、餘の疑網無からしめたまへ。』是に於て佛、大莊嚴菩薩に告げたまはく、『善い哉善い哉大善男子、能く如來に是の如き、甚深無上の大乘微妙の義を問へり。當に知るべし。汝能く利益する所多く、人天を安樂し、苦の衆生を拔く。眞の大慈悲なり、信實にして虛しからず。是の因緣を以て、必ず疾く無上菩提を成ずること

【七】得道。得阿耨多羅三藐菩提の略語にして成佛と云ふと同じ。

【八】煖法。煖、頂、忍、世第一の四法を合して四善根位と名け、又は四加行位とも云ふ。今忍法なきは文の略のみ。

【九】辟支佛道。梵語（Pratyeka Buddha）の音譯辟支佛は緣覺と譯す。道は道果の義なり。緣覺と云へる道果と云ふこと。

【10】第一地。菩薩の道位に委しくは五十二位、略して十地あり。今はその十地中の第一地なり。

【二】必ず疾く。疾の一字々眼。

を得ん。亦一切の今世、來世の諸有の衆生をして、無上菩提を成ずることを得しめん。善男子、我先に(一二)道場(一三)菩提樹下に、端坐すること(一四)六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。佛眼を以て一切の諸法を觀ずるに、宣べ說くべからず。所以は何ん。諸の衆生の、性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば、種種に法を說き、種種に法を說くこと方便力を以てす。(一五)四十餘年には未だ眞實を顯さず。是の故に衆生の(一六)得道差別して、疾く無上菩提を成ずることを得ず。善男子、法は譬へば水の能く垢穢を洗ふに、若は井、若は池、若は江、若は河、溪、渠、大海、皆悉く能く諸有の垢穢を洗ふが如く、其の法水も亦復是の如し。能く衆生の諸の煩惱の垢を洗ふ。善男子、水の性は是れ一つなれども、江、河、井、池、溪、渠、大海、各各別異なり。其の法性は亦復是の如し。(一七)塵勞を洗除すること、等しくして差別無けれども、(一八)三法、(一九)四果、(二〇)二道不一なり。善男子、水は俱に洗ふと雖も、而も井は池に非ず。池は江河に非ず。溪渠は海に非

【一二】道場。梵語菩提曼荼羅(Bodhimaṇḍa)を譯して、道場と云ふ。佛成道の處と云ふ意なり。

【一三】菩提樹。梵語(Bodhi-druma)道樹と譯す。實名は畢鉢羅(Pipral)樹なり、釋尊この樹下金剛寶座上に坐して大覺を成じ給ふ。今の印度佛陀伽耶(Buddhagaya)の聖地その遺址なり。

【一四】六年。一說に曰く二十九歲出家三十五歲成道と。この說東四の學者最も多く依用す。

【一五】四十餘年。成道の年より此經の說時までを數へて曰ふ。この四十餘年未顯眞實の句は古來有名なり、法華三經の說時を攷定すべき文として、また法華經と餘經との權實を判別する要文として何れもこの二句を重視す。

す。如來世雄の、法に於て自在なるが如く、所說の諸法も亦復是の如し。初、中後の說、皆能く衆生の煩惱を洗除すれども、而も初は中に非ず。而も中は後に非ず。初、中、後の說、文辭一なりと雖も、而も義各異なり。善男子、我(三一)樹王を起ちて(三二)波羅奈鹿野園の中に詣りて、(三三)阿若拘隣等の五人の爲に、四諦の法輪を轉せし時も、亦諸法は本より來空寂なり、代謝して住せず、念念に生滅すと說き。中間此及び處處に於て、諸の比丘並びに衆の菩薩の爲に、十二因緣、六波羅蜜を辯演し宣說せしに、亦諸法は本來空寂なり、代謝して住せず、念念に生滅すと說き。今復此に於て、大乘無量義經を演說するに、亦諸法は本來空寂なり、代謝して住せず、念念に生滅すと說く。善男子、是の故に初說、中說、後說、文辭是一なれども、而も義別異なり。義異なるが故に衆生の解異なり。解異なるが故に、得法、得果、得道亦異なり。善男子、初め四諦を說きて、聲聞を求むる人の爲にせしかども、而も八億の諸天、來下し法を聽きて菩提心を發し、中ごろ處處に

【二六】得道差別。三乘差別の意なり。差別の語字眼。
【二七】塵勞。煩惱と云ふに同じ、
【二八】三法。三箇の法門と云ふこと、四諦、十二因緣、六度の三法門なり。
【二九】四果。須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を總稱す。
【三〇】二道。權實二道なり。一乘は實道。三乘は權道なり。
【三一】樹王。道場に存する菩薩樹の敬稱。
【三二】波羅奈鹿野園。波羅奈は印度(Vārāṇasī)國の名。今のベナレス(Benares)これなり。鹿野園(Mṛigadāva)は今のベナレス市附近四英里に存する遺址サーラナタ(Sāranatha)はこれなり。釋尊初轉法輪卽最初說法の聖地として古來有名なり。

於て、甚深の十二因緣を演說して、辟支佛を求むる人の爲にせしかども、而も無量の衆生菩提心を發し、或は聲聞に住しき。次に(三)方等十二部經、(三)摩訶般若、華嚴海空を說きて、菩薩の歷劫修行を宣說せしかども、而も百千の比丘、萬億の人天、無量の衆生、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢果、辟支佛、因緣の法の中に住することを得。善男子、是の義を以ての故に知りぬ、說は同じけれども、而も義は別異なることを。義異なるが故に衆生の解異なり。解異なるが故に、得法、得果、得道亦異なり。善男子、我道を得て、初めて起ちて法を說きしより、今日、大乘無量義經を演說するに至るまで、未だ曾て苦、空、無常、無我、非眞、非假、非大、非小、本來生せず、今亦滅せず。一相、無相、法相、法性、不來、不去にして、而も諸の衆生四相に遷さるることを說かず。善男子、是の義を以ての故に、一切の諸佛は二言有ることなく、能く一音を以て普く衆の聲に應じ、能く一身を以て、百千萬億(三六)那由他無量無數(三七)恆河沙の身を示し、一一の身の中に、又若

(三)阿若拘隣等の五人。とは阿若憍陳如(Ajnâta Kaundinya)を略して阿若と云ふ。拘隣はまた拘利、摩訶男とも記し、別に頻鞞、跋提、十力迦葉の三人を加へて釋尊の最初に度せられし五比丘と總稱す。

(三)方等十二部經。方等は方廣平等の義にして大乘と云ふに同じ、十二部經はまたは十二分教とも云ひ、長行、重頌、授記、孤起、無問自說、因緣、譬喩、本事、本生、方廣、未曾有、論議、なる聖典の文學的樣式に十二種あるの稱なり。

(三)摩訶般若。梵名(Maha Prajna Paramita Sûtra)即大般若經の謂なり。その具足せるものは現存六百卷の大般若經これなり。

干の百千萬億那由他(二八)僧阿祇恆河沙、種種の類形を示し、一一の形の中に、又若干の百千萬億那由他阿僧祇恆河沙の形を示す。善男子、是則ち諸佛の不可思議甚深の境界なり、(二九)二乘の知る所に非ず、唯佛と佛とのみ、乃し能く究了したまへり。善男子、是の故に我說く、「微妙甚深無上の大乘無量義經は、文理眞正なり、尊にして過上無し。三世の諸佛の共に守護したまふ所、衆魔外道得入すること有ること無し。一切の邪見、生死に壞敗せられず」と。菩薩摩訶薩、若疾く無上菩提を成せんと欲せば、當に是の如きの、甚深無上の大乘無量義經を修學すべし。』佛、是を說きたまふこと已るや、是に於て三千大千世界、(三〇)六種に震動し、自然に空中より、種種の天華、天の優鉢羅華、鉢曇摩華、拘物頭華、分陀利華を雨し、又、無數種種の天香、天衣、天瓔珞、天無價の寶を雨し、上空の中より施轉して來下し、佛及び諸の菩薩、聲聞、大衆に供養す。天廚、天鉢器に、天百味食充滿盈溢し、天幢、天旛、天軒蓋、天妙樂具、處處に安置し、天の伎樂を作して、佛を歌歎したてまつる。又復六種に、東方恆河沙等の諸佛の世界を震動し、亦天華、天香、

(二八)那由他は(Nayuta)の音譯にして印度の數目千億と云ひ或は萬億と譯す。

(二九)恆河沙。恆河は印度の河名(Ganga)なり。この河中に存する沙數に寄せて無限を示すに恆河沙と云ふこと佛教文學の普通とするところなり。

(三〇)阿僧祇は(Asamkhya)の音譯にして印度の數目なり。無數と譯す。

(二九)二乘。聲聞乘と緣覺乘とを合して二乘と通稱す。

(三〇)六種に震動。六種に大地の動くことにて、六種とは、動、起、涌、震、吼、擊なり。

天衣、天瓔珞、天無價寶、天廚、天鉢器、天百味、天幢、天旛、天軒蓋、天妙樂具を雨し、天の伎樂を作して、彼の佛及び彼の菩薩、聲聞、大衆を歌歎したてまつる。南西北方、四維上下も亦復是の如し。是に於て衆中の、四萬二千の菩薩摩訶薩は、無量義三昧を得、三萬四千の菩薩摩訶薩は、無數無量の陀羅尼門を得、能く一切三世の諸佛の不退の法輪を轉ず。其の諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、大轉輪王、小轉輪王、銀輪、鐵輪、諸輪の王、國王、王子國臣、國民、國士、國女、國大長者、及び諸の眷屬百千衆、俱に佛如來の、是の經を說きたまふを聞きたてまつる時、或は煩法、頂法、世間第一法、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛果を得、又菩薩の、(三)無生法忍を得、又一陀羅尼を得、又二陀羅尼を得、又三陀羅尼を得、又四陀羅尼、五六七八九十陀羅尼を得、又百千萬億陀羅尼を得、又無量無數、恆河沙、阿僧祇陀羅尼を得て、皆能く隨順して、不退轉の法輪を轉ず。無量の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提の心を發しき。

【三】無生法忍とは中道の妙理を證得したる聖智なり。無生法とは無生滅法卽不生不滅の眞理を云ふ、この眞理卽中道の妙理に對して忍可決定の智を有するの義を無生法忍と云ふ。

十功德品第三

爾の時に大莊嚴菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、『世尊、世尊是の微妙甚深無上の、大乘無量義經を說きたまふ。眞實甚深、甚深、甚深なり。所以は何ん。此の衆の中に於て、諸の菩薩摩訶薩、及び諸の四衆、天、龍、鬼神、國王、臣民、諸有の衆生、是の甚深無上の大乘無量義經を聞きて、陀羅尼門、三法、四果、(一)菩提の心を獲得せざること無し。當に知るべし。此の法は文理眞正に、尊にして過上無し。三世の諸佛の守護したまふ所なり。衆魔羣道得入すること有ること無し。一切の邪見生死に壞敗せられず。所以は何ん。一たび(この經を)聞けば、能く一切の法を持つが故に。若衆生有りて是の經を聞くことを得れば、則ち爲大利なり。所以は何ん。若能く修行すれば、必ず疾く無上菩提を成ずることを得ればなり。其れ衆生有りて、聞くことを得ざる者は、當に知るべし。是等は爲大利を失へるなり。無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぐれども、終に無上菩提を成ずることを得ず。所以は何ん。菩提の大直道を知らざるが故に。險しき徑を行くに留難多きが故なり。世尊、是の經典は不可思議なり。唯願はくば世尊、廣く大衆の爲に慈愍して、是の經の甚深不思

【一】菩提の心。具には阿耨多羅三藐三菩提心と云ふべし。普通に菩提心と略稱す。

議の事を敷演したまへ。世尊、是の經典は何れの所よりか來り、去りて何れの所にか至り、住りて何れの所にか住する。乃ち是の如き無量の功德、不思議の力有りて、衆をして、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成せしめたまふや。』

爾の時に世尊、大莊嚴菩薩摩訶薩に告げて言はく、『善い哉善い哉善男子、是の如し是の如し。汝が說く所の如し。善男子、我是の經を說くこと、甚深甚深眞實甚深なり。所以は何ん。衆をして、疾く無上菩提を成せしむるが故に。一たび聞けば、能く一切の法を持つが故に。諸の衆生に於て、大いに利益するが故に。大直道を行じて留難無きが故に。善男子、汝、是の經は何れの所よりか來り、去りて何れの所にか至り、住まりて何れの所にか住する」と問はば、當に善く諦かに聽くべし。善男子、此の經は、本、(二)諸佛の室宅の中より來り、去りて一切衆生の發菩提心に至り、諸の菩薩所行の處に住す。善男子、是の經は是の如く來り、是の如く去り、是の如く住したまへり。是の故に是の經は、能く是の如き無量の功德、不思議の力有して、衆をして疾く無上菩提を成せしむ。善男子、汝、寧ろ是の經に、(三)復十の不思議の功德力有すを聞かんと欲するや、不や。』

【二】諸佛の室宅。諸佛大慈悲の德を喩へて室宅と云ふ。

【三】十の不思議功德力とは以下の經文に次第に說ける十種の不思議力を云ふ。今その名を示せば、一、淨心不思議力。二、衆生不思議力。三、船佛不思議力。四、王子不思議力。五、龍子不思議力。六、治等不思議力。七、賞封不思議力。

大莊嚴菩薩の言さく、『願樂はくば聞きたてまつらんと欲す。』佛の言はく、『善男子、第一に是の經は、能く菩薩の未だ發心せざる者をして、菩提心を發さしめ、(四)慈仁無き者には、慈仁を起さしめ、殺戮を好む者には、大悲の心を起さしめ、嫉妬を生ずる者には、隨喜の心を起さしめ、愛著有る者には、能捨の心を起さしめ、(五)諸の慳貪の者には、布施の心を起さしめ、憍慢多き者には、持戒の心を起さしめ、瞋恚盛なる者には、忍辱の心を起さしめ、懈怠を生ずる者には、精進の心を起さしめ、諸の散亂の者には、禪定の心を起さしめ、愚癡多き者には、知慧の心を起さしめ、(六)未だ彼を度すること能はざる者には、彼を度する心を起さしめ、(七)十惡を行ずる者には、(八)十善の心を起さしめ、有爲を樂ふ者には、無爲の心を志さしめ、退心有る者には、不退の心を作さしめ、(九)有漏を爲す者には、(10)無漏の心を起さしめ、煩惱多き者には、除滅の心を起さしむ。善男子、是を是の經の第一の功德、不思議の力と名く。

八、得忍不思議力。九、拔濟不思議力。十、登地不思議力これなり。以下の文を照合して知るべし。

【四】慈仁以下の文能捨の心に至るまでは、これ四無量心を明す。

【五】諸の慳貪以下の文智慧の心に至るまでは、六度心を明す。

【六】未だ彼を度する以下の文除滅の心を起さしむに至るまでは、六種心を明す。

【七】十惡。殺生、偷盜、邪淫(以上は身體の三惡)、妄語、綺語、惡口、兩舌、以上は口舌の四惡)、貪欲、瞋恚、愚癡(以上は心中の三惡)をいふ。所謂身三口四意三の十惡なり。

【八】十善。十惡に准じて知るべし。

善男子、第二に是の經の不可思議の功德力とは、若衆生有りて、是の經を聞くことを得ん者、若は一轉、若は一偈、乃至一句もせば、則ち能く百千億の義を通達して、無量數劫にも受持する所の法を演說すること能はじ。所以は何ん。其是の法は、無量義なるを以ての故に。善男子、是の經は、譬へば一の種子より百千萬を生じ、百千萬の中より、一一に復百千萬數を生ず。是の如く展轉して乃至無量なるが如く、是の經典も亦復是の如し。一法より百千の義を生じ、百千の義の中より、一一に復百千萬數を生じ、是の如く展轉して、乃至無量無邊の義あり。是の故に此の經を無量義と名く。善男子、是を是の經の第二の功德、不思議の力と名く。

【九】有漏。煩惱と云ふに同じ。
【一〇】無漏。有漏煩惱無きを云ふ。

善男子、第三に是の經の不可思議の功德力とは、若衆生有りて、是の經を聞くことを得て、若は一轉、若は一偶、乃至一句もせば、百千萬億の義に通達し已りて、煩惱有りと雖も、煩惱無きが如く、生死に出入すれども、怖畏の想無けん。諸の衆生に於て、憐愍の心を生じ、一切の法に於て、勇健の想を得ん。壯なる力士の、諸有の重き者を、能く擔ひ能く持つが如く、是の持經の人も、亦復是の如し。能く無上菩提の重き寶を荷ひ、衆生を擔負して生死の道を出す。未だ自ら度すること能はざれども、已に能く彼を度せん。猶は船師の身重病に嬰り、四體御らずして、此

の岸に安止すれども、好き堅牢の舟船の、常に諸の彼を度する者の、具を辨せること有るを給與して、而も去らしむるが如く、是の持經者も亦復是の如し。(二)五道諸有の身、(三)百八の重病に嬰り、恆常に相纏して、無明老死の此岸に安止せりと雖も、而も堅牢なる此の大乘經無量義の、能く衆生を度することを辨ずること有るを、說の如く行ずる者は、生死を度することを得るなり。善男子、是を是の經の第三の功德、不思議の力と名く。

善男子、第四に是の經の不可思議の功德力とは、若衆生有りて、是の經を聞くことを得て、若は一轉、若は一偈、乃至一句もせば、勇健の想を得て、未だ自ら度せずと雖も、而も能く他を度せん。諸の菩薩を以て眷屬と爲し、諸佛如來常に是の人に向ひて、而も法を演說したまはん。是の人聞き已りて、悉く能く受持し、隨順して逆はじ。轉た復人の爲に宜しきに隨ひて廣く說かん。善男子、是の人は、譬へば國王と夫人と新に王子を生せん。若は一日、若は二日、若は七日に至り、若は一月、若は二月、若は七月に至り、若は一歲、若は二歲、若は七歲に至り、復國事を領理すること能はずと雖も、已に臣

【二】五道諸有。五道は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間の總稱にして或は五趣とも云ふ。諸有とは有は迷界の異稱、迷界に多種あり、三界を三有と云ひ、更に細別して二十五有と爲す等なり。故に諸有と云ふ。

【三】百八の重病とは百八種の煩惱と云ふに同じ、重病は喩語なり。百八の數は一義に見惑八十八使と修惑十種とこれに十纏を加へたるものと。また一義に云ふ、六根六境各三受不同あり更に三世に約するが故に百八煩惱となると。

民に宗み敬はれ、諸の大王の子を以て伴侶と爲ん。王及び夫人、愛心偏に重くして、常に與し共に語らん。所以は何ん。「稚小なるを以ての故に」といはんが如く、善男子、是の持經者も亦復是の如し。諸佛の國王と、是の經の夫人と和合して、共に是の菩薩の子を生ず。若菩薩此の經を聞くことを得て、若は一句、若は一偈、若は一轉、若は二轉、若は十、若は百、若は千、若は萬、若は億萬恆河沙、無量無數せば、復眞理の極を體ること能はずと雖も、復三千大千の國土を震動し、(三)雷奮梵音を以て、大法輪を轉ずること能はずと雖も、已に一切の四衆八部に宗み仰がれ、諸の大菩薩を以て眷屬と爲ん。深く諸佛の祕密の法に入りて、演說すべき所違ふこと無く、失無く、常に諸佛に護念し、慈愛偏に覆はれん。新學なるを以ての故に。善男子、是を是の經の第四の功德、不思議の力と名く。

善男子、第五に是の經の不可思議の功德力とは、若善男子、善女人、若は佛の在世、若は滅度の後に、其是の如き甚深無上の大乘無量義經を受持し、讀誦し、書寫すること有らん。是の人復具縛煩惱にして、未だ諸の凡夫の事を遠離すること能はずと雖も、而も能く大菩薩の道を示現し、一日を演べて以て百劫と爲し、百劫を亦能く促めて一日と爲して、彼の衆生をして、歡喜し信伏

(三)雷奮梵音。梵音は如來說法の音聲に名く。雷奮は奮雷と云ふに同じ、梵音の德化廣大なるを形容したるなり。

せしめん。善男子、是の善男子、善女人、譬へば龍の子の、始めて生れて七日に卽ち能く雲を興し、亦能く雨を降すが如し。善男子、是を是の經の第五の功德、不思議の力と名く。

善男子、第六に是の經の不可思議の功德力とは、若善男子、善女人、若は佛の在世、若は滅度の後に、是の經典を受持し、讀誦せん者は、煩惱を具せりと雖も、而も衆生の爲に法を說きて、煩惱生死を遠離し、一切の苦を斷ずることを得しめん。衆生聞き已りて修行して、得法、得果、得道すること、佛如來と等しくして差別無けん。譬へば王子、復稚小なりと雖も、若王の巡遊し、及び疾病するに、是の王子に委せて國事を領理せしむ。王子是の時に、大王の命に依つて、法の如く羣僚百官を敎令し、正化を宣流するに、國土の人民、各の其の要に隨つて、大王の治するが如く、等しくして異なること有ること無きが如く、持經の善男子、善女人も亦復是の如し。若は佛の在世、若は滅度の後に、是の善男子、未だ(一四)初不動の地に住することを得ずと雖も、佛の是の如く敎法を用說したまふに依りて、而も之を敷演せんに、衆生聞き已りて一心に修行せば、煩惱を斷除し、得法、得果、乃至得道せん。善男子、是を是の經の第六の功德、不思議の力と名く。

善男子、第七に是の經の不可思議の功德力とは、若は善男子、善女人、佛の在世、若は滅度の

【一四】初不動地。菩薩十地の位中最初の不動地なり。

後に於て、是の經を聞くことを得て歡喜し信樂し、希有の心を生じ、受持し、讀誦し、書寫し、解說し、說の如く修行し、菩提心を發し、諸の善根を起し、大悲の意を興して、一切の苦惱の衆生を度せんと欲せば、未だ六波羅蜜を修行することを得ずと雖も、六波羅蜜自然に在前し、卽ち是の身に於て、無生法忍を得、生死煩惱、一時に斷壞して菩薩の第七の地に昇らん。譬へば健かなる人の、王の爲に怨を除くに、怨既に滅し已りぬれば、王大いに歡喜して、賞賜するに半國の封を、悉く以て之に與へんが如く、持經の善男子、善女人も亦復是の如し。諸の行人に於て、最も爲勇健なり。六度の法寶求めざるに至ることを得、生死の怨敵自然に散壞し、無生忍の半佛國の寶を證し、封の賞ありて安樂ならん。善男子、是を是の經の第七の功德、不思議の力と名く。

善男子、第八に是の經の不可思議の功德力とは、若善男子、善女人、若は佛の在世、若は滅度の後に、人有りて能く是の經典を得たらん者は、敬信すること佛身を視たてまつるが如く、等しくして異なる無からしめ、是の經を愛樂して、讀誦し、書寫し、頂戴し、法の如く奉行し、(一五)戒忍を堅固にし、兼て(一六)檀度を行じ、深く慈悲を發して、此の無上の大乘無量義經を以て、廣く人の爲に說かん。若人先より來た、都て罪福有ることを信ぜざる者には、是

【一五】戒忍。戒律卽ち道德と忍辱卽ち忍耐となり、六度中の一。
【一六】檀度。檀那波羅蜜(Dāna Pāramitā)の略。布施波羅蜜のこと。六度の一なり。

の經を以て之を示して、種種の方便を設け、強ひて化して信せしめん。經の威力を以ての故に。其の人の信心を發し、欻然として回することを得ん。信心既に發して、勇猛精進するが故に。能く是の經の威德勢力を得て、得道得果せん。是の故に善男子、善女人、化を蒙るの功德を以ての故に。男子女人、卽ち是の身に於て無生法忍を得、上地に至ることを得て、諸の菩薩と、以て眷屬と爲して、速かに能く衆生を成就し、佛國土を淨め、久しからずして無上菩提を成ずることを得ん。善男子、是を是の經の第八の功德、不思議の力と名く。

善男子、第九に是の經の不可思議の功德力とは、若善男子、善女人、若は佛の在世、若は滅度の後に、是の經を得ること有りて、歡喜踊躍し、未曾有なることを得て、受持し、讀誦し、書寫し、供養し、廣く衆人の爲に是の經の義を分別し解說せん者は、卽ち(一七)宿業の餘罪重障、一時に滅盡することを得。卽ち淸淨なることを得て、大辯を逮得し、次第に諸の波羅蜜を莊嚴し、諸の三昧、首楞嚴三昧を獲、大總持門に入り、勤精進力を得て、速かに上地に超ゆることを得、善能く分身散體して、十方の國土に遍し、一切(一八)二十五有の極苦の衆生を拔濟して、悉く解脫せしめん。是の故に、是の經に此の如きの力有す。

【一七】宿業。前生に爲したる業作と云ふこと。

【一八】二十五有。一切の迷界を總括したる名にして、須彌四洲、四惡趣、六欲天、梵天、那含天、四禪天、四無色天、これなり。

善男子、是を是の經の第九の功德、不思議の力と名く。

善男子、第十に是の經の不可思議の功德力とは、若善男子、善女人、若は佛の在世、若は滅度の後に、若是の經を得て、大歡喜を發し、稀有の心を生じ、既に自ら受持し、讀誦し、書寫し、供養し、說の如く修行し、復能く廣く在家、出家の人を勸めて受持し、讀誦し、書寫し、供養し、解說し、法の如く修行せしめん。既に餘人をして、是の經を修行せしむる力の故に、得道得果せん。皆是の善男子、善女人の、慈心をもて懃ろに化する力に由るが故に。是の善男子、善女人は、卽ち是の身に於て、便ち無量の諸の陀羅尼門を逮得せん。凡夫地に於て、自然に初めの時に、能く無數阿僧祇の弘誓大願を發し、深く能く一切衆生を救はんことを發し、大悲を成就し、廣く能く衆の苦を拔き、厚く善根を集めて一切を饒益せん。而して法の澤を演べて、洪いに枯涸せるに潤し、能く法の藥を以て諸の衆生に施し、一切を安樂し、漸見超登して（九）法雲地に住せん。恩澤普く潤し、慈み被らしむること外無く、苦の衆生を攝して道跡に入らしめん。是の故に此の人は、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ん。善男子、是を是の經の第十の功德、不思議の力と名く。

善男子、是の如き無上の大乘無量義經は、極めて大威神の力有して、尊にして過上無し。能く

（九）法雲地。菩薩十地中の第十地の名なり。

諸の凡夫をして、皆聖果を成じ、永く生死を離れて、皆自在なることを得しめたまふ。是の故に是の經を無量義と名くるなり。能く一切衆生をして、凡夫地に於て、諸の菩薩の無量に道牙を生起せしめ、功德の樹をして、鬱茂扶疏增長せしめたまふ。是の故に是の經を不可思議の功德力と號く。』時に大莊嚴菩薩摩訶薩、及び八萬の菩薩摩訶薩、聲を同じうして佛に白して言さく、『世尊、佛の所說の如き、甚深微妙無上の大乘無量義經は、文理眞正に、尊にして過上無し。三世の諸佛の共に守護したまふ所、衆魔羣道得入すること無く、一切の邪見生死に壞敗せられず。是の故に此の經は、乃ち是の如き十の功德、不思議の力有す。大いに無量の一切衆生を饒益し、一切の諸の菩薩摩訶薩をして、各無量義三昧を得、或は百千の陀羅尼門を得しめ、或は菩薩の諸地諸忍を得、或は緣覺羅漢の四道果證を得しめたまふ。世尊、慈愍して快く我等の爲に、是の如き法を說いて、我をして大いに法利を獲しめ給ふ。甚だ爲奇特にして未曾有なり。世尊の慈恩、實に報ずべきこと難し。』是の語を作し已りし爾の時に、三千大千世界六種に震動し、上空の中より、復種種の天華、天優鉢羅華、鉢曇摩華、拘物頭華、分陀利華を雨し、又無數種種の天香、天衣、天瓔珞、天無價の寶を雨して、上空の中より旋轉して來下し、佛及び諸の菩薩、聲聞大衆に供養す。天廚、天鉢器に天百味充滿盈溢せる、色を見香を聞ぐに自然に飽足す。天幢、天旛、天軒

蓋、天妙樂具處處に安置し、天の伎樂を作して佛を歌歎す。又復六種に、東方恆河沙等の諸佛の世界を震動す。亦天華、天香、天衣、天瓔珞、天無價の寶を雨し、天廚、天鉢器、天百味、色を見香を聞ぐに自然に飽足す。天幢、天旛、天軒蓋、天妙樂具處處に安置し、天の伎樂を作して、彼の佛及び諸の菩薩、聲聞、大衆を歌歎す。南西北方、四維上下も亦復是の如し。爾の時に佛、大莊嚴菩薩摩訶薩、及び八萬の菩薩摩訶薩に告げて言はく、『汝等、當に此の經に於て、深く敬心を起し、法の如く修行し、廣く一切を化して、懃心に流布すべし。常に當に慇懃に、晝夜に守護して、諸の衆生をして、各法利を獲しむべし。汝等、眞に是大慈大悲なり。以て神通の願力を立てて、是の經を守護して、疑滯せしむること勿れ。汝當時に於て、必ず廣く閻浮提に行せしめ、一切衆生をして、見聞し、讀誦し、書寫し、供養することを得しめよ。是を以ての故に、亦疾く汝等をして、速かに阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。是の時に大莊嚴菩薩摩訶薩、八萬の菩薩摩訶薩と、卽ち座より起ちて、佛所に來詣して、頭面に足を禮し、遶ること百千帀して、卽ち前んで胡跪し、俱共に聲を同じうして、佛に白して言さく、『世尊、我等快く世尊の慈愍を蒙りぬ。我等が爲に、是の甚深微妙無上の大乘無量義經を說きたまふ。敬んで佛勅を受け、如來の滅後に於て、當に廣く是の經典を流布せしめ、普く一切をして、受持し、讀誦し、書寫し、供養せしむべ

し。唯願はくば憂慮を垂れたまふこと勿れ。我等當に願力を以て、普く一切衆生をして、此の經を見聞し、讀誦し、書寫し、供養することを得、是の經の威神の福を得しむべし。』

爾の時に佛、讃めて言はく、『善い哉善い哉、諸の善男子、汝等、今者眞に是佛子なり。弘き大慈大悲を以て、深く能く苦を拔き、厄を救ふ者なり。一切衆生の良福田なり。廣く一切の爲に大良導師と作れり。一切衆生の大依止處なり。一切衆生の大施主なり。常に法利を以て、廣く一切に施せ』と。爾の時に大會、皆大いに歡喜して、佛の爲に禮を作し、受持して去りにき。

國譯無量義經 終

國譯妙法蓮華經

卷の第一

序品第一

是の如きを、我聞きき。一時、佛、(一)王舍城(二)耆闍崛山の中に住たまひ、(三)大比丘衆、萬二千人と俱なりき。皆是(四)阿羅漢なり。(五)諸漏已に盡して復(六)煩惱無し。己利を逮得し、諸の有結を盡して、心自在を得たり。其の名を(七)阿若憍陳如、(八)摩訶迦葉、(九)優樓頻羅迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、(一〇)舍利弗、(一一)大目犍連、(一二)摩訶迦旃延、

【一】王舍城(Rājagriha)は中印度摩竭陀國の都城なり。紀元前六世紀に頻婆沙羅王(Bimbisāra)の築く所なりと傳ふ。

【二】耆闍崛山(Gridhrakūta)は靈鷲山と譯す。王舍城の東北にある山、釋尊說法の地として有名なり。

【三】大比丘衆。比丘(Bhikshu)は乞士、除饉、勤事男と譯す。男子の出家、即ち僧をいふ。大比丘衆は戒德具足の僧衆なり。

【四】阿羅漢(Arhan)は應供、殺賊、無生、離惡等と譯す。小乘の敎によりて悟れる聖者の敬稱。

【五】諸漏。漏は漏泄と熟す、煩惱の異名。諸漏は三毒五慾等の煩惱なり。

【六】煩惱は惑また漏とも云ふ。吾人の心身を煩擾惱亂する精

(一三)阿篤樓駄、(一四)劫賓那、(一五)憍梵波提、(一六)離婆多、(一七)畢陵伽婆蹉、(一八)薄拘羅、(一九)摩訶拘絺羅、(二〇)難陀、(二一)孫陀羅難陀、(二二)富樓那彌多羅尼子、(二三)須菩提、(二四)阿難、(二五)羅睺羅と曰ふ。是の如き、衆に知識せられたる大阿羅漢等なり。復、(二六)學無學の二千人あり。(二七)摩訶波闍波提、(二八)比丘尼、眷屬六千人と俱なり。羅睺羅の母、(二九)耶輸陀羅比丘尼、亦眷屬と俱なり。(三〇)菩薩摩訶薩八萬人あり。皆、(三一)阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せず。皆、(三二)陀羅尼を得、(三三)樂說辯才ありて、不退轉の(三四)法輪を轉じ、無量百千の諸佛を供養し、諸佛の所に於て、衆の德本を植ゑ、常に諸佛に稱歎せらるるこ

神作用なり。これに三毒、五慾、また百八、八萬四千の煩惱等の稱あり。

【七】阿若憍陳如(Ajnata-Kaundinya)は釋尊の弟子。中印度迦毗羅衛城の人なり。

【八】摩訶迦葉(Mahakâsyapa)は釋尊十大弟子の一。大飲光、大龜氏と譯す。上行第一と稱せらる。釋尊滅後大衆を率ゐて第一回の結集をなす。

【九】優樓頻螺迦葉(Uruvilvâ-kâsyapa)伽耶迦葉(Gayâ-Kâsyapa)那提迦葉(Nadikâsyapa)の三人は共に釋尊の弟子、世に三迦葉と稱す。初、事火外道なりしが、釋尊成道第一年摩揭陀國の苦行林に於て各徒衆を率ゐて佛に歸せり。

【一〇】舍利弗(Sâriputra)は釋尊十大弟子の一。舊譯に身子、新譯に鷺鷺子と云ふ。智慧第一と稱せらる。目犍連と共に沙然と云ふ外道に事へしが、後歸佛し、釋尊に先んじて寂す。

【一一】大目犍連(Mahamaudgalyayana)は同じく十大弟子の一。胡豆、菜茯根、呆藏氏等と譯す神通第一と稱せらる。舍利弗と共に外道を奉ぜしが、王舍城に於て歸佛す。

【一二】摩訶迦旃延(Mahakâtyâyana)は同じく十大弟子の一。文飾、不空と譯す。論議第一と稱せらる。南天竺の人なり。

【一三】阿兔樓駄(Anirudha)は同じく十大弟子の一。無滅、如意、無貪等と譯す、天眼第一と稱せらる。釋尊の從弟なり。

【一四】劫賓那(Kapphina, kumphila)は釋尊の弟子。房宿と譯す。能く星宿の學に通じたり

とを爲、慈を以て身を修め、善く佛慧に入り、大智に通達し、彼岸に到り、名稱普く無量の世界に聞えて、能く無數百千の(一五)衆生を度す。其の名を(一六)文殊師利菩薩、(一七)觀世音菩薩、(一八)得大勢菩薩、常精進菩薩、不休息菩薩、寶掌菩薩、(一九)藥王菩薩、勇施菩薩、寶月菩薩、月光菩薩、滿月菩薩、大力菩薩、無量力菩薩、越三界菩薩、(二〇)颰陀婆羅菩薩、(二一)彌勒菩薩、寶積菩薩、導師菩薩と曰ふ。是の如き等の菩薩摩訶薩八萬人と俱なり。爾の時に(二二)釋提桓因、其の眷屬二萬の天子と俱なり。復、名月天子、普香天子、寶光天子、(二三)四大天王有り、其の眷屬萬の天子と俱なり。自在天子、(二四)大

と云ふ。憍薩羅國の人なり。

【一五】憍梵波提(Gavampati)は同じく釋尊の弟子。牛司、牛主と譯す。解律を以て稱せらる。

【一六】離婆多(Revata, Raivata)は同じく釋尊の弟子。室宿、奎宿と譯す。人身の如幻なる相を觀じて聖果を得たり、故に一に如幻ともいふ。

【一七】畢陵伽婆蹉(Pilindavatsa)は同じく釋尊の弟子。

【一八】薄拘羅(Vakula)は同じく釋尊の弟子。善容と譯す。

【一九】摩訶拘絺羅(Mahākauṣṭhila)は同じく釋尊の弟子。大膝と譯す。問答第一と稱せらる。舍利弗の舅なり。初、長爪梵士と云ひしが、後、歸佛す。

【二〇】難陀(Nanda, Mahānanda)。牧牛難陀とも云ふ、善歡喜と譯す。釋尊の弟子。

【二一】孫陀羅難陀(Sundaranandа)は釋尊の異母弟。在俗の時孫陀利と稱する女を娶りしが故にこの名あり。後、出家して釋尊の弟子となる。諸根調伏の第一と稱せらる。

【二二】富樓那彌多羅尼子(Pūrṇamaitrāyaṇīputra)は釋尊十大弟子の一。滿慈子、滿願子と譯し、富樓那と略稱す。說法第一と稱せらる。釋尊成道第一夏後に耶舍、離垢等と前後して歸佛す。

【二三】須菩提(Subhūti)は同じく十大弟子の一。善吉と譯す。解空第一と稱せらる。

【二四】阿難(Ānanda)は同じく十大弟子の一。慶喜、歡喜、無染と譯し、阿難陀の略。多聞第一と稱せらる。二十餘年間

自在天子、其の眷屬三萬の天子と俱なり。(四五)娑婆世界の主、(四六)梵天王、(四七)尸棄大梵、(四八)光明大梵等、其の眷屬萬二千の天子と俱なり。八つの(四九)龍王有り、(五〇)難陀龍王、(五一)跋難陀龍王、(五二)娑伽羅龍王、(五三)和脩吉龍王、(五四)德叉迦龍王、(五五)阿那婆達多龍王、摩那斯龍王、(五六)優鉢羅龍王等なり。各、若干の百千の眷屬と俱なり。四つの(五七)緊那羅王あり。法緊那羅王、妙法緊那羅王、大法緊那羅王、持法緊那羅王なり。各、若干の百千の眷屬と俱なり。四つの(五八)乾闥婆王有り。樂乾闥婆王、樂音乾闥婆王、美乾闥婆王、美音乾闥婆王なり。各、若干の百千の眷屬と俱なり。四つの(五九)阿脩羅王有

佛に隨侍し、佛の滅後學波羅窟にて經典結集に從事す。

【五五】羅睺羅(Rāhula)は釋尊の實子。羅云とも云ひ、覆障と譯す。佛成道後弟子となり、密行第一と稱せられ、十大弟子に數へらる。

【五六】學無學。小乘聲聞乘の中、四位の證果の內、阿羅漢を無學の聖者と云ひ、須陀洹、斯陀含、阿那含を有學の聖者と云ふ。

【五七】摩訶波闍波提(Mahāprajāpatī)は釋尊の姨母。大生主と譯す。佛母摩耶夫人の姉なり、後佛に從うて尼となる。

【五八】比丘尼(Bhikṣuṇī)は乞士女、勤事女と譯す。女子の出家卽ち尼を云ふ。

【五九】耶輸陀羅(Yaśodharā)は名

聞、華色等と譯す。善覺長者の女なり。釋尊出家前の正妃にして羅睺羅の母なり。釋尊成道後五年出家して尼衆の主となる。

【六〇】菩薩摩訶薩(Bodhisattva Mahāsattva)は菩提薩埵摩訶薩埵の略。更に菩薩とも略稱す。覺有情大有情と譯す。

【六一】阿耨多羅三藐三菩提(Anuttarasamyak-sambodhi)は無上正徧知、無上正等覺と譯す。絕待覺智をいふ。佛は覺智圓滿し、宇宙の眞理を知らざることなく、無上正徧の聖智をその體とするが故に名く。

【六二】陀羅尼(Dhāraṇī)は總持、能遮と譯す。諸の惡を防遮し諸の善法を具足總持せる經文または名號を云ふ。

【六三】樂說辯才。樂說は四無碍辯

り。婆稚阿脩羅王、佉羅騫馱阿脩羅王、毗摩質多羅阿脩羅王、羅睺阿脩羅王あり。各、若干の百千の眷屬と俱なり。四つの(五〇)迦樓羅王有り。大威德迦樓羅王、大身迦樓羅王、大滿迦樓羅王、如意迦樓羅王なり。各、若干の百千の眷屬と俱なり。(五一)韋提希の子阿闍世王、若干の百千の眷屬と俱なりき。各、佛足を禮し、退きて一面に坐しぬ。

爾の時に世尊、四衆に圍繞せられ、供養恭敬、尊重讚歎せられしに、諸の菩薩の爲に、(五二)大乘經の、無量義、敎菩薩法、佛所護念と名くるを說きたまふ。佛、此の經を說き已りて、(五三)結跏趺坐し、(五四)無量義處

の一、辯才は辯說の才能なり。

【三四】法輪。衆生の邪惡を摧破する正法を輪寶にたとふ。

【三五】衆生。梵に薩埵(Sattva)有情とも譯す。一切の生類なり。生類は處々に衆多の生死を受くるが故にこの稱あり。

【三六】文殊師利(Manjusri)は文殊とも略稱す。妙吉祥、妙德、妙首と譯す。法界の智德を司れる大菩薩の名。

【三七】觀世音は菩薩の名。觀音とも略稱す。梵語(Avalokitesvara)の譯。新譯には觀自在といふ。普陀洛山に居住すと云ひ、また阿彌陀佛の慈悲を司り、左側の脇士たり。

【三八】得大勢は菩薩の名。梵名(Mahāsthāmaprāpta)大勢至とも譯す。阿彌陀佛右側の脇士にしてその智慧を司る。

【三九】藥王は二十五菩薩の一。觀藥王ともいふ。因位を星宿光長者といふ。藥術を以て一切衆生の惑業の病を治せんの誓願あり。

【四〇】賢陀婆羅(Bhadrapāla)は菩薩の名。賢護と譯す。

【四一】彌勒(Maitreya)は菩薩の名。慈氏と譯す。姓は阿逸多、南天竺の婆羅門にして、兜率天に上生し、現にその內院にあり。釋尊滅後五十六億七千萬年の後娑婆世界に出現し、八相作佛すべしといふ。

【四二】釋提桓因(Sakradevānām-Indra)は具さには釋迦提桓因陀羅といふ。能天主と譯す。須彌山の頂上忉利天の主なる帝釋のこと。

【四三】四大天王は護世四天王また四天王ともいふ。帝釋の外臣

三昧に入りて、身心動じたまはず。是の時に、天より(六五)曼陀羅華、(六六)摩訶曼陀羅華、(六七)曼殊沙華、(六八)摩訶曼殊沙華を雨して、佛の上、及び諸の(六九)大衆に散じ、普佛世界(七〇)六種に震動す。爾の時に、會中の比丘、比丘尼、(七一)優婆塞、(七二)優婆夷、(七三)天、(七四)龍、(七五)夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、(七六)摩睺羅伽、(七七)人非人、及び諸の(七八)小王、(七九)轉輪聖王、是の諸の大衆、未曾有なることを得て、歡喜し合掌し、一心に佛を觀たてまつる。爾の時に佛、眉間(八〇)白毫相の光を放ちて、東方萬八千の世界を照したまふに、周徧せざること靡し。下、(八一)阿鼻地獄に至り、上、(八二)阿迦尼吒天

にして、之に持國、廣目、增長、多聞の四王あり。

【四四】大自在天子は色界の主、摩醯首羅天(Maheśvara)をいふ。外道はこの神を以て世界の本體、萬物の創造主とし、一切衆生の苦樂昇沈はこの神の意中に存すとせり。

【四五】娑婆世界(Sāhā)は忍土、忍界と譯す。諸の苦痛を忍ばざるべからざる國土の義。この世界の稱。

【四六】梵天王(Brahma)は色界初禪天の主にして又三界の主なり。名を尸棄と云ふ。色界大梵天中の高樓閣に住し、梵衆、梵輔の二天を從へり。

【四七】尸棄大梵(Śikhin)は大梵天王の名。尸棄は有髻、火首と譯す。

【四八】光明大梵は第二禪天の梵王なり。

【四九】龍王(Nāgarāja)は海中に住して雨水を掌る神。龍神とも云ふ。畜生界に屬す。

【五〇】難陀(Nanda)は歡喜と譯す。八大龍王の一。跋難陀と共に摩竭陀國を護るといふ。

【五一】跋難陀(Upananda)は善喜と譯す。八大龍王の一。難陀の兄弟なりといふ。

【五二】娑伽羅(Sāgara)は海と譯す。八大龍王の一。鹹海に住すといふ。

【五三】和脩吉(Vāsuki)は多頭、寶稱と譯す。八大龍王の一。

【五四】德叉迦(Takṣaka)は祇毒、多舌と譯す。八大龍王の一。

【五五】阿那婆達多(Anavatapta)は無熱と譯す。八大龍王の一。

【五六】優鉢羅(Utpalaka)は青色蓮華池と譯す。八大龍王の一。

に至る。此の世界に於て、盡く彼の土の(八三)六趣の衆生を見、又、彼の土の現在の諸佛を見、及び諸佛の所説の經法を聞き、幷に彼の諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の、諸の修行ありて得道する者を見る。復、諸の菩薩摩訶薩、種種の因緣、種種の信解、種種の相貌ありて、菩薩の道を行ずるを見、復、諸佛の(八四)般涅槃したまふ者を見る。復、諸佛の般涅槃の後、(八五)佛舍利を以て、(八六)七寶の塔を起つるを見る。爾の時に彌勒菩薩、是の念を作さく、『今者世尊、神變の相を現じたまふ。何の因緣を以て此の瑞有る。今、佛(八七)世尊は、(八八)三昧に入りたまへり。是の不可思議に希有の事を現

(八三)緊那羅(Kinnara)は疑人、人非人、疑神と譯す。八部衆の一。帝釋に仕へて音樂を奏す。

(八四)乾闥婆(Gandharva)は尋光、食光、嗅香と譯す。八部衆の一。帝釋に仕ふる俗樂神。

(八五)阿脩羅(Asura)は脩羅とも略稱す。非天、非類、不端正と譯す。十界また六道の一。衆相山中また大海の底に住し鬪諍を好み、常に諸天と戰ふ。

(八六)迦樓羅(Garuda)は金翅鳥、妙翅鳥と譯す。鳥類の王なり八部衆の一。

(八七)韋提希(Vaidehi)は韋提また提希とも略稱す。摩竭陀國頻婆沙羅王の后妃、佛在世時の母なり。

(八八)大乘經。小乘經に對す。菩薩を教ふる高妙の法門を説示せる經典。大の梵語なる摩訶(Maha)には、多、勝の義もあり。乘は運載の義、迷界より悟界へ運載する乘輿の意なり。

(八九)結跏趺坐は一に全跏趺坐ともいふ。右足を左膝に、左足を右膝にのせて坐する稱。

(九〇)無量義處三昧とは釋尊が此の經を説くに先ち、まづ入りたまひし禪定の名。無量義は無量の法が本經の諸法實相の一義より生出するの義、三昧(Samadhi)は定の梵名。

(九一)曼陀羅華(Mandara, Mandara)は適意華、天妙華、白華と譯す。天華の名。白色にして妙香あり、見るもの意に適はざるなしといふ。

(九二)摩訶曼陀羅華(Maha mandara)摩訶は大と譯す。大なる曼陀羅華なり。

せるを、當に以て誰にか問ふべき。誰か能く答へん者なる。』復、此の念を作さく、『是の文殊師利法王の子は、已に曾、過去の無量の諸佛に親近し供養せり。必ず應に、此の希有の相を見るべし。我、今當に問ふべし。』爾の時に、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び諸の天、龍、鬼神等、咸く此の念を作さく、『是の佛の光明神通の相を、今當に誰にか問ふべき。』爾の時に彌勒菩薩、自ら疑を決せんと欲し、又、四衆の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び諸の天、龍、鬼神等の衆會の心を觀じて、文殊師利に問ひて言はく、『何の因緣を以て、此の瑞(八九)神通の相有して、大光明を放ち、

【六七】曼殊沙華(Manjusaka)は樓華、柔軟、小赤團華と譯す。天華の名。色赤く鮮かにして見るものをして妄染强剛の三業を捨離せしむるといふ。

【六八】摩訶曼殊沙華(Mahā manjusaka)摩訶は大と譯す。大なる曼殊沙華なり。

【六九】大衆は多勢の僧侶。僧衆に同じ。

【七〇】六種の震動とは大地が動、起、涌、震、吼、擊の六いろに震ひ動くこと。

【七一】優婆塞(Upāsaka)は近事男、近善男と譯し、また清信士ともいふ。四部弟子の一。佛道に入りたる在家の男子。

【七二】優婆夷(Upāsikā)は近事女、近善女と譯し、また清信女ともいふ。四部弟子の一。佛道に入りたる在家の女子。

【七三】天は梵名を提婆(Deva)といひ、神また天上の世界をいへり。十界また六道の一。これに欲、色、無色の諸天あり。又これに住する人々をもいふ。

【七四】龍は梵に(Nāga)といひ、これに善、惡の二龍あり、前者は歸佛の人を護り、後者は之に反す。

【七五】夜叉(Yakṣa)は捷疾鬼ともいふ。勇健、暴惡と譯す。八部鬼衆の一。これに天、地、虛空の大夜叉あり。

【七六】摩睺羅伽(Mahoraga)は大蟒神、大腹行と譯す。印度の鬼神の一種。

【七七】人非人。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷等の人と、天、龍、夜叉等の人に非ざるものとなり。

【七八】小王は人中の王なり。天中

東方萬八千の土を照したまふに、悉く彼の佛の國界の(八八)莊嚴を見る。』是に於て彌勒菩薩、重ねて此の義を宣べんと欲して、(八九)偈を以て問ひて曰はく、

『文殊師利、導師何が故ぞ、
眉間白毫の、大光普く照したまふ、
曼陀羅、曼殊沙華を雨して、
(九〇)栴檀の香風、衆の心を悅可す、
是の因緣を以て、地皆嚴淨なり、
而も此の世界、六種に震動す、
時に四部の衆、咸く皆歡喜し、
身意快然として、未曾有なるとを得つ、
眉間の光明、東方、
萬八千の土を照し給に、皆金色の如し、

の王の大なるに比して云ふ。

【八九】轉輪聖王は梵名をチャクラヴァルチン(Cakravartin)といひ、轉輪王、輪王とも略稱す。この全世界を統領する理想王。これに金、銀、銅、鐵の四輪王あり。人壽無量歲の時には娑婆に示現せりと云ふ。

【八〇】白毫相とは佛の眉間に存する清淨柔軟なる白玉の毫の、右方に旋轉し光明を放てるをいふ。

【八一】阿鼻地獄は阿鼻獄とも略稱す。阿鼻(Avici)無間と譯す。故に又無間地獄とも云ふ。八熱地獄の最下に在り。この地獄に落ちたる者は苦を受くること無間なりと云ふ。五逆謗法の罪人の墮する處なり。

【八二】阿迦尼吒(Akaniṣṭha)は尼師吒、尼吒とも略稱す。色究竟と譯す。色界十八天中、最上の世界の名なり。

【八三】六趣。趣は趣住の義。衆生が業因によりて趣住する處。地獄、餓鬼、畜生、脩羅、人間、天上を六趣と云ふ。

【八四】般涅槃(Parinirvāṇa)。般は入と譯す。涅槃は滅度、寂滅、圓寂と譯す。佛の入滅をいふ。般涅槃は滅度に入ること。

【八五】佛舍利。舍利(Śarīra)は身骨、體、骨分と譯す。佛舍利は佛の遺骨なり。

【八六】七寶は金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、眞珠、玫瑰の稱。これその一說なり。

【八七】世尊は梵名を薄伽梵(Bhagavat)といふ。佛十號の一。佛はよく世間を利し、世に尊重せらるゝが故に此名あり。また釋尊の敬稱。

阿鼻獄より、上(九五)有頂に至るまで、
諸の世界の中の、六道の衆生、
生死の所趣、善惡の業緣、
受報の好醜、此に於て悉く見る、
又諸佛、(九六)聖主師子、
經典の、微妙第一なるを演說したまふ、
其の聲清淨に、柔軟の音を出して、
諸の菩薩を敎へたまふこと、無數億萬に、
梵音深妙にして、人をして聞かんと樂はしめ、
各世界に於て、正法を講說するに、
種種の因緣をもつてし、無量の諭を以て、
佛法を照明し、衆生を開悟せしめたまふを覩る、
若し人苦に遭ひて、老病死を厭ふには、
爲に涅槃を說きて、諸苦の際を盡さしめ、

【八八】三昧(Samādhi)は三摩地とも書し。定と譯す。心を一境に專注せしむる精神作用なり。
【八九】神通。神變不思議の力能をいふ。これに五神通、六神通、の目あり。
【九〇】莊嚴は佛身、佛土の美麗にかざられたるをいふ。
【九一】偈(Gātha)は頌と譯す。經論釋中、詩句を以て佛德を讚歎し、法理を叙說せるもの。漢譯のものは四言、五言、七言なるを常とす。
【九二】栴檀(Candana)は香木の名。赤白紫の諸種あり、能く病を治するが故に與藥とも譯す。
【九三】有頂は無色界の第四天。非想非々想處天の異名。有とは三有の事。三界九地の絕頂にあるが故に有頂天と云ふ。
【九四】聖主師子は佛の異稱。

若し人福有りて、曾て佛を供養し、
勝法を志求するには、爲に(九五)緣覺を說き、
若し佛子有りて、種種の行を修し、
無上慧を求むるには、爲に淨道を說きたまふ、
文殊師利、我此に住して、
見聞すること斯の若く、千億の事に及べり、
是の如く衆多なる、今當に略して說くべし、
我彼の土の(九六)恆沙の菩薩、
種種の因緣をもつて、佛道を求むるを見る、
或は施を行ずるに、金銀珊瑚、
眞珠(九七)摩尼、(九八)碑磲(九九)碼碯、
金剛の諸珍、奴婢車乘、
寶飾の輦輿を、歡喜して(一〇〇)布施し、
佛道に(一〇一)廻向して、是の乘の、

【九五】緣覺(Pratyeka Buddha)は二乘、三乘の一。獨覺、因緣覺ともいふ。十二因緣を觀じて無師獨悟するもの。

【九六】恆沙は具さには恆河沙と云ふ。印度恆河(Ganga)の沙に比して量の多數を示す語。

【九七】摩尼(Mani)は如意珠と譯す。寶珠の名。この珠を持つ時は衣服、飲食、財寶等意に隨ひて生ずといふ。

【九八】碑磲は梵名を牟婆羅揭婆といふ。一說に海中の大貝にして背上に龜文ありて車輪の如し故に名くと。七寶の一なり。

【九九】碼碯は梵名を阿濕縛揭婆といふ。一說に赤闌紅色にして馬の腦に似たり、故に名くと。七寶の一なり。

【一〇〇】布施は六度の一。他人に物を施與すること。これに財

(一〇一)三界第一にして、諸佛の歎じ給ふ所なるを得んと願ふ有り、
或は菩薩の、駟馬の寶車の、
(一〇二)欄楯華蓋あり、軒飾あるを布施する有り、
復菩薩の、身肉手足、
及び妻子を施して、無上道を求むるを見る、
又菩薩の、頭目身體を、
欣樂施與して、佛の智慧を求むるを見る、
文殊師利、我諸王の、
佛所に往詣して、無上道を問ひたてまつり、
便ち樂土、宮殿臣妾を捨てて、
鬚髮を鬋除し、法服を被るを見る、
或は菩薩の、而も比丘と作りて、
獨閑靜に處し、樂みて經典を誦するを見る、
又菩薩の、勇猛精進し、

施、法施、無畏施の別あり。
【一〇一】廻向は廻轉趣向の義。所修の善根を自の成佛のためにさしむけること。これに衆生、菩提、實際の三廻向あり。
【一〇二】三界は欲界とて五欲のある人間以下の五趣と第六天までの世界と、色界とて五欲を離れたる清淨なる肉體の存する天界と、無色界とて身體なく精神のみ存する天界とをいふ。
【一〇三】欄楯華蓋はてすりとはながさなり。

深山に入りて、佛道を思惟するを見る、
又欲を離れ、常に空閑に處し、
深く（108）禪定を修して、（109）五神通を得るを見る、
又菩薩の、禪に安んじて合掌し、
千萬の偈を以て、諸法の王を讚めたてまつるを見る、
復菩薩の、智深く志固くして、
能く諸佛に問ひたてまつり、聞きて悉く受持するを見る、
又佛子の、（110）定慧具足して、
無量の諭を以て、衆の爲に法を講じ、
欣樂說法して、諸の菩薩を化し、
魔の兵衆を破して、法鼓を擊つを見る、
又菩薩の、寂然宴默にして、
天龍恭敬すれども、爲を以て喜とせざるを見る、
又菩薩の、林に處して光を放ち、

【108】禪定。禪は梵語禪那（Dhyāna）の略、定は其譯。六度の一。慮を靜め心を明かにして眞理を觀ずる心態の稱。
【109】五神通は又五通とも云ふ。天眼、天耳、宿命、他心、神足の五つの神通力なり。
【110】定慧は三學の中禪定と智

(一〇七)地獄の苦を濟ひて、佛道に入らしむるを見る、
又佛子の、未だ嘗て睡眠せずして、
林中に(一〇八)經行し、佛道を勤求するを見る、
又(一〇九)戒を具して、威儀缺くること無く、
淨きこと寶珠の如くにして、以て佛道を求むるを見る、
又佛子の、(一一〇)忍辱の力に住して、
(一一一)增上慢の人の、惡罵捶打するを、
皆恐く能く忍びて、以て佛道を求むるを見る、
又菩薩の、諸の戲笑、
及び癡なる眷屬を離れ、智者に親近し、
一心に亂を除き、念を山林に攝して、
億千萬歲、以て佛道を求むるを見る、
或は菩薩の、肴膳飲食、
百種の湯藥を、佛及び僧に施し、

慧となり。

〔一〇七〕地獄は梵名を那落迦と云ふ。無幸處と譯す。地獄は、その義譯なり。三塗、六道の一。閻浮提の地下に在りて罪人の苦痛を受くる所。これに八寒八熱、百三十六地獄の別あり。

〔一〇八〕經行はまた行道とも云ふ。禪定の中間一定の場所を往來し運動すること。

〔一〇九〕戒は梵に(シーラ)尸羅といふ。三學、六度の一。身口意の惡を制すること。これに五戒、十戒、二百五十戒、五百戒等の目あり。

〔一一〇〕忍辱は六度の一。苦痛、屈辱を堪へ忍びて恨を報ゆるの念なきをいふ。

〔一一一〕增上慢は四慢、七慢の一。殊勝の法、無上の證を得ざるに之を得たりと思ひて高ぶること。

名衣上服の、價値千萬なる、
或は無價の衣を、佛及び僧に施し、
千萬億種の、栴檀の寶舍、
衆妙の臥具を、佛及び僧に施し、
清淨の園林の、華果茂盛にて、
流泉浴地あるを、佛及び僧に施し、
是の如き等の施の、種種微妙なるを、
歡喜し厭くこと無くして、無上道を求むるを見る、
或は菩薩の、(二三)寂滅の法を說きて、
種種に、無數の衆生に敎詔する有り、
或は菩薩の、諸法の性は、
二相有ること無く、猶虛空の如しと觀ずるを見る、
又佛子の、心に所著無くして、
此の妙慧を以て、無上道を求むるを見る、

(二三)寂滅の法とは諸法實相なり。諸法實相は言語道斷心行處滅の法なれば寂滅と稱するなり。
(二四)滅度は涅槃の譯語。佛の入滅、また眞理の異稱。
(二四)塔廟。塔は率塔婆(Stūpa)の略、廟はその譯。梵漢並べ擧げたる名稱。

文殊師利、又菩薩の、
佛(二三)滅度の後、舍利を供養する有り、
又佛子の、諸の(二四)塔廟を造ること、
無數恆沙にして、國界を嚴飾し、
寶塔高妙にして、五千(二五)由旬、
縱廣正等にして、二千由旬、
一一の塔廟に、各千の(二六)幢旛あり、
珠をもつて交露せる幔ありて、寶の鈴和鳴せり、
諸の天龍神、人及び非人、
香華伎樂を、常に以て供養するを見る、
文殊師利、諸の佛子等、
舍利を供せんが爲に、塔廟を嚴飾す、
國界自然に、殊特妙好なること、
天の樹王の、其の華開敷せるが如し、

(二三)由旬(Yojana)は印度の里數の目。八俱盧舍を一由旬とす。清里の四十里、三十里に當ると。これに大、中、小の由旬あり。

(二六)幢旛は旛また幢と旛との稱。前者ははたほこ、後者は一種のはたなり、これに鬼形旛、菩薩形旛あり。

(二七)道場は梵名を(Bodhimandala)といふ。諸佛正覺の道を成じたまふ場處。普通佛敎を說き佛道を修する場處をもいふ。

(二八)授記とは佛が記莂として行者當來の證果の讖言を說授すること。

(二九)善男子とは宿世に善根を積み今生にて宿善開發して佛法を聞信するを得る男子。若しその人が女子なる時は善女

佛一の光を放ちたまふに、我及び衆會、
此の國界の、種種に殊妙なるを見る、
諸佛は神力、智慧稀有なり、
一の淨光を放ちて、無量の國を照したまふ、
我等此を見て、未曾有なることを得たり、
佛子文殊、願はくば衆の疑を決したまへ、
四衆欣仰して、仁及び我を瞻る、
世尊何が故ぞ、斯の光明を放ちたまふ、
佛子時に答へて、疑を決して喜ばしめたまへ、
何の饒益する所ありてか、斯の光明を演べたまふ、
佛(二一)道場に坐して、得たまへる所の妙法、
爲めに此を說かんとや欲す、爲めて當に(二二)授記やしたまふべき、
諸の佛土の、衆寶嚴淨なるを示し、
及び諸佛を見たてまつること、此小緣に非じ、

人といふ。

【二一】阿僧祇劫(Asaṃkhya)。阿僧祇は無數、無央數と譯す。印度の數名。劫は劫波(Kalpa)の略、長時と譯す。極めて長き時間をいふ。

【二二】如來は梵名を多陀阿伽度(Tathāgata)といふ。如は眞如。眞如より顯現したるものといふことにて佛十號の一。

【二三】應供は梵名を阿羅漢(Arhan)といふ。應受供養の義。無學果の聖者また佛十號の一。

【二四】正徧知は梵名を(Samyaksaṃbuddha)といふ。佛十號の一。佛は正しく眞理を究めて知らざることなきが故にこの名あり。

【二五】明行足は梵名を(Vidyācaraṇasaṃpanna)といふ。佛十號の一。佛は明行を圓滿具足

文殊當に知るべし、四衆龍神は、仁者、爲て何等をか說給んと瞻察す。』

爾の時に文殊師利、彌勒菩薩摩訶薩、及び諸の大士に語らく、『(二九)善男子等、我が惟忖するが如き、今佛世尊、大法を說き、大法の雨を雨し、大法の贏を吹き、大法の鼓を擊ち、大法の義を演べんと欲すらん。諸の善男子、我、過去の諸佛に於て、曾て此の瑞を見たてまつりしに、斯の光を放ち已りて、卽ち大法を說きたまひき。是の故に當に知べし。今の佛の光を現じたまふも、亦復是の如く、衆生をして、咸く一切世間難信の法を聞知することを得しめんと欲するが故に、斯の瑞を現じたまふならん。諸

するが故にこの名あり。

【二三】善逝は梵名を(Sugata)といふ。佛十號の一。佛は善妙に世間を超脫し涅槃の果界に趣くが故にこの名あり。

【二四】世間解は梵名を(Lokavit)といふ。佛十號の一。佛はよく三種世間の事理を了解せるが故にこの名あり。

【二五】無上士は梵名を(Anuttara)といふ。佛十號の一。佛は世の最尊無上の大士なるが故にこの稱あり。

【二六】調御丈夫は梵名を(Purusadamyasarathi)といふ。佛十號の一。佛は衆生を調伏制御して證悟せしむる大丈夫人なるが故にこの名あり。

【二九】天人師は梵名を(Devamanusyasasta)といふ。佛十號の一。佛は正法を說きて天と人とを敎へ導く師主なるが故にこの名あり。

【二〇】佛は佛陀(Buddha)の略。覺者と譯す。自覺覺々他の二行を具滿せる十界の最高聖者なり。また特に釋尊の稱。以上如來までを稱して佛の十號といふ。

【二一】四諦は迷悟兩界の因果を說明したる眞理にして四聖諦ともいふ。苦、集、滅、道これなり。

【二二】涅槃(Nirvana)は滅度、圓寂、寂滅と譯す。佛のさとり。また眞理の異稱。

【二三】十二因緣起とは三界の迷の因果を十二に分ちて衆生輪廻の理を示せるもの。無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二相續緣起すると說く法門。

の善男子、過去無量無邊不可思議(二二〇)阿僧祇劫の如き、爾の時に佛有す。日月燈明(二二一)如來、(二二二)應供、(二二三)正徧知、(二二四)明行足、(二二五)善逝、(二二六)世間解、(二二七)無上士、(二二八)調御丈夫、(二二九)天人師、(二三〇)佛、世尊と號く。正法を演説したまふ。初善、中善、後善なり。其義深遠に、其語巧妙に、純一無雜にして具足清白梵行の相なり。聲聞を求むる者の爲には、應せる(二三一)四諦の法を説きて生老病死を度し、(二三二)涅槃を究竟せしめ、辟支佛を求むる者の爲には、應せる(二三三)十二因緣の法を説き、諸の菩薩の爲には、應せる(二三四)六波羅蜜を説きて(二三五)阿耨多羅三藐三菩提を得、(二三六)一切種智を成ぜしめたまふ。次に復佛有す。亦、日月燈明と名く。次に復佛有す。亦、日月燈明と名く。是の如く二萬佛、皆同じく一字にして、日月燈明と號く。又、同じく一姓にして、(二三七)頗羅墮を姓とせり。彌勒、當に知るべし。初佛、後佛、皆同じく一字にして日月燈明と名け、十號具足せり。説きたまふ所の法、初中後善なり。其の最後の佛、未だ出家したまはざりし時、八王子有り。一をば

【二二〇】阿僧祇劫は無數劫。

【二二一】日月燈明は太陽と月の光。

【二二二】如來は眞如の理に來れる者。

【二二三】應供は人天の供養を受くべき者。

【二二四】正徧知は正しく徧く一切を知る。

【二二五】明行足は明と行とを具足せる者。

【二二六】善逝は善く涅槃に逝く。

【二二七】世間解は世間の事を解する。

【二二八】無上士は無上の人。

【二二九】調御丈夫は調御の人。

【二三〇】天人師は人天の師。

【二三一】佛は覺者。

【二三二】世尊は世の尊。

【二三三】四諦は苦集滅道。

【二三四】涅槃は生死を離れ煩惱を滅盡して無爲の境に入る。

【二三五】辟支佛は獨覺。

【二三六】十二因緣は無明・行・識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・老死。

【二三七】六波羅蜜は菩薩の修する六種の行。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧をいふ。

【二三八】阿耨多羅三藐三菩提(Anuttarasamyak-sambodhi)は阿耨多羅三菩提また阿耨菩提とも略稱す。無上正徧智、無上正等覺と譯す。絕待覺智をいふ。佛は覺智圓滿し宇宙の眞理知らざることなく、無上正徧の聖智をその體とするが故にこの名あり。

【二三九】一切種智は佛智の德稱なり。佛智は一切諸法の差別の事相と平等の眞理とに通達無礙なる智慧なるが故に名く。

【二三七】頗羅墮(Bharadvaja)は婆羅門十八姓中の一。

【二三八】大乘は梵名を(Mahāyāna)と云ふ。小乘の對。大人の所乘

有意と名け、二をば善意と名け、三をば無量意と名け、四をば寶意と名け、五をば增意と名け、六をば除疑意と名け、七をば響意と名け、八をば法意と名く。是の八王子、威德自在にして、各四天下を領す。是の諸の王子、父出家して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと聞き、悉く王位を捨て、亦、隨ひて出家して、(二五)大乘の意を發し、常に梵行を修して、皆法師と爲れり。已に千萬の佛の所に於て、諸の善本を植ゑたり。是の時に日月燈明佛、(二六)大乘經の無量義、敎菩薩法、佛所護念と名くるを說きたまふ。是の經を說き已りて、卽ち大衆の中に於て結跏趺坐し、無量義處三昧に入りて、身心動じたまはず。是の時に、天より曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華を雨して、佛の上へ及び諸の大衆に散じ、普佛世界六種に震動す。爾の時に、會中の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人、及び諸の小王、(二七)轉輪聖王等、是の諸の大衆、未曾有なることを得て、歡喜し合掌して、一心

にして大菩を滅し大利を興ふる敎法。菩薩の大機が佛果の大涅槃を得る法門なり。

【二五】大乘經は小乘經に對す。菩薩を敎ふる高妙の法を說ける經典。

【二六】轉輪聖王は梵名を(Cakravartin)と云ふ。轉輪王、輪王と略稱す。須彌四洲を統領する王。これに金、銀、銅、鐵の四輪王あり。人壽無量歲より八萬歲の時までは娑婆世界に示現ぜりといふ。

【二七】妙法蓮華、敎菩薩法、佛所護念は法華十七名中の三名。

【二八】劫は劫波(Kalpa)の略。長時と譯す。長久の時間をいふ。人壽十歲の時より百年に一歲を增して八萬四千歲に至り、八萬四千歲よりまた百年に一歲を減じて人壽十歲に至る

に佛を觀たてまつる。爾の時に如來、眉間白毫相の光を放ちて、東方萬八千の佛土を照したまふに、周徧せざること靡し。今見る所の是の諸の佛土の如し。彌勒當に知るべし。爾の時に會中に、二十億の菩薩有りて、法を聽かんと樂欲す。是の諸の菩薩、此の光明の普く佛土を照すを見て、未曾有なることを得て、此の光の行爲の因緣を知らんと欲す。時に菩薩有り、名を妙光と曰ふ。八百の弟子有り。是の時に日月燈明佛、三昧より起ちて、妙光菩薩に因せて、大乘經の(一四)妙法蓮華、敎菩薩法、佛所護念と名くるを說きたまふ。六十小(一四)劫座を起ちたまはず。時の會の聽者も、亦一處に坐して六十小劫身心動せず。佛の所說を聽くこと食頃の如しと謂へり。是の時に、衆中に一人の、若は身、若は心に懈倦を生ずる有ること無かりき。日月燈明佛、六十小劫に於て、是の經を說き已りて、卽ち梵、魔、(一四三)沙門、(一四四)婆羅門、及び天、人、阿脩羅衆の中に於て、此の言を宣べたまはく、「如來、今日の中夜に於て、當に(一四五)無餘涅槃に入るべし。」時に菩薩有り。

間、これを一增減とし一小劫といふ。これを二十合して一中劫といひ、成、住、壞、空の四中劫に分ち、この四を合して一大劫といふ。

(一四三)沙門(Śramaṇa)は桑門とも書す。勤息、止息と譯す。衆善を勤修し諸惡を止息するの義。出家して道を修するものの稱。

(一四四)婆羅門(Brāhmaṇa)は淨行、淨裔と譯す。印度四姓中の最高位にある僧侶の階級。

(一四五)無餘涅槃は有餘涅槃に對す。精神上の煩惱を斷じ、且つ煩惱の結果たる肉體を滅し、所謂灰身滅智したる處に顯れたる理想境をいふ。

(一四六)多陀阿伽度(Tathāgata)は譯して如來と云ふ。佛十號の一。

名を德藏と曰はん。日月燈明佛、卽ち其に記を授け、諸の比丘に告げたまはく、「是の德藏菩薩、次に當に作佛すべし。號を淨身(一四四)多陀阿伽度、(一四五)阿羅訶、(一四六)三藐三佛陀と曰はん。」佛授記し已りて、便ち中夜に於て無餘涅槃に入りたまふ。佛滅度の後に、妙光菩薩、妙法蓮華經を持ちて、八十小劫を滿てて人の爲に演說す。日月燈明佛の八子、皆妙光を師とす。妙光敎化して、其をして阿耨多羅三藐三菩提に堅固ならしむ。是の諸の王子、無量百千萬億の佛を供養し已りて、皆佛道を成ず。其の最後に成佛したまふをば、名を然燈と曰ふ。八百の弟子の中に一人有り。號を求名と曰ふ。利養に貪著せり。復、衆經を讀誦すと雖も、而も通利せず。忘失する所多し。故に求名と號く。是の人亦、諸の善根を種ゑたる因緣を以ての故に、無量百千萬億の諸佛に値ひたてまつることを得て、供養恭敬、尊重讚歎せり。彌勒、當に知るべし。爾の時の妙光菩薩、豈、異人ならんや。我が身是なり。求名菩薩は汝が身是なり。今、此の瑞を見るに、本と異ること無し。是の故に惟忖するに、今日の如來も、當に、大乘經の妙法蓮華、敎菩薩法、佛所護念と名くるを說きたまふべし。』爾の時に文殊師利、大衆の中に於て、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

【一四四】阿羅訶(Arhan)は應供と譯す。佛十號の一。

【一四五】三藐三佛陀(Samyaksam-buddha)は正徧知と譯す。佛十號の一。

『我過去世の、無量無數劫を念ふに、
佛人中尊有しき、日月燈明と號く、
世尊法を演說し、無量の衆生、
無數億の菩薩を度して、佛の智慧に入らしめたまふ、
佛未だ(一四九)出家したまはざりし時の、所生の(一五〇)八王子、
大聖の出家を見て、亦隨ひて梵行を修す、
時に佛大乘經の、無量義と名くるを、
諸の大衆の中に於て、爲に廣く分別したまふ、
佛此の經を說き已りて、卽ち法座の上に於て、
跏趺して三昧に坐したまふ、無量義處と名く、
天より曼陀華を雨し、天鼓自然に鳴り、
諸の天龍鬼神、人中尊を供養す、
一切の諸の佛土、卽時に大いに震動し、
佛眉間の光を放ち、諸の稀有の事を現じたまふ、

【一四九】出家は五欲の家を捨てゝ沙門となること。また沙門となりたる人のこと。
【一五〇】八王子は有意、善意、無量意、寶意、增意、除疑意、響意、注意の八人。

此の光東方、萬八千の佛土を照して、
一切衆生の、生死の(一五一)業報處を示したまふ、
諸の佛土の、衆寶を以て莊嚴して、
(一五二)瑠璃(一五三)頗梨の色なるを見る事有り、斯佛光の照し給に由る、
及び諸の天人、(一五四)龍神夜叉衆、
乾闥緊那羅、各其の佛を供養するを見る、
又諸の如來の、自然に佛道を成じて、
身の色金山の如く、端嚴にして甚だ微妙なること、
淨瑠璃の中、內に眞金の像を現ずるが如くなるを見る、
世尊大衆に在して、深法の義を敷演したまふ、
一一の諸の佛土、(一五五)聲聞衆無數なり、
佛の光の所照に因りて、悉く彼の大衆を見る、
或は諸の比丘の、山林の中に在りて、
(一五六)精進し淨戒を持つこと、猶明珠を護るが如くなる有り、

【一五一】業報は業果ともいふ。過去の業因によりて招きたる現在の果報。
【一五二】瑠璃(Vaidurya)は吠瑠璃、吠瑠璃ともいふ。青玉、青色寶と譯す。寶石の一種にして七寶の一たり。
【一五三】頗梨(Spatika)は具さには塞頗胝迦、薩頗胝迦といふ。水玉と譯す。所謂水晶是れなり。七寶の一たり。
【一五四】龍神は海中に住し雨水を司る神。靈妙なる力を有すといふ。畜生界に屬す。
【一五五】聲聞は梵名なSravaka)といふ。二乘、三乘、五乘の一。佛の聲教を聞きて悟道するものをいふ。
【一五六】精進は六度の一。心を專精にして道に進む努力の義。

又諸の菩薩の、施忍辱等を行ずる事、
其の數恆沙の如くなるを見る、斯佛の光の照したまふに由る、
又諸の菩薩の、深く諸の禪定に入りて、
身心寂かにして動せず、以て無上道を求むるを見る、
又諸の菩薩の、法の(一五七)寂滅の相を知りて、
各其の國土に於て、法を說きて佛道を求むるを見る、
爾の時に四部の衆、日月燈佛の、
大神通力を現じたまふを見て、其の心皆歡喜して、
各各に自ら相問はく、「是の事何の因緣ぞ、」
天人所奉の尊、適めて三昧より起ちて、
妙光菩薩を讚めたまはく、「汝は是(一五八)世間の眼、
一切に歸信せられて、能く法藏を奉持す、
我が所說の法の如きは、唯汝のみ能く證知せり、」
世尊既に讚歎し、妙光をして歡喜せしめて、

【一五七】寂滅は涅槃の譯。佛のさとり、また眞理の異稱。
【一五八】世間はよのなか。世は遷流、間は差別の義。三世の時間に遷され、而も相集りて空間的に差別間隔あるが故にこの名あり。

是の法華經を說きたまふ、六十小劫を滿てて、
此の座を起ちたまはず、說きたまふ所の上妙の法、
是の妙光法師、悉く皆能く受持す、
佛是の法華を說きて、衆をして歡喜せしめ已りて、
尋いで卽ち是の日に於て、天人衆に告げたまはく、
(一五九)「諸法實相の義、已に汝等が爲に說きつ、
我今中夜に於て、當に涅槃に入るべし、
汝一心に精進し、當に放逸を離るべし、
諸佛には甚だ値ひ難し、億劫に時に一たび遇ひ奉つる、」
世尊の諸子等、佛涅槃に入りたまはんと聞きて、
各各に悲惱を懷く、「佛滅したまふこと一何ぞ速かなる、」
聖主法の王、無量の衆を安慰したまはく、
「我若滅度しなん時、汝等憂怖すること勿れ、
是の德藏菩薩、(一六〇)無漏實相に於て、

【一五九】諸法實相とは萬有の眞實相をいふ。差別の萬有卽平等なる絕對の眞理といふこと。是れ本經所說の根本第一義なり。

【一六〇】無漏實相。無漏は無明煩惱のなきこと、實相はこの無明煩惱を離れたる淸淨寂滅の眞理をいふ。

心已に通達する事を得たり、其次に當に作佛すべし、
號を曰つて淨身と爲けん、亦無量の衆を度せん、」
佛此の夜滅度したまふ事、薪盡きて火の滅するが如し、
諸の舍利を分布して、無量の（二六）塔を起つ、
比丘比丘尼、其の數恆沙の如し、
倍復精進を加へて、以て無上道を求む、
是の妙光法師、佛の法藏を奉持して、
八十小劫の中に、廣く法華經を宣ぶ、
是の諸の八王子、妙光に開化せられて、
無上道に堅固にして、當に無數の佛を見たてまつるべし、
諸佛を供養し已りて、隨順して大道を行じ、
相繼いで成佛することを得、轉次して授記す、
最後の天中天をば、號を然燈佛と曰ふ、
諸仙の導師として、無量の衆を度脫したまふ、

（二六）塔は塔婆と共に卒塔婆（ストーパ stūpa）の略。方墳、廟と譯す。

是の妙光法師、時に一りの弟子あり、
心常に懈怠を懐きて、名利に貪著せり、
名利を求むるに厭くこと無くして、多く族姓の家に遊ぶ、
習誦する所を棄捨し、廢忘して通利せず、
是の因緣を以ての故に、之を號けて求名と爲す、
亦衆の善業を行じて、無數の佛を見たてまつる事を得、
諸佛を供養し、隨順して大道を行じ、
六波羅蜜を具して、今釋師子を見たてまつる、
其後に當に作佛すべし、號をば名けて彌勒と曰はん、
廣く諸の衆生を度すること、其の數量あること無けん、
彼の佛の滅度の後、懈怠なりし者は汝是なり、
妙光法師は、今則ち我が身是なり、
我燈明佛を見たてまつりしに、本の光瑞此くの如し、
是を以て知りぬ今の佛も、法華經を說かんと欲すならん、

今の相本の瑞の如し、是諸佛の方便なり、
今の佛の光明を放ちたまふも、實相の義を助發せんとなり、
諸人今當に知るべし、合掌して一心に待ちたてまつれ、
佛當に法雨を雨らして、道を求むる者に充足したまふべし、
諸の〔一六二〕三乘を求むる人、若し疑悔有らば、
佛當に爲に除斷して、盡して餘り有ること無からしめたまはん。』

〔一六二〕三乘は聲聞、緣覺、菩薩の三乘。乘は運載の義、法門のこと。

方便品第二

爾の時に世尊、三昧より安詳として起ちて、舍利弗に告げたまはく、『諸佛の智慧は甚深無量なり。其の智慧の門は難解難入なり。一切聲聞、(一)辟支佛の知ること能はざる所なり。所以は何ん。佛曾、百千萬億無數の諸佛に親近して、盡して諸佛の無量の道法を行じ、勇猛精進にして、名稱普く聞えたまへり。甚深未曾有の法を成就して、宜しきに隨ひて說きたまふ所、意趣解り難し。舍利弗、吾成佛してより已來、種種の因緣、種種の譬諭をもつて廣く言敎を演べ、無數の(二)方便をもつて衆生を引導して諸の著を離れしむ。所以は何ん。如來は方便、(三)知見波羅蜜、皆已に具足せり。舍利弗、如來の知見は廣大深遠なり。無量無礙、(四)力、無所畏、禪定、(五)解脫、三昧ありて、深く無際に入りて、一切未曾有の法を成就せり。舍利弗、如來は能く種種に分別し、巧みに諸法を說き、言辭柔輭にして衆の心を悅可す。舍利弗、要を取

【一】辟支佛(Pratyekabuddha)は緣覺の梵名。十二因緣を觀じて無師獨悟する聖者。

【二】方便は方法便利の義。また眞實の對。前者はよく方法を用ひて衆生を導くこと。後者は未熟の機のために眞實法に入らしむるまでの權化の法門をいふ。

【三】知見波羅蜜は般若波羅蜜の異稱。六波羅蜜の一。

【四】力は五根に因りて五障を破る力。これを五力といふ。

【五】解脫は煩惱の繫縛を解き迷界の業苦を脫すること。これに八解脫の目あり。

【六】如是相とは萬有の各が先天的に具せる十界の相。相とは

りて之を言はば、無量無邊未曾有の法を、佛悉く成就したまへり。止みなん舍利弗、復説くべからず。所以は何ん。佛の成就したまへる所は、第一希有難解の法なり。唯、佛と佛とのみ、乃し能く諸法實相を究盡したまへり。所謂諸法の(六)如是相、(七)如是性、(八)如是體、(九)如是力、(一〇)如是作、(一一)如是因、(一二)如是緣、(一三)如是果、(一四)如是報、(一五)如是本末究竟等なり。』爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

『世雄は量るべからず、諸天及び世人、
一切衆生の類、能く佛を知る者無し、
佛の力無所畏、解脱諸の三昧、
及び佛の諸餘の法は、能く測量する者無し、
本無數の佛に從ひて、具足して諸道を行じたまへり、
甚深微妙の法は、見難く了すべきこと難し、
無量億劫に於て、此の諸の道を行じ已りて、

【七】如是性とは萬有の各が先天的に具ぜる十界の性。性とは内面的不變の本性。

【八】如是體とは萬有の各が先天的に具ぜる十界の體。即ち地獄、人、天等の體質。

【九】如是力とは萬有の各が先天的に具ぜる十界の力。力とは力能、はたらき。その顯發したるが用にして、用と顯るゝまでの潛勢を今の如是力といふ。

【一〇】如是作とは萬有の各が先天的に具ぜる十界の作。作とは事を造作し構造する作業。

【一一】如是因とは萬有の各が先天的に具ぜる十界の因。因とは果を招く親因。

【一二】如是緣とは萬有の各が先天的に具ぜる十界の緣。緣とは外面に表れたるすがた。

道場にして果を成ずることを得て、我已に悉く知見せり、
是の如き大果報、種種の性相の義、
我及び十方の佛、乃し能く是の事を知しめせり、
是の法は示すべからず、言辭の相寂滅せり、
諸餘の衆生の類、能く得解すること有ること無し、
諸の菩薩衆の、信力堅固なる者をば除く、
諸佛の弟子衆の、曾諸佛を供養し、
一切の漏已に盡して、是の最後身に住せる、
是の如き諸人等、其の力堪へざる所なり、
假使世間に滿てらん、皆舍利弗の如くにして、
思を盡して共に度量すとも、佛智は測ること能はじ、
正使十方に滿てらん、皆舍利弗の如く、
及び餘の諸の弟子、亦十方の刹に滿てらん、
思を盡して共に度量すとも、亦復知ること能はじ、

因を助くる助緣。

【三】如是果とは萬有の各が先天的に具せる十界の果。果とは因によりて生じたる結果。

【四】如是報とは萬有の各が先天的に具せる十界の報。報とは緣より生じたる報果。

【五】如是本末究竟等とは本は如是相、末は如是報。この本末は共に三諦の妙理を含むを以て究竟して等しといふこと。以上如是相までを十如是と稱す。

辟支佛の利智にして、無漏の最後身なる、
亦十方界に滿ちて、其の數竹林の如くならん、
斯等共に一心に、億無量劫に於て、
佛の實智を思はんと欲すとも、能く少分をも知ること莫けん、
(一六)新發意の菩薩、無數の佛を供養し、
諸の義趣を了達して、又能善く法を說かんもの、
稻麻竹葦の如くにして、十方の刹に充滿せん、
一心に妙智を以て、恆河沙劫に於て、
咸く皆共に思量すとも、佛智を知ること能はじ、
不退の諸の菩薩、其の數恆沙の如くにして、
一心に共に思求すとも、亦復知ること能はじ、
又舍利弗に告げたまはく、(一七)「無漏不思議の、
甚深微妙の法をば、我今已に具へ得たり、
唯我のみ是の相を知れり、十方の佛も亦然なり、

【一六】新發意の菩薩は二菩薩の一。舊住の菩薩の對。新に道心を發起せる菩薩をいふ。
【一七】無漏は有漏に對す。漏は缺漏の義、煩惱の異名。煩惱なき清淨なる法を無漏といふ。

舍利弗當に知るべし、諸佛は語異ること無し、
佛の所說の法に於て、當に大信力を生ずべし、
世尊は法久しくして後、要ず當に眞實を說きたまふべし、」
諸の聲聞衆、及び緣覺乘を求むるものに告ぐ、
「我苦縛を脫し、涅槃を逮得せしめたることは、
佛方便力を以て、示すに三乘の敎を以てす、
衆生の處處の著、之を引いて出づることを得しめんとなり。」』
爾の時に大衆の中に、諸の聲聞、(八)漏盡の阿羅漢、阿若憍陳如等の千二百人、及び聲聞、辟支佛の心を發せる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、各是の念を作さく、
『今者世尊、何が故ぞ、慇懃に方便を稱歎して是の言を作したまふ。佛の得たまへる所の法は、甚深にして解り難く、言說したまふ所有るは、意趣知り難し、一切の聲聞、辟支佛の及ぶこと能はざる所なり。佛、一解脫の義を說きたまひしかば、我等亦、此の法を得て涅槃に到れり。今、是の義の所趣を知らず。』爾の時に舍利弗、四衆の心の疑を知り、自らも亦未だ了らず。佛に白して言さく、『世尊、何の因何の緣ありてか、慇懃に諸佛第一の方便、

(八)漏盡は諸の煩惱を斷盡せるをいふ。漏は煩惱の異名。

甚深微妙難解の法を稱歎したまふ。我昔より來、未だ曾て、佛に從ひて是の如き說を聞きたてまつらず。今者四衆、咸く皆疑有り。唯、願くば世尊、斯の事を敷演したまへ。世尊何が故ぞ、慇懃に甚深微妙難解の法を稱歎したまふ。』爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言さく、

『慧日大聖尊、久しくして乃し是の法を說きたまふ、
自ら是の如き、力無畏三昧、
禪定解脫等の、不可思議の法を得たりと說きたまふ、
道場所得の法は、能く問を發す者無し、
我が意測るべきこと難し、亦能く問ふ者無し、
問ふこと無けれども而も自ら說きて、所行の道を稱歎したまふ、
智慧甚だ微妙にして、諸佛の得たまへる所なり、
無漏の諸の（一六）羅漢、及び涅槃を求むる者、
今皆疑網に墮しぬ、佛何が故ぞ是を說きたまふ、
其の緣覺を求むる者、比丘比丘尼、

【一六】羅漢は阿羅漢（Arhan）の略。小乘の敎によりて擇滅涅槃を悟れる聖者の位。

諸の天龍鬼神、及び乾闥婆等、
相視て猶豫を懷き、兩足尊を瞻仰す、
是の事云何なるべき、願はくば佛爲に解說したまへ、
諸の聲聞衆に於て、佛我を第一なりと說きたまふ、
我今自ら智に於て、疑惑して了ること能はず、
爲めて是究竟の法なりや、爲めて是所行の道なりや、
佛口所生の子、合掌瞻仰して待ちたてまつる、
願はくば微妙の音を出して、時に爲に實の如く說きたまへ、
諸の天龍神等、其の數恆沙の如し、
佛を求むる諸の菩薩、大數八萬有り、
又諸の萬億國の、轉輪聖王の至れる、
合掌して敬心を以て、具足の道を聞きたてまつらんと欲す。』

爾の時に佛、舍利弗に告げたまはく、『止みなん止みなん復說くべからず。若是の事を說かば、一切世間の諸天及び人、皆當に驚疑すべし。』舍利弗、重ねて佛に白して言さく、『世尊、唯願は

くば之を說きたまへ。唯願はくば之を說きたまへ。所以は何ん。是の會の無數百千萬億阿僧祇の衆生は、曾、諸佛を見たてまつりて、諸根猛利にして智慧明了なり。佛の所說を聞きたてまつれば、則ち能く敬信せん。』爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言さく、

『法王無上尊、唯說きたまへ願はくば慮したまふこと勿れ、
是の會の無量の衆、能く敬信すべき者有り。』

佛復、『止みなん舍利弗、若是の事を說かば、一切世間の天、人、阿脩羅皆當に驚疑すべし。增上慢の比丘は將に大阬に墜つべし。』爾の時に世尊、重ねて偈を說きて言はく、

『止みなん止みなん說くべからず、我が法は妙にして思ひ難し、
諸の增上慢の者は、聞きて必ず敬信せじ。』

爾の時に舍利弗、重ねて佛に白して言さく、『世尊、唯願はくば之を說きたまへ。唯、願はくば之を說きたまへ。今、此の會中の我が如き等比百千萬億なるは、世世に已に曾て佛に從ひて化を受けたり。此の如き人等、必ず能く敬信し、長夜安穩にして饒益する所多からん。』爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言さく、

『(110)無上兩足尊、願くば第一の法を說きたまへ、

【三】無上兩足尊は佛の尊稱。福智二莊嚴の兩足を具へたる無上尊者の意

我は爲佛の長子、唯分別し說く事を垂れたまへ、
是の會の無量衆、能く此の法を敬信せん、
佛已に曾て世世に、是の如き等を敎化したまへり、
皆一心に合掌して、佛語を聽受せんと欲す、
我等千二百、及び餘の佛を求むる者あり、
願はくば此の衆の爲の故に、唯分別し說くことを垂れたまへ、
是等此の法を聞きたてまつらば、則ち大歡喜を生せん。

爾の時に世尊、舍利弗に告げたまはく、『汝已に慇懃に三たび請じつ。豈、說かざることを得んや。汝、今諦かに聽き、善く之を思念せよ。吾、當に汝が爲に分別し解說すべし。』此の語を說きたまふ時、會中に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷五千人等有り。卽ち座より起ちて佛を禮して退きぬ。所以は何ん。此の輩は罪根深重に、及び增上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證せりと謂へり。此の如き失あり。是を以て住せず。世尊、默然として制止したまはず。爾の時に佛、舍利弗に告げたまはく、『我が今此の衆は復枝葉無し、純ら貞實のみあらん。舍利弗、是の如き增上慢の人は、退くも亦佳し。汝今善く聽け、當に汝が爲に說くべし。』

舍利弗の言さく、『唯然なり。世尊、願樂はくば聞きたてまつらんと欲す。』佛、舍利弗に告げたまはく、『是の如き妙法は、諸佛如來、時に乃し之を說きたまふ。(三)優曇鉢華の時に一たび現ずるが如きのみ。舍利弗、汝等當に佛の所說を信ずべし。言虛妄ならず。舍利弗、諸佛隨宜の說法は意趣解り難し。所以は何ん。我無數の方便、種種の因緣、譬諭の言詞を以て諸法を演說す。是の法は思量分別の能く解する所に非ず。唯諸佛のみ有して、乃し能く之を知しめせり。所以は何ん。諸佛世尊は、唯、(三)一大事の因緣を以ての故に世に出現したまふと名くる。諸佛世尊は、衆生をして佛知見を開かしめ、淸淨なるを得の故に世に出現したまふ。舍利弗、云何なるをか諸佛世尊は、唯一大事の因緣を以てしめんと欲すが故に世に出現したまふ。衆生に佛知見を示さんと欲すが故に世に出現したまふ。衆生をして、佛知見を悟らしめんと欲すが故に世に出現したまふ。衆生をして、佛知見の道に入らしめんと欲すが故に世に出現したまふ。舍利弗、是を諸佛は唯、一大事の因緣を以ての故に世に出現したまふと爲く。』佛、舍利弗に告げたまはく、『諸佛如來は但菩薩を敎化したまふ。諸の所作常に一事の爲なり。唯佛の知見を以て、衆生に示悟したまはんとなり。舍利弗、如來は

(三)優曇鉢華(Udumbara)は優鉢華、優曇華、曇華とも略稱し、義譯して靈瑞華ともいふ。

(三)一大事の因緣とは釋尊出世の本懷たる此經を說くこと。是れこの經は世尊がこの世に出現し給へる最高の大理想を說示せるものなればなり。

但、一佛乘を以ての故に、衆生の爲に法を說きたまふ。餘乘の若は二、若は三有ること無し。舍利弗、一切十方の諸佛の法も亦是の如し。舍利弗、過去の諸佛も、無量無數の方便、種種の因緣、譬諭の言辭を以て、衆生の爲に諸法を演說したまふ。是の法も皆、一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生の、諸佛に從ひたてまつりて法を聞きしも、究竟して皆一切種智を得たり。舍利弗、未來の諸佛の當に世に出でたまふべきも、亦無量無數の方便、種種の因緣、譬諭の言辭を以て、衆生の爲に諸法を演說したまふ。是の法も、皆（三三）一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生の、佛に從ひたてまつりて法を聞かんも、究竟して皆一切種智を得べし。舍利弗、現在十方の無量百千萬億の佛土の中の諸佛世尊の、衆生を饒益し安樂せしめたまふ所多き、是の諸佛も、亦無量無數の方便、種種の因緣、譬諭の言辭を以て、衆生の爲に諸法を演說したまふ。是の法も、皆一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生の、佛に從ひたてまつりて法を聞けるも、究竟して皆一切種智を得。舍利弗、是の諸佛は、但菩薩を敎化したまふ。佛の知見を以て衆生に示さんと欲すが故に。佛の知見を以て衆生を悟らしめんと欲すが故に。衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲すが故なり。舍利弗、我も今亦復是の如し。諸の衆生に、種種の欲、深心の所著有ることを知

【三三】一佛乘（Ekaboddhayāna）は一乘、佛乘とも略稱す。一切の人類を平等に佛陀たらしむることを敎ふる敎法。

りて、其本性に隨ひて、種種の因緣、譬諭の言辭、方便力を以ての故に、而も爲に法を說く。舍利弗、此の如きは、皆一佛乘の一切種智を得しめんが爲の故なり。舍利弗、十方世界の中には、尙二乘無し、何に況や三有らんや。舍利弗、諸佛は五濁の惡世に出でたまふ。所謂(三四)劫濁、(三五)煩惱濁、(三六)衆生濁、(三七)見濁、(三八)命濁なり。是の如し。舍利弗、劫の濁亂の時は、衆生垢重く、慳貪嫉妬にして、諸の不善根を成就するが故に、諸佛方便力を以て、一佛乘に於て分別して三と說きたまふ。舍利弗、若我が弟子、自ら阿羅漢、辟支佛なりと謂はん者、諸佛如來の、但菩薩を敎化したまふ事を聞かず知らずんば、此佛弟子に非ず、阿羅漢に非ず、辟支佛に非ず。又、舍利弗、是の諸の比丘、比丘尼、自ら已に阿羅漢を得たり、是最後身なり、究竟の涅槃なりと謂ひて、便ち復、阿耨多羅三藐三菩提を志求せざらん。當に知るべし。此の輩は、皆是增上慢の人なり。所以は何ん。若比丘の實に阿羅漢を得たる有りて、若此の法を信ぜずといはん。是の處有ること無けん。佛滅度の後、現前に佛無からんをば除く。所以は何ん。佛滅度の後に是の如き等の經を受持し、

(三四)劫濁は饑饉、疾疫、刀兵等起りて時代の惡しくなれるをいふ。

(三五)煩惱濁は衆生煩惱のために惱亂せられて邪行盛になるをいふ。

(三六)衆生濁は衆生の惡逆盛になりて修善の志なきに至るをいふ。

(三七)見濁は衆生の邪見增長して善道を修するものなきをいふ。

(三八)命濁は人壽短縮して長命を保つものなきをいふ。以上命濁までを五濁と稱す。

讀誦し、其の義を解る者、是の人得難ければなり。若餘佛に遇はば、此の法の中に於て、便ち決了することを得ん。舍利弗、汝等當に一心に信解して、佛語を受持すべし。諸佛如來は言虛妄無し。餘乘有ること無く、唯一佛乘のみなり。』爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

『比丘比丘尼の、增上慢を懷くこと有る、
優婆塞の我慢なる、優婆夷の不信なる、
是の如き四衆等、其の數五千有り、
自ら其の過を見ず、戒に於て缺漏有りて、
其の瑕疵を護惜す、是の小智は已に出でぬ、
衆中の糟糠なり、佛の威德の故に去りぬ、
斯の人は福德薄くして、是の法を受くるに堪へず、
此の衆は枝葉無し、唯諸の貞實のみ有り、
舍利弗善く聽け、諸佛の所得の法は、
無量の方便力をもつて、衆生の爲に說きたまふ、

衆生の心の所念、種種の所行の道、
若干の諸の欲性、先世の善惡の業、
佛悉く是を知しめし已りて、諸の緣譬論、
言辭方便力を以て、一切をして歡喜せしめたまふ、
或は、(二九)脩多羅、(三〇)伽陀及び本事、
本生未曾有を說き、亦因緣を說きたまふ、
譬論幷びに祇夜、(三一)優婆提舍經を說きたまふ、
鈍根にして小法を樂ひ、生死に貪著し、
諸の無量の佛に於て、深妙の道を行ぜずして、
衆苦に惱亂せらる、是が爲に涅槃を說きたまふ、
我是の方便を設けて、佛慧に入ることを得しむ、
未だ曾て汝等、當に佛道を成ずることを得べしと說かず、
未だ曾て說かざる所以は、說時未だ至らざるが故なり、
今正しく是れ其の時なり、決定して大乘を說く、

(二九)脩多羅(Sūtra)には通別の二義あり。前者は聖敎の部名にして契經と譯し、後者は契經中直ちに法義を說ける散文の文にて法本と譯す。今は後者なり。

(三〇)伽陀(Gāthā)は頌、諷頌と譯す。歌唱に適するやうに作られたる韻文。祇夜(韻文)と區別して孤起頌、不重頌と稱す。

(三一)優婆提舍(Upadeśa)は十二部經の一。鄔波頞鍱、優婆替舍とも書す。論議經、逐分別說と譯す。佛自ら法相を分別し、論議問答の形式にて法義を辨明したるものをいふ。

我が此の九部の法は、衆生に隨順して說く、
大乘に入るに爲本なり、故を以て是の經を說く、
佛子の心淨く、柔輭に亦利根にして、
無量の諸佛の所にして、深妙の道を行ずる有り、
此の諸の佛子の爲に、是の大乘經を說く、
我是の如き人、來世に佛道を成せんと記す、
深心に佛を念じ、淨戒を修持するを以ての故に、
是等佛を得べしと聞きて、大喜身に充遍す、
佛彼の心行を知れり、故に爲に大乘を說く、
聲聞若は菩薩、我が所說の法を聞くこと、
乃至一偈に於てもせば、皆成佛せんこと疑無し、
十方佛土の中には、唯一乘の法のみ有り、
二無く亦三無し、佛の方便の說をば除く、
但假の名字を以て、衆生を引導したまふ、

佛の智慧を說かんが故なり、諸佛世に出でたまふには、
唯此の一事のみ實なり、餘の二は則ち眞に非ず、
終に小乘を以て　衆生を濟度したまはず、
佛は自ら大乘に住したまへり、其の所得の法の如きは、
定慧の力　莊　嚴せり、此を以て衆生を度したまふ、
自ら無上道、大乘　平　等の法を證して、
若小乘を以て化する事、乃至一人に於てもせば、
我則ち慳貪に墮しなん、此の事は爲めて不可なり、
若人佛に信歸すれば、如來欺誑したまはず、
亦貪嫉の意無し、諸法の中の惡を斷じたまへり、
故に佛十方に於て、獨畏るる所無し、
我相を以て身を嚴り、光明世間を照す、
無量の衆に尊まれて、爲に實相の印を說く、
舍利弗當に知るべし、我本誓願を立てて、

一切の衆をして、我が如く等しくして異る事無から令めんと欲しき、
我昔の所願の如き、今者已に滿足しぬ、
一切衆生を化して、皆佛道に入らしむ、
若我衆生に遇へば、盡く教ふるに佛道を以てす、
無智の者は錯亂し、迷惑して教を受けず、
我知りぬ此の衆生は、未だ曾て善本を修せず、
堅く五欲に著して、癡愛の故に惱を生ず、
諸欲の因緣を以て、三惡道に墜墮し、
六趣の中に輪廻して、備さに諸の苦毒を受く、
受胎の微形、世世に常に增長し、
薄德少福の人として、衆苦に逼迫せらる、
邪見の稠林、若は有若は無等に入り、
此の諸見に依止して、六十二を具足す、
深く虛妄の法に著して、堅く受けて捨つべからず、

我慢にして自ら矜高し、諂曲にして心不實なり、
千萬億劫に於て、佛の名字を聞かず、
亦正法を聞かず、是の如き人は度し難し、
是の故に舍利弗、我爲に方便を設けて、
諸の盡苦の道を說き、之を示すに涅槃を以てす、
我涅槃を說くと雖も、是亦眞の滅に非ず、
諸法は本より來、常に自ら寂滅の相なり、
佛子道を行じ已りて、來世に作佛することを得ん、
我方便力有りて、三乘の法を開示す、
一切の諸の世尊も、皆(三一)一乘の道を說きたまふ、
今此の諸の大衆、皆應に疑惑を除くべし、
諸佛は語異ること無し、唯一にして(三二)二乘無し、
過去の無數劫の、無量の滅度の佛、
百千萬億種にして、其の數量るべからず、

【三一】一乘は(Ekayāna)一佛乘の略。一切衆生をして悉く成佛せしむる教法をいふ。乘は運載の義。法門の事。
【三二】二乘は聲聞乘と緣覺乘となり。

是の如き諸の世尊も、種種の緣譬諭、
無數の方便力をもつて、諸法の相を演說したまひき、
是の諸の世尊等も、皆一乘の法を說きて、
無量の衆生を化して、佛道に入らしめたまひき、
又諸の大聖主、一切世間の、
天人(三四)羣生の類の、深心の所欲を知しめして、
更に異の方便を以て、第一義を助顯したまひき、
若衆生の類有りて、諸の過去の佛に値ひたてまつりて、
若は法を聞きて布施し、或は(三五)持戒忍辱、
精進(三六)禪智等、種種に福德を修せし、
是の如き諸人等は、皆已に佛道を成じき、
諸佛滅度し已りて、若人善輭の心ありし、
是の如き諸の衆生は、皆已に佛道を成じき、
諸佛滅度し已りて、舍利を供養する者、

【三四】羣生は衆生に同じ。羣り居る生類の義。
【三五】持戒は六度の一。佛の制定せられし戒法を護持して犯さざること。
【三六】禪智は禪定と智慧となり。共に六度の一なり。

萬億種の塔を起てて、金銀及び頗梨、
硨磲と碼碯と、玫瑰瑠璃珠とをもつて、
清淨に廣く嚴飾し、諸の塔を莊校し、
或は石廟を起て、栴檀及び(※)沈水、
木樒幷に餘の材、甎瓦泥土等を以てせる有り、
若は曠野の中に於て、土を積みて佛廟を成し、
乃至童子の戲に、沙を聚めて佛塔を爲せる、
是の如き諸人等は、皆已に佛道を成じき、
若人佛の爲の故に、諸の形像を建立し、
刻雕して衆相を成せるは、皆已に佛道を成じき、
或は七寶を以て成し、鍮鉐赤白銅、
白鑞及び鉛錫、鐵木及與び泥、
或は膠漆布を以て、嚴飾して佛像を作せる、
是の如き諸人等は、皆已に佛道を成じき、

【※】沈水は香木の名。印度に產す。その木心及び枝節堅く重くして水に沈むが故にこの名なり。

彩畫して佛像の、百福莊嚴の相を作すこと、
自らも作し若は人をしてもせる、皆已に佛道を成じき、
乃至童子の戲に、若は草木及び筆、
或は指の爪甲を以て、畫きて佛像を作せる、
是の如き諸人等は、漸漸に功德を積み、
大悲心を具足して、皆已に佛道を成じき、
但諸の菩薩を化し、無量の衆を度脫しき、
若人塔廟、寶像及び畫像に於て、
華香瓔蓋を以て、敬心にして供養し、
若は人をして樂を作さしめ、鼓を擊ち角貝を吹き、
簫笛琴(三八)箜篌、琵琶鐃銅鈸、
是の如き諸の妙音、盡く持以て供養し、
或は歡喜の心を以て、歌唄して佛德を頌し、
乃至一の小音を以てせしは、皆已に佛道を成じき、

(三八)箜篌は坎侯、高清琴ともいふ。一種の樂器なり。

若人散亂の心に、乃至一華を以て、
畫像に供養せしは、漸く無數の佛を見たてまつりき、
或は人有りて禮拜し、或は復但合掌し、
乃至一手を擧げ、或は復少しく頭を低れて、
此を以て像に供養せしは、漸く無量の佛を見たてまつりて、
自ら無上道を成じて、廣く無數の衆を度し、
無餘涅槃に入ること、薪盡きて火の滅ゆるが如くなりき、
若人散亂の心に、塔廟の中に入りて、
一たび(三九)南無佛と稱せしは、皆已に佛道を成じき、
諸の過去の佛の、現在或は滅後に於て、
若是の法を聞くこと有りしは、皆已に佛道を成じき、
未來の諸の世尊、其の數量有ること無けん、
是の諸の如來等も、亦方便して法を說きたまはん、
一切の諸の如來、無量の方便を以て、

(三九)南無佛は三歸依の一。佛に歸依すること。

諸の衆生を度脱して、佛の(四)無漏智に入れたまはん、
若法を聞くこと有らん者は、一りとして成佛せずといふ事無けん、
諸佛の(四)本誓願は、我が所行の佛道、
普く衆生をして、亦同じく此の道を得しめんと欲す、
未來世の諸佛、百千億、
無數の諦の法門を說きたまふと雖も、其實には一乘の爲なり、
諸佛兩足尊、法は常に無性なり、
佛種は緣によりて起ると知しめす、是の故に一乘を說き給はん、
是の法法位に住して、世間相常住なり、
道場に於て知しめし已りて、導師は方便して說きたまはん、
天人の供養したてまつる所の、現在十方の佛、
其の數恆沙の如く、世間に出現したまふも、
衆生を安穩ならしめんが故に、亦是の如き法を說きたまふ、
第一の寂滅を知しめして、方便力を以ての故に、

【四】無漏智は煩惱の汚染を離れたる淸淨の智慧。
【四】本誓願は本誓、本願とも略稱す。本因の誓願、因位の發願。

種種の道を示すと雖も、其實には佛乘の爲なり、
衆生の諸行、深心の所念、
過去所習の業、欲性 精 進力、
及び諸根の利鈍を知しめして、種種の因緣、
譬諭亦言辭を以て、應に隨ひて方便して說きたまふ、
今我も亦是の如し、衆生を安穩ならしめんが故に、
種種の法門を以て、佛道を宣示す、
我智慧力を以て、衆生の性欲を知りて、
方便して諸法を說きて、皆歡喜することを得しむ、
舍利弗當に知るべし、我佛眼を以て觀じて、
六道の衆生を見るに、貧窮にして福慧無し、
生死の險道に入りて、相續して苦斷えず、
深く五欲に著すること、(四三)犛牛の尾を愛するが如し、
貪愛を以て自ら蔽ひ、盲瞑にして見る所無し、

【四三】犛牛は長尾牛。

大勢の佛、與及び斷苦の法を求めず、
深く諸の（四三）邪見に入りて、苦を以て苦を捨てんと欲す、
是の衆生の爲の故に、而も大悲心を起しき、
我始め道場に坐して、觀樹し亦經行して、
三七日の中に於て、是の如き事を思惟しき、
「我が所得の智慧は、微妙にして最も第一なり、
衆生の諸根鈍にして、樂に著し癡に盲ひられたり、
斯の如きの等類、云何がしてか度す可き」と、
爾の時に諸の（四四）梵王、及び諸の天帝釋、
（四五）護世四天王、及び大自在天、
幷びに餘の諸の天衆、眷屬百千萬、
恭敬合掌し禮して、我に轉法輪を請ず、
我卽ち自ら思惟すらく、「若但佛乘を讚めば、
衆生苦に沒在し、是の法を信ずること能はじ、

【四三】邪見は五見の一。因果の道理を無視する妄見。
【四四】梵王は梵天王の略名。色界初禪天の主にして三界の王なり。
【四五】護世四天王とは世間を守護する持國、增長廣目多聞の四天王なり。

法を破して信ぜざるが故に、(四六)三惡道に墜ちなん、
我寧ろ法を說かずとも、疾く涅槃にや入りなまし、
尋いで過去の佛の、所行の方便力を念ふに、
我が今得る所の道も、亦應に三乘と說くべし、」
是の思惟を作す時、十方の佛皆現じて、
梵音をもつて我を慰諭したまふ、「善い哉(四七)釋迦文、
第一の導師、是の無上の法を得たまへども、
諸の一切の佛に隨ひて、方便力を用ひたまふ、
我等も亦皆、最妙第一の法を得れども、
諸の衆生類の爲に、分別して三乘と說く、
少智は小法を樂ひて、自ら作佛せんことを信ぜず、
是の故に方便を以て、分別して諸果を說く、
復三乘を說くと雖も、但菩薩を敎へんが爲なり」と、
舍利弗當に知るべし、我(四八)聖師子の、

【四六】三惡道は六趣の中、地獄、餓鬼、畜生をいふ。
【四七】釋迦文(Śākyamuni)は釋迦牟尼とも書す。釋尊の尊稱。
【四八】聖師子は佛の異稱。佛は聖法の王なるが故に師子に譬ふ。

深淨微妙の音を聞きて、喜びて南無佛と稱す、
復是の如き念を作す、「我濁惡世に出でたり、
諸佛の所說の如く、我も亦隨順して行せん」と、
是の事を思惟し已りて卽ち(四九)波羅奈に趣く、
諸法寂滅の相は、言を以て宣ぶべからず、
方便力を以ての故に、(五〇)五比丘の爲に說く、
是を轉法輪と名く、便ち涅槃の音、
及び阿羅漢、法僧差別の名有り、
久遠劫より來、涅槃の法を讚示して、
生死の苦永く盡すと、我常に是の如く說きき、
舍利弗當に知るべし、我佛子等を見るに、
佛道を志求する者、無量千萬億、
咸く恭敬の心を以て、皆佛所に來至せり、
曾て諸佛に從ひて、方便所說の法を聞けり、

【四九】波羅奈（ヴァーラーナシー Vārāṇasī）は波羅奈斯の略。中印度の國名。今のベナレス(Benares)に當る。世尊の初めて法を說かれし鹿野苑の在る地名。

【五〇】五比丘は阿若憍陳如、額鞞、跋提、十力迦葉、拘利なり。之を釋尊最初の弟子となす。

我卽ち是の念を作く、「如來出でたる所以は、
佛慧を說かんが爲の故なり、今正しく是其の時なり、」
舍利弗當に知るべし、鈍根小智の人、
著相憍慢の者は、是の法を信ずること能はじ、
今我喜びて畏無し、諸の菩薩の中に於て、
正直に方便を捨てて、但無上道を說く、
菩薩是の法を聞きて、疑網皆已に除く、
千二百の羅漢、悉く亦當に作佛すべし、
三世の諸佛の、說法の儀式の如く、
我も今亦是の如く、無分別の法を說く、
諸佛世に興出したまふこと、懸遠にして値遇する事難し、
正使世に出でたまふとも、是の法を說きたまふこと復難し、
無量無數劫にも、是の法を聞くこと亦難し、
能く是の法を聽く者、斯の人亦復難し、

譬へば優曇華の、一切皆愛樂し、
天人の希有にする所にして、時時に乃し一たび出づるが如し、
法を聞きて歡喜し讚めて、乃至一言を發すは、
則ち爲已に、一切の三世の佛を供養するなり、
是の人甚だ希有なること、優曇華に過ぎたり、
汝等疑有ること勿れ、我は爲諸法の王、
普く諸の大衆に告ぐ、「但一乘の道を以て、
諸の菩薩を敎化して、聲聞の弟子無し、」
汝等舍利弗、聲聞及び菩薩、
當に知るべし是の妙法は、諸佛の祕要なり、
五濁の惡世には、但諸欲に樂著するを、
是の如き等の衆生、終に佛道を求めず、
當來世の惡人は、佛說の一乘を聞きて、
迷惑して信受せず、法を破して惡道に墮せん、

慙愧清淨にして、佛道を志求する者有らば、
當に是の如き等の爲に、廣く一乘の道を讚むべし、
舍利弗當に知るべし、諸佛の法是の如く、
萬億の方便を以て、宜しきに隨ひて法を說きたまふ、
其の習學せざる者は、此を曉了すること能はじ、
汝等既に已に、諸佛世の師の、
隨宜方便の事を知れり、復諸の疑惑無く、
心に大歡喜を生じて、自ら當に作佛すべしと知れ、」

卷の第二

譬諭品第三

爾の時に舍利弗、踊躍歡喜して、卽ち起ちて合掌し、尊顏を瞻仰して佛に白して言さく、『今世尊に從ひたてまつりて此の法音を聞きて、心に踊躍を懷き、未曾有なることを得たり。所以は何ん。我昔、佛に從ひて是の如き法を聞き、諸の菩薩の受記作物を見しかども、而も我等は斯の事に預らず。甚だ自ら、如來の無量の知見を失へるを感傷しき。世尊、我常に獨山林樹下に處して、若は坐し若は行じて、每に是の念を作しき。「我等も同じく（一）法性に入れり。云何ぞ如來、小乘の法を以て濟度せらるる」と。是我等が咎なり。世尊には非ず。所以は何ん。若我等、所因の阿耨多羅三藐三菩提を成就することを說きたまふを待たましかば、必ず大乘を以て度脫することを得てまし。然るに我等、方便隨宜の所說を解らずして、初め佛法を聞きて、遇便ち信受し、思惟して證を取れり。世尊、我昔より來、終日竟夜、每に自ら剋責しき。而るに今、佛に

（一）法性は萬法の實性と云ふこと。實相と云ふに同じ。涅槃、法身、眞如等皆同義の異語なり。

從ひたてまつりて、未だ聞かざる所の未曾有の法を聞きて、諸の疑悔を斷じ、身意泰然として、快く安穩なることを得たり。今日乃ち知りぬ。眞に是佛子なり。佛口より生じ、法化より生じて、佛法の分を得たり。』爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說き言さく、

『我是の法音を聞きて、未曾有なる所を得て、
心に大歡喜を懷き、疑網皆已に除こりぬ、
昔より來佛敎を蒙りて、大乘を失はず、
佛の音は甚だ希有にして、能く衆生の惱を除きたまふ、
我已に漏盡を得れども、聞きて亦憂惱を除く、
我山谷に處し、或は林樹の下に在りて、
若は坐し若は經行して、常に是の事を思惟し、
嗚呼しく深く自ら責めて、「云何ぞ自ら欺ける、
我等も亦佛子にして、同じく無漏の法に入れども、
未來に於て、無上道を演說すること能はず、
(二)金色三十二、(三)十力諸の解脫、

【二】金色三十二は金色の佛身に具せる三十二相をいふ。
【三】十力は佛の具有せる十種の力能。卽ち知是處非處智、三世業報智、知諸禪解脫三昧智、知諸根勝劣智、知種種解智、知種種界智、知一切至所道智、知天眼無礙智、知宿命無漏智、

同じく共に一法の中にして、而も此の事を得ず、
(四)八十種の妙好、(五)十八不共の法、
是の如き等の功德、而も我皆已に失へり、
我獨經行せし時、佛大衆に在して、
名聞十方に滿ち、廣く衆生を饒益したまふを見て、
自ら惟はく此の利を失へり、我爲自ら欺誑せり」と、
我常に日夜に於て、每に是の事を思惟して、
以て世尊に問ひ奉らんと欲す、「爲めて失へりや爲めて失はずや、」
我常に世尊を見たてまつるに、諸の菩薩を稱讚したまふ、
是を以て日夜に、是の如きの事を籌量しき、
今佛の音聲を聞きたてまつるに、宜しきに隨ひて法を說き給へり、
無漏は思議し難し、衆をして道場に至らしむ、
我本邪見に著して、諸の(六)梵志の師と爲りき、
世尊我が心を知しめして、邪を拔き涅槃を說きたまひしかば、

知永斷習氣智のこと。
【四】八十種の妙好。佛身に具せる八十種好をいふ。
【五】十八不共の法は佛の具有せる十八種の獨特の法。卽ち身無失、口無失、念無失、無異想、無不定心、無不知已捨、欲無減、精進無減、念無減、慧無減、解脫無減、解脫知見無減、一切身業隨智慧行、一切口業隨智慧行、一切意業智隨智慧行、智慧知過去世無礙、智慧知未來世無礙、智慧知現在世無礙のこと。
【六】梵志（Brahmacārin）は淨裔と譯す。婆羅門の生活に四種ある中の第二、師に事へて學問する間をいふ。

我悉く邪見を除きて、空法に於て證を得たり、
爾の時に心に自ら謂ひき、「滅度に至ることを得たり」と、
而るに今乃ち自ら覺りぬ、是實の滅度に非ず、
若作佛することを得ん時は、三十二相を具し、
天人夜叉衆、龍神等恭敬せん、
是時乃ち謂ふべし、「永く盡滅して餘無し」と、
佛大衆の中に於て、「我當に作佛すべし」と說きたまふ、
是の如きの法音を聞きて、疑悔悉く已に除こりぬ、
初め佛の所說を聞きて、心中大いに驚疑しき、
「將に魔の佛と作りて、我が心を惱亂するに非や」と、
佛種種の緣、譬諭を以て巧に言說したまふ、
其の心安きこと海の如し、我聞きて疑網斷じぬ、
佛說きたまはく「過去世の、無量の滅度の佛、
方便の中に安住して、亦皆是の法を說きたまへり、

現在未來の佛、其の數量有ること無きも、
亦諸の方便を以て、是の如き法を演說したまふ、
今者の世尊の如きも、生じたまひしより及び出家し、
得道し法輪を轉じたまふまで、亦方便を以て說きたまふ、
世尊は實道を說きたまふ、(七)波旬は此の事無し、
是を以て我定めて知りぬ、是魔の佛と作るには非ず、
我疑網に墮するが故に、是魔の所爲と謂へり、
佛の柔輭の音、深遠に甚だ微妙にして、
淸淨の法を演暢したまふを聞きて、我が心大いに歡喜し、
疑悔永く已に盡きて、實智の中に安住す、
我定めて當に作佛して、天人に敬はるることを爲、
無上の法輪を轉じて、諸の菩薩を敎化すべし、」

爾の時に佛、舍利弗に告げたまはく、『我今、天、人、沙門、婆羅門等の大衆の中に於て說く。
「我昔、一二萬億の佛の所に於て、無上道の爲の故に、常に汝を敎化す。汝亦長夜に我に隨ひて受

(七)波旬(Pāpīya)は惡、殺者と譯す。魔の異稱。常に惡意を懷き惡法を成就すといふ。

學しき。我方便を以て、汝を引導せしが故に、我が法の中に生れたり。舍利弗、我昔、汝をして佛道を志願せしめき。汝今悉く忘れて、便ち自ら已に滅度を得たりと謂へり。我今還りて、汝をして、本願所行の道を憶念せしめんと欲するが故に、諸の聲聞の爲に、此の大乘經の妙法蓮華、敎菩薩法、佛所護念と名づくるを說く。舍利弗、汝未來世に於て、無量無邊不可思議劫を過ぎて、若干の千萬億の佛を供養し、正法を奉持し、菩薩所行の道を具足して、當に作佛することを得べし。號をば華光如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰ひ、國をば離垢と名けん。其の土平正にして、淸淨嚴飾、安穩豐樂にして、天人熾盛ならん。瑠璃を地と爲して八つの交道有り。黃金を繩と爲して、以て其の側を界ひ、其の傍に各七寶の行樹有りて、常に華果有らん。華光如來、亦三乘を以て衆生を敎化せん。舍利弗、彼の佛出でたまはん時は、惡世に非ずと雖も、本願を以ての故に、三乘の法を說きたまはん。其の劫をば大寶莊嚴と名けん。何が故ぞ、名けて大寶莊嚴と曰ふ。其の國の中には、菩薩を以て大寶と爲くるが故なり。彼の諸の菩薩、無量無邊不可思議にして、算數譬諭も及ぶこと能はざる所ならん。佛の智力に非ずんば、能く知る者無けん。若行かんと欲する時は、寶華足を承く。此の諸の菩薩は、初めて意を發せるに非ず。皆久しく德本を植ゑて、無量百千萬億の佛所に於て、

淨く梵行を修し、常に諸佛に稱歎せらるることを爲、常に佛慧を修し、大神通を具し、善く一切の諸法の門を知り、質直無僞にして、志念堅固ならん。是の如き菩薩、其の國に充滿せん。舍利弗、華光佛は壽十二小劫ならん。王子と爲りて、未だ作佛せざる時を

ば除く。其の國の人民は、壽八小劫ならん。華光如來十二小劫を過ぎて、堅滿菩薩に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けて、諸の比丘に告げん。

「是の堅滿菩薩、次に當に作佛すべし。號をば華足安行、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀と曰はん。其の佛の國土も、亦復是の如くならん。」

舍利弗、是の華光佛の滅度の後、(八)正法世に住すること三十二小劫、(九)像法世に住すること亦三十二(10)小劫ならん。』爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

『舍利弗來世に、佛普智尊と成り、
號をば名けて華光と曰はん、將に無量の衆を度すべし、
無數の佛を供養し、菩薩の行、
十力等の功德を具足して、無上道を證せん、

【八】正法は三時の一。佛滅後暫時の間、敎、行、證の三法具はりて成れる時期をいふ。

【九】像法は三時の一。正法の次期をいふ。此時期には敎、行は存すれど證を得るものなし。像は像似の義、正法に似るなり。

【10】小劫の劫は劫波の略。長時と譯す。人壽十歲の時より百年に一歲を增して八萬四千歲に至り、八萬四千歲より復百年に一歲を減じて十歲に至る間を一增減とし一小劫とす。

無量劫を過ぎ已りて、劫をば大寶嚴と名け、
世界をば離垢と名けん、清淨にして瑕穢無く、
瑠璃を以て地と爲し、金繩其の道を界ひ、
七寶雜色の樹に、常に華果實有らん、
彼の國の諸菩薩は、志念常に堅固にして、
神通波羅蜜、皆已に悉く具足し、
無數の佛の所に於て、善く菩薩の道を學せん、
是の如き等の大士は、華光佛の所化ならん、
佛王子爲らん時、國を棄て世の榮を捨てて、
最末後の身に於て、出家して佛道を成せん、
華光佛は世に住する、壽命十二小劫、
其の國の人民衆は、壽命八小劫ならん、
佛滅度の後、正法世に住すること、
三十二小劫、廣く諸の衆生を度せん、

正法滅盡し已りて、像法三十二ならん、
舍利廣く流布して、天人普く供養せん、
華光佛の所爲、其の事皆是の如し、
其の兩足聖尊、最勝にして倫匹無けん、
彼卽ち是汝が身なり、宜しく應に自ら欣慶すべし。』

爾の時に四部の衆の、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等の大衆、舍利弗の佛前に於て、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを見て、心大いに歡喜して、踊躍すること無量なり。各各に、身に著けたる所の上衣を脫ぎて、以て佛に供養す。釋提桓因、梵天王等、無數の天子と、亦天の妙衣、天の曼陀羅華、摩訶曼陀羅華等を以て佛に供養す。所散の天衣、虛空の中に住して自ら廻轉す。諸天の伎樂百千萬種、虛空の中に於て一時に俱に作し、諸の天華を雨す。而して是の言を作さく、『佛昔、波羅柰に於て、初めて法輪を轉じ、今乃ち復、無上最大の法輪を轉じたまふ。』

爾の時に諸天子、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言さく、

『昔波羅柰に於て、四諦の法輪を轉じ、

分別して諸法、五衆の生滅を説きたまひき、
今復最妙、無上の大法輪を轉じたまふ、
是の法は甚だ深奥にして、能く信ずる者有ること少なり、
我等昔より來、數世尊の説を聞きたてまつるに、
未だ曾て是の如き、深妙の上法を聞かず、
世尊是の法を説きたまふに、我等皆隨喜す、
大智舍利弗、今尊記を受くることを得たり、
我等亦是の如く、必ず常に作佛して、
一切世間に於て、最尊にして上有ること無きことを得べし、
佛道は思議し叵し、方便して宜しきに隨ひて説きたまふ、
我が所有の福業、今世若は過世、
及び見佛の功德、盡く佛道に廻向す。』

爾の時に舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、我今復疑悔無し。親り佛前に於て、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得たり。是の諸の千二百の心自在なる者、昔學地に住せしに、佛常に敎

化して言はく、「我が法は能く生老病死を離れて、涅槃を究竟す」と。是學無學の人、亦各自ら我見、及び有無の見等を離れたるを以て、涅槃を得たりと謂へり。而るに今、世尊の前に於て、未だ聞かざる所を聞きて、皆疑惑に墮しぬ。善い哉世尊、願はくば四種の爲に其の因緣を說き、疑悔を離れしめたまへ。』爾の時に佛、舍利弗に告げたまはく、『我先に諸佛世尊、種種の因緣、譬諭の言詞を以て、方便して法を說きたまふは、皆、阿耨多羅三藐三菩提の爲なりと言はずや。是の諸の所說は、皆、菩薩を化せんが爲の故に、然も舍利弗、今當に復譬諭を以て、更に此の義を明すべし。諸の智有らん者、譬諭を以て解ることを得ん。舍利弗、若國邑聚落に(一)大長者有らん。其の年衰邁して財富無量なり。多く田宅及び諸の童僕有り。其の家廣大にして、唯一門有り。諸の人衆多くして、一百二百、乃至五百人、其の中に止住せり。堂閣朽ち故り、墻壁隤れ落ち、柱根腐ち敗れ、梁棟傾き危し。周帀して俱時に、欻然に火起りて舍宅を焚燒す。長者の諸子、若は十、二十、或は三十に至るまで、此の宅中に在り。長者是の大火の四面より起るを見て、卽ち大いに驚怖して、是の念を作さく、「我能く此の所燒の門より、安穩に出づることを得たりと雖も、而も諸子等、火宅の內に於て嬉戲に樂著して、覺らず、知らず、驚かず、怖ぢず。

(一)長者は豪族の稱。姓貴、位高、大富、威猛、智深、年耆、行淨、禮備、上歎、下歸等の諸德を具せる人。

火來りて身を逼め、苦痛己を切むれども、心厭患せず。出でんと求むる意無し。」舍利弗、是の長者、是の思惟を作さく、「我身手に力有り。當に衣裓を以てや、若は几案を以てや、舍より之を出すべき。」復更に思惟すらく、「是の舍唯一門有り。而も復狹小なり。諸子幼稚にして未だ識る所有らず。戲處に戀著せり。或は當に墮落して火に燒かるべし。我當に爲に怖畏の事を說くべし。此の舍已に燒く。宜しく時に疾く出でて、火に燒害せられしむること無かれ。」是の念を作し已りて、思惟する所の如く、具さに諸子に告ぐ、「汝等速かに出でよ」と。父憐愍して、善言をもつて誘諭すと雖も、而も諸子等、嬉戲に樂著して、肯て信受せず。驚かず、畏れず。了に出づる心無し。亦復知らず、「何者か是火、何者か爲舍、云何なるをか失ふと名くる」と。但東西に走り戲れて、父を視て已みぬ。爾の時に長者、卽ち是の念を作さく、「此の舍已に大火に燒かる。我及び諸子、若時に出でずんば必ず焚かれなん。我今當に方便を設けて、諸子等をして、斯の害を免るることを得しむべし。」父、諸子〔三〕先心に、各好む所有る種種の珍玩、奇異の物には、情必ず樂著せんと知りて、之に告げて言はく、「汝等が玩好すべき所は稀有にして得難し。汝若取らずんば、後に必ず憂悔せん。此の如き種種の羊車、鹿車、牛車、今門外に在り。以て遊戲すべし。汝等此の火宅より、宜しく速かに出で來るべし。汝が所

〔三〕先心とはうまれつき、天性のこと。

欲に隨ひて、皆當に汝に與ふべし。」爾の時に諸子、父の所說の珍玩の物を聞くに、其の願に適へるが故に、心各勇銳して、互ひに相推排し、競ひて共に馳走し、爭ひて火宅を出づ。是の時に長者、諸子等の安穩に出づることを得て、皆四衢道の中の露地に於て、坐して復障礙無きを見て、其の心泰然として歡喜踊躍す。時に諸子等、各父に白して言さく、「父、先に許したまふ所の玩好の具の、羊車、鹿車、牛車、願はくば時に賜與したまへ。」舍利弗、爾の時に長者、各諸子に等一の大車を賜ふ。其の車、高廣にして衆寶莊校せり。周帀して欄楯あり。四面に鈴を懸けたり。又、其の上に於て〔三〕幰蓋を張り設く。亦、珍奇の雜寶を以て之を嚴飾せり。寶繩絞絡して、諸の華纓を垂れ、〔四〕縈延を重ね敷き、丹枕を安置し、駕するに白牛を以てす。膚色充潔に、形體姝好にして大筋力有り。行步平正にして、其の疾きこと風の如し。又、僕從多く之を侍衞せり。所以は何ん。是の大長者、財富無量にして、種種の庫藏に悉く皆充溢せり。而も是の念を作さく、「我、財物極り無し。應に下劣の小車を以て諸子等に與ふべからず。今此の幼童は、皆是吾が子なり。愛するに偏黨無し。我、是の如き七寶の大車有り。其の數無量なり。應當に等心にして、各各に之を與ふべし。宜しく差別すべからず。所以は何ん。我が此の物を以て、周く一國に給すとも、猶尙匱しからじ。何に況や諸子をや。」是の

〔三〕幰蓋はかけがさ。
〔四〕縈延はしとね。

時に諸子、各大車に乘りて、未曾有なることを得て、本の所望に非ざるが如し。舍利弗、汝が意に於て云何。是の長者、等しく諸子に珍寶の大車を與ふ。寧ろ虛妄有や不や。』舍利弗の言さく、『不なり、世尊、是の長者、但諸子をして火難を免れ、其の軀命を全うすることを得しむとも、爲虛妄に非ず。何を以ての故に、若身命を全うすれば、便ち爲已に玩好の具を得たるなり。況や復、方便して、彼の火宅に於て、而も之を拔濟せんをや。世尊、若是の長者、乃至最小の一車を與へずとも、猶虛妄ならじ。何を以ての故に、是の長者の先に是の意を作さく、「我方便を以て、子をして出づることを得しめん」と。是の因緣を以て虛妄無し。何に況や長者、自ら財富無量なりと知りて、諸子を饒益せんと欲して、等しく大車を與ふるをや。』佛、舍利弗に告げたまはく、『善い哉善い哉、汝が所言の如し。舍利弗、如來も亦復是の如し。則ち爲一切世間の父なり。諸の怖畏、衰惱、憂患、無明、闇蔽に於て、永く盡して餘無し。悉く無量の知見、(一五)力、(一六)無所畏を成就し、大神力及び智慧力有りて、方便智慧波羅蜜を具足せり。大慈大悲常に懈倦無し。恆に善事を求めて一切を利益す。而も三界の朽ち故りたる火宅に生ずる事、衆生の生老病死、憂悲苦惱、愚癡暗蔽、三毒の火を度して、敎化して阿耨多羅三藐三菩提を

(一五)力は佛の具有せる十力にして前に示せるが如し。

(一六)無所畏は一切知、漏盡、說障道、說盡苦道の四無所畏なり。如來の德を顯す語。

(七)五欲は眼、耳、鼻、舌、身の對境たる色、聲、香、味、

得しめんが爲なり。諸の衆生を見るに、生老病死、憂悲苦惱に燒煑せらる。亦、(一九)五欲財利を以ての故に、種種の苦を受く。又、貪著追求を以ての故に、現には衆苦を受け、後には地獄、(二〇)畜生、(二一)餓鬼の苦を受け、若は(二二)天上に生れ、及び(二三)人間に在りては、貧窮困苦、愛別離苦、怨憎會苦、是の如き等の種種の諸苦あり。衆生其の中に沒在して、歡喜し遊戲して、覺えず、知らず、驚かず、怖れず。亦、厭ふことを生さず。解脫を求めず。此の三界の火宅に於て、東西に馳走して大苦に遭ふと雖も、以て患と爲さず。舍利弗、佛此を見已りて、便ち是の念を作さく、「我は爲衆生の父なり。應に其の苦難を拔き、無量無邊の佛智慧の樂を與へて、其をして遊戲せしむべし。」舍利弗、如來復是の念を作さく、「若我、但神力及び智慧力を以て、方便を捨てて諸の衆生の爲に、如來の知見、力、無所畏を讚めば、衆生是を以て得度することを能はじ。所以は何ん。是の諸の衆生、未だ生老病死、憂悲苦惱を免れず。而も三界の火宅に燒かる。何に由りてか能く佛の智慧を

(一九)五欲財利。五欲とは、色、聲、香、味、觸の欲。また財、色、飲食、名、睡眠の欲。

(二〇)畜生。畜生は梵名を(Tiryagyoni)と云ひ、傍生、橫生とも譯す。三惡趣、六道の一。性魯鈍にして自立する能はず、他に畜養せらるゝ生類の義。惡業を造り愚癡深き衆生の墮する境界。

(二一)餓鬼。餓鬼は梵名を(Preta)と云ひ、三惡趣、六道の一。この界の衆生は常に饑餓の苦あるが故にこの名あり。地下五百由旬の冥の界邊を本所とす。これに三種、九種あり。

(二二)天上。天上は六道、十界の一。欲、色、無色の三界の諸天をいふ。卽ち六欲天、四禪天、四無色天是れなり。上品の十善、また世間の禪定を修したる者の生るゝ所なり。

解らん。」舍利弗、彼の長者、復身手に力有りと雖も、而も之を用ひず。但慇懃の方便を以て、諸子の火宅の難を勉濟して、然して後に、各珍寶の大車を與ふるが如く、如來も亦復是の如し。力、無所畏有りと雖も、而も之を用ひず。但智慧方便を以て、三界の火宅に於て、衆生を拔濟せんとして、爲に三乘の聲聞、辟支佛、佛乘を說く。而して是の言を作さく、「汝等樂つて、三界の火宅に住することを得ること莫れ。麤弊の色聲香味觸を貪ること勿れ。若貪著して愛を生ぜば、則ち燒かれなん。汝速かに三界を出でて、當に三乘の聲聞、辟支佛、佛乘を得べし。我今汝が爲に此の事を保任す。終に虛しからず。汝等、但當に勤修精進すべし。」如來、是の方便を以て衆生を誘進す。復是の言を作さく、「汝等當に知るべし。此の三乘の法は、皆是聖の稱歎したまふ所なり。自在無繫にして、依求する所無し。是の三乘に乘じ、無漏の根、力、覺、道、禪定、解脫、三昧等を以て、自ら娛樂して、便ち無量の安穩快樂を得ん。」舍利弗、若衆生有りて、內に智性有りて、佛世尊に從ひて法を聞き、信受し慇懃に精進し、速かに三界を出でんと欲し自ら涅槃を求むる。是を聲聞乘と名く。彼の諸子の羊車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。若衆生有りて、佛世尊に從ひて法を聞きて信受し、慇懃に精進して自然慧を求め、

【三】人間は六道、十界の一。この界は苦樂相半し、善惡相雜はる世界。卽ち吾人の境界なり。吾人は過去に五戒を持ちたる功力によりてこの境界に生れたり。

獨善寂を樂ひ、深く諸法の因緣を知る。是を辟支佛乘と名く。彼の諸子の、鹿車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。若衆生有りて、佛世尊に從ひて法を聞きて信受し、勤修精進して一切智、佛智、自然智、無師智、如來の知見、力、無所畏を求め、無量の衆生を愍念安樂し、天人を利益し、一切を度脫す。是を大乘と名く。菩薩此の乘を求むるが故に、名けて摩訶薩と爲す。彼の諸子の、牛車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。舍利弗、彼の長者、諸子等の安穩に火宅を出づることを得て、無畏の處に到るを見て、自ら財富無量なることを惟ひて、等しく大車を以て諸子に賜ふが如し。如來も亦復是の如し。爲一切衆生の父なり。若無量億千の衆生、佛敎の門を以て、三界の苦、怖畏險道を出でて、涅槃の樂を得たるを見て、如來爾の時に、便ち是の念を作なく、「我に無量無邊の智慧、力、無畏等の諸佛の法藏有り。是の諸の衆生は皆是我が子なり。等しく大乘を與ふべし。人として獨滅度を得ること有らしめじ。皆如來の滅度を以て之を滅度せん。」是の諸の衆生の三界を脫れたる者には、悉く諸佛の禪定、解脫等の娛樂の具を與ふ。皆是一相一種にして、聖の稱歎したまふ所なり。能く淨妙第一の樂を生ず。舍利弗、彼の長者、初め三車を以て諸子を誘引し、然して後に、但大車の寶物をもつて莊嚴し、安穩第一なるを與ふるに、然も彼の長者虛妄の咎無きが如く、如來も亦復是の如し。虛妄有ること無し。初めて三乘を說きて衆生

を引導し、然して後に、但大乘を以て之を(二二)度脫す。何を以ての故に、如來無量の智慧、力、無所畏、諸法の藏有りて、能く一切衆生に大乘の法を與ふ。但盡して能く受けず。舍利弗、此の因緣を以て當に知るべし。「諸佛方便力の故に、一佛乘に於て、分別し三と說きたまふ。」」佛、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

『譬へば長者、一の大宅有らん、
其の宅久しく故りて、復頓弊し、
堂舍高く危く、柱根摧け朽ち、
梁棟傾き斜み、基陛頹れ毀たれ、
牆壁圮れ折け、泥塗褫け落ち、
覆苫亂れ墜ち、椽梠差ひ脫け、
周障屈曲して、雜穢充徧せり、
五百人有りて、其の中に止住す、
鴟梟(二三)鵰鷲、烏鵲(二四)鳩(二五)鴿、
(二六)蚖蛇(二七)蝮(二八)蠍、(二九)蜈蚣(三〇)蚰蜒、

【二二】度脫は證悟に同じ。生死海を度りて迷苦を脫すること。
【二三】鴟はくまだか。
【二四】鳩はやまばと。
【二五】鴿はいへばと。
【二六】蚖蛇はからすへび。
【二七】蝮はまむし。
【二八】蠍はさそり。
【二九】蜈蚣はむかで。
【三〇】蚰蜒はげじげじ。

守宮(三一)百足、鼬貍(三二)鼷鼠、
諸の惡蟲の輩、交横馳走す、
屎尿の臭き處、不淨流れ溢ち、
(三三)蜣蜋の諸蟲、其の上に集れり、
狐狼(三四)野干、咀嚼し踐蹋し、
鱗齧して死屍の、骨肉狼藉せり、
是に由りて羣狗、競ひ來りて搏撮し、
飢羸悼惶して、處處に食を求む、
鬪諍搏擲し、唖齕唬吠す、
其の含の恐怖、變ずる狀是の如し、
處處に皆、(三五)魍魎(三六)魍魎有り、
夜叉惡鬼、人肉を食噉す、
毒蟲の屬、諸の惡禽獸、
孕乳產生して、各自ら藏し護る、

(三一)百足はなさむし。
(三二)鼬はあまくち。
(三三)蜣蜋はくそむし。
(三四)野干はこぎつれ。
(三五)魑魅。魑は山の神にて虎の形をなし、魅は澤の神にて豬頭人形たり。
(三六)魍魎は山川、木石の變怪をいふ。

夜叉競ひ來りて、爭ひ取りて之を食す、
之を食して既に飽きぬれば、惡心轉た熾にして、
鬪諍の聲、甚だ怖畏すべし、
(三七)鳩槃茶鬼、土埵に蹲踞せり、
或時は地を離るること、一尺二尺、
往返遊行し、縱逸嬉戲す。
狗の兩足を捉つて、撲ちて聲を失はしめ、
脚を以て頸に力へて、狗を怖して自ら樂む、
復諸鬼有り、其の身長大、
羸形黑瘦にして、常に其の中に住せり、
大惡聲を發して、叫呼して食を求む、
復諸鬼有り、其の咽鍼の如し、
復諸鬼有り、首牛頭の如し、
或は人肉を食ひ、或は復狗を噉ふ、

(三七)鳩槃茶鬼(Kumbhāṇḍa)は陰囊、形卵と譯し、厭眉鬼、冬瓜鬼と名く。人の精氣を噉ふ鬼なり。

頭髪蓬亂して、殘害兇險なり、
飢渴に逼められて、叫喚馳走す、
夜叉餓鬼、諸の惡鳥獸、
飢急にして四向し、窻牖を闚ひ看る、
是の如き諸難、恐畏無量なり、
是の朽ち故りたる宅は、一人に屬せり、
其の人近く出で、未だ久しからざる間に、
後に舍宅に、忽然に火起る、
四面一時に、其の焰俱に熾なり、
棟梁椽柱、爆聲震裂し、
摧折墮落し、墻壁崩倒す、
諸の鬼神等聲を揚げて、大いに叫ぶ、
鵰鷲の諸鳥、鳩槃茶等、
周憧惶怖し、自ら出づること能はず、

惡獸毒蟲、孔穴に藏竄し、
(三八)毗舍闍鬼、亦其の中に住せり、
福德薄きが故に、火に逼められ、
共に相殘害して、血を飲み肉を噉ふ、
野干の屬、竝びに已に前に死す、
諸の大惡獸、競ひ來りて食噉す、
臭煙蓬悖して、四面に充塞す、
蜈蚣蚰蜒、毒蛇の類、
火に燒かれて、爭ひ走りて穴を出づ、
鳩槃荼鬼、隨ひ取りて食ふ、
又諸の餓鬼、頭上に火燃ゆ、
飢渴熱惱して、周章悶走す、
其の宅是の如し、甚だ怖畏すべし、
毒害火災、衆難一に非ず、

(三八)毗舍闍鬼(Pisacika)は啖精鬼と譯す。人の精氣を食ふ鬼。

是の時に宅主、門外に在りて立ちて、
有る人の言ふを聞く、「汝が諸子等、
先に遊戯せしに因りて、此の宅に來入し、
穉小無知にして、歡娛樂著せり、」
長者聞き已りて、驚きて火宅に入る、
方に宜しく救濟して、燒害無からしむべし、
諸子に告喩して、衆の患難を說く、
「惡鬼毒蟲ありて、災火蔓延なり、
衆苦次第に、相續して絕えず、
毒蛇蚖蝮、及び諸の夜叉、
鳩槃茶鬼、野干狐狗、
鵰鷲鵄梟、百足の屬、
飢渴の惱急にして、甚だ怖畏すべし、
此の苦すら處し難し、況や復大火をや、」

諸子知ること無ければ、父の誨を聞くと雖も、
猶故樂著して、嬉戯すること已まず、
是の時に長者、而も是の念を作さく、
「諸子此の如く、我が愁惱を益す、
今此の舍宅は、一として樂むべき無し、
而るに諸子等、嬉戯に耽湎して、
我が教を受けず、將に火に害せられんとす、」
即便思惟して、諸の方便を設けて、
諸子等に告ぐ、「我に種種の、
珍玩の具の、妙寶の好車有り、
羊車鹿車、大牛の車なり、
今門外に在り、汝等出で來れ、
吾汝等が爲に、此の車を造作せり、
意の所樂に隨ひて、以て遊戯すべし、」

諸子、此の如き諸の車を說くを聞きて、
卽時に奔競して、馳走して出で、
空地に到りて、諸の苦難を離る、
長者子の、火宅を出づることを得て、
四衢に住するを見て、師子の座に坐せり、
而して自ら慶びて言はく、「我今快樂なり、
此の諸子等、生育すること甚だ難し、
愚小無知にして、險宅に入れり、
諸の毒蟲多く、魑魅畏るべし、
大火猛焰、四面に俱に起れり、
而るに此の諸子、嬉戲に貪樂せり、
我已に之を救ひて、難を脫るることを得しめつ、
是の故に諸人、我今快樂なり、」
爾の時に諸子、父の安坐せるを知りて、

皆父の所に詣でて、父に白して言さく、
「願はくば我等に、三種の寶車を賜へ、
前に許したまふ所の如きは、諸子出で來れ、
當に三車を以て、汝が所欲に隨ふべしと、
今正に是時なり、唯給與を垂れたまへ、」
長者大いに富みて、庫藏衆多なり、
金銀瑠璃、硨磲碼碯あり、
衆の寶物を以て、諸の大車を造れり、
莊校嚴飾にして、周帀して欄楯あり、
四面に鈴を懸け、金繩絞絡せり、
眞珠の羅網、其の上に張り施し、
金華の諸纓、處處に垂下せり、
衆綵雜飾し、周帀圍繞せり、
柔輭の繒纊、以て茵褥と爲し、

上妙の細氈、價値千億にして、
鮮白淨潔なる、以て其の上に覆へり、
大白牛有り、肥壯多力にして、
形體姝好なり、以て寶車を駕せり、
諸の儐從多くして、之を侍衞せり、
是の妙車を以て、等しく諸子に賜ふ、
諸子是の時、歡喜踊躍して、
是の寶車に乘りて、四方に遊び、
嬉戲快樂して、自在無礙ならんが如し、
舍利弗に告ぐ、我も亦是の如し、
衆聖の中の尊、世間の父なり、
一切衆生は、皆是吾が子なり、
深く世樂に著して、慧心有ること無し、
三界は安きこと無し、猶火宅の如し、

衆苦充滿して、甚だ怖畏すべし、
常に生老、病死の憂患有り、
是の如き等の火、熾然として息まず、
如來は已に、三界の火宅を離れて、
寂然として閑居し、林野に安處せり、
今此の三界は、皆是我が有なり、
其の中の衆生は、悉く是吾が子なり、
而も今此の處は、諸の患難多し、
唯我一人のみ、能く救護を爲す、
復教詔すと雖も、而も信受せず、
諸の欲染に於て、貪著深きが故に、
是を以て方便して、爲に三乘を說きて、
諸の衆生をして、三界の苦を知らしめ、
出世間の道を、開示演說す、

是の諸子等、若心決定しぬれば、
(三九)三明、及び(四〇)六神通を具足し、
緣覺、不退の菩薩を有ること有り、
汝舍利弗、我衆生の爲に、
此の譬諭を以て、一佛乘を說く、
汝等若能く、是の語を信受せば、
一切皆當に、佛道を成ずることを得べし、
是の乘は微妙にして、清淨第一なり、
諸の世間に於て、爲めて上有ること無けん、
佛の悅可したまふ所、一切衆生、
應に稱讚し、供養し禮拜すべき所なり、
無量億千の、諸力解脫、
禪定智慧、及び佛の餘の法あり、
是の如き乘を得しめて、諸子等をして、

【三九】三明は三達ともいふ。阿羅漢、佛、菩薩等の具する宿住智證明、死生智證明、漏盡智證明の三種の智明。
【四〇】六神通は六通ともいふ。天眼、天耳、他心、宿命、神足、漏盡の六種の通力。

日夜劫數に、常に遊戯することを得、
諸の菩薩、及び聲聞衆と、
此の寶乘に乘じて、直ちに道場に至らしむ、
是の因緣を以て、十方に諦かに求むるに、
更に餘乘無し、佛の方便をば除く、
舍利弗に告ぐ、汝諸人等は、
皆是吾が子なり、我は則ち是父なり、
汝等累劫に、衆苦に燒かる、
我皆濟拔して、三界に出でしむ、
我先に、汝等滅度すと說くと雖も、
但生死を盡して、而も實には滅せず、
今應に作すべき所は、唯佛の智慧なり、
若菩薩有らば、是の衆の中に於て、
能く一心に、諸佛の實法を聽け、

諸佛世尊は、方便を以てしたまふと雖も、
所化の衆生は、皆是菩薩なり、
若人小智にして、深く愛欲に著せる、
此等を以ての故に、苦諦を說きたまふ、
衆生心に喜びて、未曾有なることを得、
佛の說きたまふ苦諦は、眞實にして異ること無し、
若衆生有りて、苦の本を知らず、
深く苦の因に著し、暫くも捨つること能はず、
是等を爲ての故に、方便して道を說きたまふ、
諸苦の所因は、貪欲爲本なり、
若貪欲を滅すれば、依止する所無し、
諸苦を滅盡するを、第三の諦と名く、
滅諦の爲の故に、道を修行す、
諸の苦縛を離るるを、解脫を得と名く、

是の人何に於てか、而も解脱を得る、
但虛妄を離るるを、名けて解脱と爲す、
其實には未だ、一切の解脱を得ず、
佛是の人は、未だ實に滅度せずと說きたまふ、
斯の人未だ、無上道を得ざるが故に、
我が意にも、滅度に至らしめたりと欲はず、
我は爲法王、法に於て自在なり、
衆生を安穩ならしめんが故に、世に現ず、
汝舍利弗、我が此の法印は、
世間を利益せんと、欲するが爲の故に說く、
所遊の方に在りて、妄りに宣傳すること勿れ、
若聞くこと有らん者、隨喜し頂受せば、
當に知るべし是の人は、(四)阿鞞跋致なり、
若此の經法を、信受すること有らん者は、

(四)阿鞞跋致(アヴィヴァルタニーヤ Avivartanya)
は阿惟越致とも書す。不退、不退轉、無退と譯す。既に成佛に定りて凡地に退下することなき菩薩の位をいふ。

是の人は已に曾て、過去の佛を見たてまつりて、
恭敬供養し、亦是の法を聞けるなり、
若人能く、汝が所說を信ずること有らば、
則ち爲我を見、亦汝、
及び比丘僧、幷びに諸の菩薩を見るなり、
斯の法華經は、深智の爲に說く、
淺識は之を聞きて、迷惑して解らず、
一切の聲聞、及び辟支佛は、
此の經の中に於て、力及ばざる所なり、
汝舍利弗すら、尙此の經に於ては、
信を以て入ることを得たり、況や餘の聲聞をや、
其の餘の聲聞も、佛語を信ずるが故に、
此の經に隨順す、己が智分に非ず、
又舍利弗、憍慢懈怠、

我見を計する者には、此の經を說くこと莫れ、
凡夫の淺識、深く五欲に著せるは、
聞くとも解ること能はじ、亦爲に說くこと勿れ、
若人信せずして、此の經を毀謗せば、
則ち一切、世間の佛種を斷ぜん、
或は復懼惑して、疑惑を懷かん、
汝當に、此の人の罪報を說かんを聽くべし、
「若は佛在世、若は滅度の後に、
其斯の如き經典を、誹謗すること有らん、
經を讀誦し書持すること、有らん者を見て、
輕賤憎嫉して、結恨を懷かん、
此の人の罪報を、汝今復聽け、
其の人命終して、(四三)阿鼻獄に入らん、
一劫を具足して、劫盡きなば更生れん、

【四三】阿鼻獄（Avici）は阿鼻地獄の略。無間地獄のことなり。

是の如く展轉して、無數劫に至らん、
地獄より出でては、當に畜生に墮つべし、
若狗野干としては、其の形頟瘦し、
癩疥癩にして、人に觸嬈せられ、
又復人に、惡み賤まれん、
常に飢渴に困みて、骨肉枯竭せん、
生きては楚毒を受け、死して瓦石を被らん、
佛種を斷ずるが故に、斯の罪報を受けん、
若は駝駝と作り、或は驢の中に生れて、
身に常に重きを負ひ、諸の杖捶を加へられんに、
但水草をのみ念ひて、餘は知る所無けん、
斯の經を謗するが故に、罪を獲ること是の如し、
有は野干と作りて、聚落に來入せば、
身體疥癩ありて、又一目無からんに、

諸の童子に、打擲せられ、
諸の苦痛を受けて、我時は死を致さん、
此に於て死し已りて、更に鱗身を受けん、
其の形長大にして、五百由旬ならん、
(四三)聾聯無足にして、蹠轉腹行し、
諸の小蟲に、嗟食せられん、
晝夜苦を受くるに、休息有ること無けん、
斯の經を謗するが故に、罪を獲ること是の如し、
若人と爲ることを得ては、諸根暗鈍にして、
(四四)矬陋(四五)癰躄、盲聾(四六)背傴ならん、
言說する所有らんに、人信受せじ、
口の氣常に臭く、鬼魅に著せられん、
貧窮下賤にして、人に使はれ、
多病羸瘦にして、依怙する所無く、

【四三】聾聯は耳しひ心ほうけたり。
【四四】矬陋は丈ひくゝ醜し。
【四五】癰躄は手なへ足なへ。
【四六】背傴はせむへし。

人に親附すと雖も、人意に在かじ、
若所得有らば、尋いで復忘失せん、
若醫道を修め、方に順じて病を治せば、
更に佗の病を增し、或は復死を致さん、
若自ら病有らば、人の救療すること無く、
設ひ良藥を服すとも、而も復增劇せん、
若は佗の反逆し、抄劫し竊盜せん、
是の如き等の罪、橫まに其の殃に羅らん、
斯の如き罪人は、永く佛、
衆聖の王の、說法敎化したまふを見たてまつらじ、
斯の如き罪人は、常に難處に生ぜん、
狂聾心亂にして、永く法を聞かじ、
無數劫の、恆河沙の如きに於て、
生れては輒ち聾瘂にして、諸根不具ならん、

常に地獄に處すること、園觀に遊ぶが如く、
餘の惡道に在ること、己が舍宅の如く、
駝驢豬狗、是其の行處ならん、
斯の經を謗するが故に、罪を得ること是の如し、
若人と爲ることを得ては、聾盲瘖瘂にして、
貧窮諸衰、以て自ら莊嚴し、
水腫乾消、疥癩癰疽、
是の如き等の病、以て衣服と爲ん、
身常に臭きに處して、垢穢不淨に深く、
我見に著して、瞋恚を增益し、
婬欲熾盛にして、禽獸を擇ばじ、
斯の經を謗するが故に、罪を獲ること是の如し、」
舍利弗に告ぐ、斯の經を謗せん者、
若其罪を說かんに、劫を窮むとも盡せじ、

是の因緣を以て、我故らに汝に語る、
「無智の人の中にして、此の經を說くこと莫れ、
若利根にして、智慧明了に、
多聞强識にして、佛道を求むる者有らん、
是の如きの人に、乃ち爲に說くべし、
若人曾て、億百千の佛を見たてまつりて、
諸の善本を植ゑ、深心堅固ならん、
是の如きの人に、乃ち爲に說くべし、
若人精進して、常に慈心を修し、
身命を惜まざらんに、乃ち爲に說くべし、
若人恭敬して、異心有ること無く、
諸の凡愚を離れて、獨山澤に處せん、
是の如きの人に、乃ち爲に說くべし、
又舍利弗、若人有りて、

(四七)惡知識を捨てて、善友に親近するを見ん、
是の如きの人に、乃ち爲に說くべし、
若佛子の、持戒淸潔にして、
淨明珠の如くにして、大乘經を求むるを見ん、
是の如きの人に、乃ち爲に說くべし、
若人瞋無く、質直柔軟にして、
常に一切を愍み、諸佛を恭敬せん、
是の如きの人に、乃ち爲に說くべし、
復佛子の、大衆の中に於て、
淸淨の心を以て、種種の因緣、
譬諭の言辭をもつて、說法すること無礙なる有らん、
是の如きの人に、乃ち爲に說くべし、
若比丘の、一切智の爲に、
四方に法を求めて、合掌し頂受し、

【四七】惡知識は善知識に對す。邪惡の法を說き人を邪道に導くもの。

但樂ひて、大乘經典を受持して、
乃至、餘經の一偈をも受けざる有らん、
是の如きの人に、乃ち爲に說くべし、
人の至心に、佛舍利を求むるが如く、
是の如く經を求め、得已りて頂受せん、
其の人復、餘經を志求せず、
亦未だ曾て、外道の典籍を念せざらん、
是の如きの人に、乃ち爲に說くべし、」
舍利弗に告ぐ、我是の相にして、
佛道を求むる者を說かんに、劫を窮むとも盡せじ、
是の如き等の人は、則ち能く信解せん、
汝當に爲に、妙法華經を說くべし。』

信解品第四

爾の時に(一)慧命須菩提、摩訶迦旃延、摩訶迦葉、摩訶目犍連、佛に從ひたてまつりて、聞ける所の未曾有の法、世尊の舍利弗に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふに、希有の心を發し、歡喜踊躍す。即ち座より起ちて衣服を整へ、偏に右の肩を袒し、右の膝を地に著け、一心に合掌し、曲躬恭敬し、尊顏を瞻仰して、佛に白して言さく、『我等僧の首に居して年竝に朽邁せり。自ら已に涅槃を得て、堪任する所無しと謂て、復、阿耨多羅三藐三菩提を進み求めず、世尊往昔の說法既に久し。我時に座に在りて、身體疲懈し、但、(二)空、無相、無作を念じて、菩薩の法の神通に遊戲し、佛國土を淨め、衆生を成就するに於て、心喜樂せざりき。所以は何ん。世尊、我等をして三界を出でて、涅槃の證を得しめたまへり。又今我等、年已に朽邁して、佛の菩薩を敎化したまふ阿耨多羅三藐三菩提に於て、一念好樂の心を生せざりき。我等今佛前に於て、聲聞に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふを聞

【一】慧命須菩提。須菩提（Subhūti）は善吉と譯す。釋尊十大弟子の一。解空第一の稱あり慧命の稱これに基く。空慧を生命と爲すが故なり。

【二】空無相無作。この三を三三昧、または三解脫門と名く。諸法無我を觀ずるを空解脫門と云ひ、男女一異等の相空不可得なりと觀ずるを無相解脫門と云ひ、諸法無相にして都て所作なしと觀ずるを無作解脫門と云ふ。無作はまた無願とも稱す、三界に於て願求するところなきの謂なり。

きて、心甚だ歡喜し、未曾有なることを得たり。謂はざりき、於今忽然に希有の法を聞くことを得んとは。深く自ら慶幸す、大善利を獲たりと。無量の珍寶求めざるに自ら得たり。世尊、我等今者樂はくば譬諭を說きて、以て斯の義を明さん。譬へば人有りて、年既に幼稚にして、父を捨てて逃逝し、久しく佗國に住して、或は十、二十より五十歲に至る。年既に長大して、加す復窮困し、四方に馳騁して、以て衣食を求む。漸漸に遊行して、偶本國に向ひぬ。其の父先より來、子を求むるに得ず。一の城に中止す。其の家大いに富みて、財寶無量なり。金銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、頗梨珠等、其の諸の倉庫に、悉く皆盈溢せり。多く童僕、臣佐、吏民有りて、象馬、車乘、牛羊無數なり。出入息利すること、乃ち佗國に徧し。商估賈客亦甚だ衆多なり。時に貧窮の子、諸の聚落に遊び、國邑を經歷して、遂に其の父の所止の城に到りぬ。父每に子を念ふ。子と離別して五十餘年、而も未だ曾て、人に向ひて此の如き事を說かず。但自ら思惟して、心に恨悔を懷く。自ら念はく、「老朽して多く財物有り。金銀、珍寶、倉庫に盈溢すれども、子息あること無し。一旦に終沒しなば、財物散失して委付する所無けん。」是を以て、慇懃に每に其の子を憶ふ。復是の念を作さく、「我若子を得て、財物を委付せば、坦然快樂にして、復憂慮無けん。」世尊、爾の時に、窮子傭賃展轉して、遇父の舍に到りぬ。門側に住立して、遙かに其の父を見れば、師子

の牀に踞して、寶几足を承け、諸の婆羅門、(三)刹利、(四)居士、皆恭敬し圍繞せり。眞珠の瓔珞、價直千萬なるを以て其の身を莊嚴し、吏民、童僕手に白拂を執りて左右に侍立せり。覆ふに寶帳を以てし、諸の華旛を垂れ、香水を地に灑ぎ、衆の名華を散じ、寶物を羅列して、出內取與す。是の如き等の種種の嚴飾有りて威德特尊なり。窮子父の大力勢有るを見て、卽ち恐怖を懷きて此に來至せることを悔ゆ。竊かに是の念を作さく、「此或は是王か、或は是王と等しきか、我が傭力して物を得べき處に非じ。如かじ、貧里に往至して肆力地有りて、衣食得易からんには。若久しく此に住せば、或は逼迫せられん。强ひて我をして作さしめんか。」と是の念を作し已りて、疾く走りて去りぬ。時に富める長者、師子の座に於て、子を見て便ち識りぬ。心大いに歡喜して、卽ち是の念を作さく、「我が財物、庫藏、今付する所有り。我常に此の子を思念すれども、之を見るに由無し。而るを忽ちにして自ら來れり。甚だ我が願に適へり。我年朽ちたりと雖も猶故貪惜す。」卽ち傍人を遣して、急に追うて將ゐて還らしむ。爾の時に使者、疾く走り往いて捉ふ。窮子驚愕して、怨なりと稱して大いに喚ばふ。「我相犯さず、何ぞ捉へらるることを爲る。」使者之を執ふること愈急にして、强ひて牽將ゐて還る。時に窮子自ら念は

【三】刹利（クシャトリヤ）は刹帝利の略。土田主と譯す。印度四姓中、婆羅門の次位にして王族、貴族、武士の稱。

【四】居士は在俗のまま佛門に歸依せる男子の稱。

く、「罪無くして囚執へらる。此必定して死せん。」轉た更に惶怖し悶絶して地に蹲る。父遙かに之を見て、使に語つて言はく、「此の人を須ひじ。强ひて將ゐて來ること勿れ。冷水を以て面に灑ぎて、醒悟することを得しめよ。復與し語ること莫れ。」所以は何ん。父其の子の志意下劣なるを知り、自ら豪貴にして、爲子の難る所なりと知りて、審かに是子なりと知れども、方便を以て佗人に語りて、是我が子なりと云はず。使者之に語らく、「我今汝を放す。意の所趣に隨へ。」窮子歡喜して未曾有なることを得て、地より起ちて貧里に往至して、以て衣食を求む。爾の時に長者、將に其の子を誘引せんと欲して、方便を設けて、密かに二人の形色憔悴して、威德無き者を遣す。「汝彼に詣いて、徐く窮子に語るべし。此に作處有り、倍して汝に直を與へん。窮子若許さば、將ゐ來りて作さしめよ。若何の所作をか欲すると言はば、便ち之に語るべし。汝を雇ふことは、糞を除はしめんとなり。我等二人、亦汝と共に作さん。」と時に二りの使人、即ち窮子を求むるに、既已に之を得て具さに上の事を陳ぶ。爾の時に窮子、先其の價を取りて、尋いで與に糞を除ふ。其の父子を見て、愍みて之を怪む。又佗日を以て、窗牖の中より遙かに子の身を見れば、羸瘦憔悴して、糞土塵坌汙穢不淨なり。即ち瓔珞細輭の上服、嚴飾の具を脫ぎて、更に麤弊垢膩の衣を著、塵土に身を坌し、右の手に除糞の器を執持して、畏るる所有るに狀れり。諸の作人に語らく、

「汝等勤作して、懈怠することを得ること勿れ。」と方便を以ての故に、其の子に近くことを得つ。後に復告げて言はく、「咄や男子、汝常に此にして作せ、復餘に去ること勿れ。當に汝に價を加ふべし。諸の所須有る瓮器、米麵、鹽醋の屬あり。自ら疑ひ難ること莫れ。亦、老弊の使人有り、須ひば相給せん。好く自ら意を安くせよ。我は汝が父の如し。復憂慮することなかれ。所以は何んぞ。我年老大にして、汝少壯なり。汝常に作さん時、欺怠、瞋恨、怨言有ること無かれ。都て汝が此の諸惡有らんを、餘の作人の如くに見じ。今より已後、所生の子の如くせん。」即時に長者、更に與に字を作り、之を名けて兒と爲す。爾の時に窮子、此の遇することを欣ぶと雖も、猶故自ら客作の賤人と謂へり。是に由るが故に、二十年の中に於て常に糞を除はしむ。是を過ぎて已後、心相體信して入出に難り無し。然も其の所止は猶本處に在り。世尊、爾の時に長者疾有りて、自ら將に死せんこと久しからじと知りて、窮子に語りて言はく、「我今多く、金銀、珍寶有りて倉庫に盈溢せり。其の中の多少、應に取與すべき所、汝悉く之を知れ、我が心是の如し。當に此の意を體るべし。所以は何んぞ。今我汝と便ち爲異らず。宜しく用心を加へて漏失せしむること無かるべし。」爾の時に窮子、即ち教勅を受けて、衆物の金銀珍寶、及び諸の庫藏を領知すれども、而も一飡を悕取するの意無し。然も其の所止は、故本處に在り。下劣の心、亦未だ捨つること能はず。

復少時を經て、父、子の意漸く已に通泰して、大志を成就し、自ら先の心を鄙んずと知りて、終らんと欲する時に臨みて、其の子に命じ、幷びに親族、國王、大臣、刹利、居士を會むるに、皆悉く已に集まりぬ。卽ち自ら宣べて言はく、「諸君當に知るべし。此は是れ我が子なり。我が所生なり。某の城中に於て吾を捨てて逃走して、伶俜辛苦すること五十餘年。其の本の字は某。我が名は某甲。昔本城に在りて、憂を懷いて推ね覓めき。忽ちに此の間に於て、遇會して之を得たり。此實に我が子なり。我實に其の父なり。今吾が所有の一切の財物は、皆是子の有なり。先に出內する所は、是子の所知なり。」世尊、是の時に窮子、父の此の言を聞きて、卽ち大いに歡喜して、未曾有なることを得て、是の念を作さく、「我本心に、悕求する所有ること無かりき。今此の寶藏、自然にして至りぬといはんが若し。」世尊、大富長者は則ち是如來なり。我等は皆佛子に似たり。如來常に、我等は爲子なりと說きたまへり。世尊、我等三苦を以ての故に、生死の中に於て諸の熱惱を受け、迷惑無知にして小法に樂著せり。今日世尊、我等をして思惟して、諸法戲論の糞を蠲除せしむ。我等中に於て、勤加精進して涅槃に至り、一日の價を得たり。旣に此を得已りて、心大いに歡喜して、自ら以て足れりと爲す。便ち自ら謂ひて言はく、「佛法の中に於て、勤めて精進するが故に、所得弘多なり」と。然も世尊、先に我等が心弊欲に著し、小法を樂ふを知

しめして、便ち縱捨せられて、爲に汝等、當に如來の知見、寶藏の分有るべしと分別したまはず。世尊、方便力を以て、如來の智慧を說きたまふ。我等、佛に從ひて涅槃一日の價を得て、以て大いに得たりと爲して、此の大乘に於て、志求有ること無かりき。我等又、如來の智慧に因りて、諸の菩薩の爲に、開示演說せしかども、而も自ら此に於て、志願有る無し。所以は何ん。佛、我等が心に小法を樂ふを知しめして、方便力を以て、我等に隨ひて說きたまふ。而も我等、眞に是佛子なりと知らず。今我等方に知りぬ。世尊は佛の智慧に於て、悋惜したまふ所無し。所以は何ん。我等昔より來、眞に是佛子なれども、而も但小法を樂ふ。若我等、大を樂ふの心有らましかば、佛、則ち我が爲に、大乘の法を說きたまはまし。今此の經の中に於て、唯一乘を說きたまふ。而も昔、菩薩の前に於て、聲聞の小法を樂ふ者を毀訾したまへども、然も佛、實には大乘を以て敎化したまへり。是の故に我等說く、「本、心に悕求する所有ること無かりしかども、今、法王の大寶自然にして至れり。佛子の應に得べき所の如き者は、皆已に之を得たり。」」爾の時に摩訶迦葉重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言さく、

『我等今日、佛の音敎を聞き、
歡喜踊躍して、未曾有なることを得たり、

佛聲聞、當に作佛することを得べしと說きたまふ、
無上の寶聚、求めざるに自ら得たり、
譬へば童子、幼稚無識にして、
父を捨てて逃逝して、遠く佗土に到りぬ、
諸國に周流すること、五十餘年、
其の父憂念して、四方に推求す、
之を求むるに既に疲れて、一城に頓止す、
舍宅を造立して、五欲に自ら娛む、
其の家巨いに富みて、諸の金銀、
硨磲碼碯、眞珠瑠璃多く、
象馬牛羊、輦輿車乘、
田業童僕、人民衆多なり、
出入息利すること、乃ち佗國に徧し、
商估賈人、處として有らざること無し、

千萬億の衆、圍繞し恭敬し、
常に王者に、愛念せらるることを爲、
羣臣豪族、皆共に宗重し、
諸の緣を以ての故に、往來する者衆し、
豪富なること是の如くにして、大力勢有り、
而も年朽邁して、益子を憂念す、
夙夜に惟念すらく、「死の時將に至らんとす、
癡子我を捨てて、五十餘年、
庫藏の諸物、當に之を如何がすべき、」
爾の時に窮子、衣食を求索して、
邑より邑に至り、國より國に至る、
或は得る所有り、或は得る所無し、
飢餓羸瘦して、體に瘡癬を生ぜり、
漸次に經歷して、父の住せる城に到りぬ、

傭賃展轉して、遂に父の舍に至る、
爾の時に長者、其の門の內に於て、
大寶帳を施して、師子の座に處し、
眷屬圍繞し、諸人侍衞せり、
或は金銀寶物を、計算し、
財產を出內し、注記券疏する有り、
窮子父の、豪富尊嚴なるを見て、
謂はく「是國王か、若は是王と等しきか」と、
驚怖して自ら怪む、何が故ぞ此に至れる、
覆かに自ら念言すらく、「我若久しく住せば、
或は逼迫せられ、强ひて驅つて作さしめん、」
是を思惟し已りて、馳走して去りぬ、
貧里を借問して、往いて傭作せんと欲す、
長者是の時に、師子の座に在りて、

遙かに其の子を見て、默して之を識る、
卽ち使者に勅して、追捉して將ゐ來らしむ、
窮子驚き喚びて、迷悶して地に躃る、
「是の人我を執ふ、必ず當に殺さるべし、
何ぞ衣食を用て、我をして此に至らしむる、」
長者子の、愚癡狹劣にして、
我が言を信せず、是父なりと信ぜざらんを知りて、
卽ち方便を以て、更に餘人の、
(五)眇目(六)矬陋にして、威德無き者を遣す、
「汝之に語りて云ふべし、當に相雇ひて、
諸の糞穢を除はしむべし、倍して汝に價を與へん」と、
窮子之を聞きて、歡喜し隨ひ來りて、
爲に糞穢を除ひ、諸の房舍を淨む、
長者牖より、常に其の子を見て、

【五】眇目はすがめ。
【六】矬陋は背ひくき。

子の愚劣にして、樂つて鄙事を爲すを念ふ、
是に於て長者、弊垢の衣を著、
除糞の器を執りて、子の所に往き到りぬ、
方便して附近し、語らひて勤作せしむ、
「既に汝が價を益し、幷びに足に油を塗り、
飲食充足し、薦席厚暖ならしめん、」
是の如く苦言すらく、「汝當に勤作すべし、」
又以て輭語すらく、「若我が子の如くせん、」
長者智有りて、漸く入出せしむ、
二十年を經て、家事を執作せしむ、
其に金銀、眞珠頗梨、
諸物の出入を示して、皆知らしむれども、
猶門外に處し、草菴に止宿して、
自ら貧事を念ふ、「我に此の物無し」と、

父子の心、漸く已に曠大なることを知りて、
財物を與へんと欲して、卽ち親族、
國王大臣、刹利居士を聚めて、
此の大衆に於て、說く「是我が子なり、
我を捨てて佗行して、五十歲を經たり、
子を見てより來、已に二十年、
昔某の城に於て、是の子を失ひき、
周行し求索して、遂に此に來至せり、
凡そ我が所有の、舍宅人民、
悉く以て之に付す、其の所用を恣にすべし」と、
子念はく「昔は貧しくして、志意下劣なりき、
今は父の所に於て、大いに珍寶、
幷及に舍宅、一切の財物を獲たり」と、
甚だ大いに歡喜して、未曾有なることを得るが若し、

佛も亦是の如し、我が小を樂ふを知しめして、
未だ曾て說きて、「爾等作佛すべし」と言はず、
而も我等、諸の無漏を得て、
「小乘を成就する、聲聞の弟子なり」と說きたまふ、
佛我等に勅したまはく、「最上の道、
此を修習する者は、當に成佛することを得べし」と說けど、
我佛の敎を承けて、大菩薩の爲に、
諸の因緣、種種の譬諭、
若干の言辭を以て、無上道を說く、
諸の佛子等、我に從ひて法を聞きて、
日夜に思惟し、精勤修習す、
是の時に諸佛、卽ち其に記を授けたまふ、
「汝來世に於て、當に作佛することを得べし」と、
一切の諸佛の、祕藏の法をば、

但菩薩の爲に、其の實事を演べて、
我が爲に、是の眞要を說かざりき、
彼の窮子の、其の父に近くことを得て、
諸物を知ると雖も、心に悋取せざるが如く、
我等佛法の、寶藏を說くと雖も、
自ら志願無きこと、亦復是の如し、
我等內の滅を、自ら足んぬることを爲たりと謂ひて、
唯此の事を了りて、更に餘事無し、
我等若、佛の國土を淨め、
衆生を敎化するを聞きて、都て欣樂無かりき、
所以は何ん、「一切の諸法は、
皆悉く空寂にして、無生無滅、
無大無小、無漏無爲なり、」
是の如く思惟して、喜樂を生せず、

我等長夜に、佛の智慧に於て、
貪無く著無く、復志願無し、
而も自ら法に於て、是究竟なりと謂ひき、
我等長夜に、空法を修習して、
三界の、苦惱の患を脱るることを得、
最後身、(七)有餘涅槃に住せり、
佛の教化したまふ所は、得道虚しからず、
則ち已に、佛の恩を報ずることを得たりと爲す、
我等、諸の佛子等の爲に、
菩薩の法を說きて、以て佛道を求めしむと雖も、
而も是の法に於て、永く願樂無かりき、
導師捨てられたることは、我が心を觀じたまふが故に、
初め勤進して、實の利有りと說きたまはず、
富める長者の、子の志劣なるを知りて、

【七】有餘涅槃は無餘涅槃に對す精神は已に涅槃のさとりを得たれども所依の肉體はなほ存在するが故に名く。

方便力を以て、其の心を柔伏して、
然して後に乃し、一切の財寶を付するが如く、
佛も亦是の如し、稀有の事を現じたまふ、
小を樂ふ者なりと知しめして、方便力を以て、
其の心を調伏して、乃し大智を敎へたまふ、
我等今日、未曾有なることを得たり、
先の所望に非ざるを、而も今自ら得ること、
彼の窮子の、無量の寶を得るが如し、
世尊我今、道を得果を得、
無漏の法に於て、清淨の眼を得たり、
我等長夜に、佛の淨戒を持ちて、
始めて今日に於て、其の果報を得、
法王の法の中に、久しく梵行を修して、
今無漏、無上の大果を得、

我等今者、眞に是聲聞なり、
佛道の聲を以て、一切をして聞かしむべし、
我等今者、眞に阿羅漢なり、
諸の世間、天人魔梵に於て、
普く其の中に於て、應に供養を受くべし、
世尊は大恩ましまします、稀有の事を以て、
憐愍教化して、我等を利益したまふ、
無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん、
手足をもつて供給し、頭頂をもつて禮敬し、
一切をもつて供養すとも、皆報ずること能はじ、
若は以て頂戴し、兩肩に荷負して、
恆沙劫に於て、心を盡して恭敬し、
又美膳、無量の寶衣、
及び諸の臥具、種種の湯藥、

(八)牛頭栴檀、及び諸の珍寶を以て、
以て塔廟を起て、寶衣を地に布く、
斯の如き等の事、以用て供養すること、
恆沙劫に於てすとも、亦報ずること能はじ、
諸佛は稀有にして、無量無邊、
不可思議の、大神通力まします、
無漏無爲にして、諸法の王なり、
能く下劣の爲に、斯の事を忍びたまふ、
取相の凡夫に、宜しきに隨ひて爲に說きたまふ、
諸佛は法に於て、最も自在を得たまへり、
諸の衆生の、種種の欲樂、
及び其の志力を知しめして、堪任する所に隨ひて、
無量の諭を以て、爲に法を說きたまふ、
諸の衆生の、宿世の善根に隨ひ、

(八)牛頭栴檀はまた赤栴檀ともいふ。香木の名。印度の牛頭山に多く生ずるが故にこの名ありと傳ふ。

又成熟、未成熟の者を知しめし、
種種に籌量し、分別し知しめし已りて、
一乘の道に於て、宜しきに隨ひて三と說きたまふ。」

卷の第三

藥草諭品第五

爾の時に世尊、摩訶迦葉、及び諸の大弟子に告げたまはく、『善い哉善い哉、迦葉、善く如來眞實の功德を說く。誠に所言の如し。如來復、無量無邊阿僧祇の功德有り。汝等若、無量億劫に於て說くとも、盡すこと能はじ。迦葉、當に知るべし。如來は是、諸法の王なり。若所說有るは、皆虛しからず。一切の法に於て、智の方便を以て之を演說す。其の所說の法は、皆悉く一切智地に到らしむ。如來は一切諸法の歸趣する所を觀知し、亦一切衆生の深心の所行を知りて、通達無礙なり。又諸法に於て、究盡明了にして、諸の衆生に、一切の智慧を示す。迦葉、譬へば、三千大千世界の山川、谿谷、土地に生ひたる所の卉木、叢林、及び諸の藥草、種類若干にして、名色各異なり。密雲彌布して、徧く三千大千世界に覆ひ、一時に等しく澍ぐ。其の澤普く卉木、叢林、及び諸の藥草の小根、小莖、小枝、小葉、中根、中莖、中枝、中葉、大根、大莖、大枝、大葉に洽ふ。諸樹の大小、上中下に隨ひて、各受くる所有り。一雲の雨す所、其の種性に稱ひて、而も

生長することを得て、華果敷け實る。一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木、各差別有るが如し。迦葉、當に知るべし。如來も亦復是の如し。世に出現すること、大雲の起るが如く、大音聲を以て、世界の天、人、阿脩羅に普徧せること、彼の大雲の、徧く三千大千國土に覆ふが如し。大衆の中に於て、是の言を唱ふ。「我は是如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊なり。未だ度せざる者をば度せしめ、未だ解せざる者をば解せしめ、未だ安んせざる者をば安んせしめ、未だ涅槃せざる者をば涅槃を得しむ。今世後世、實の如く之を知れり。我は是一切知者、一切見者、知道者、開道者、說道者なり。汝等天、人、阿脩羅衆、皆應に此に到るべし。法を聽かんが爲の故に。」爾の時に、無數千萬億種の衆生、佛の所に來至して法を聽く、如來、時に是の衆生の諸根の利鈍、精進、懈怠を觀じて、其の堪ふる所に隨ひて、爲に法を說くこと種種無量にして、皆歡喜し快く善利を得しむ。是の諸の衆生、是の法を聞き已りて、現世安穩にして後に善處に生じ、道を以て樂を受け、亦法を聞くことを得。既に法を聞き已りて、諸の障礙を離れ、諸法の中に於て、力の能ふる所に任せて、漸く道に入ることを得。彼の大雲の、一切の卉木叢林、及び諸の藥草に雨るに、其の種性の如く具足して潤を蒙り、各生長することを得るが如し。如來の說法は一相、一味、所謂解脫相、離相、滅相なり。

究竟して一切種智に至る。其衆生有りて、如來の法を聞きて、若は持し、讀誦し、說の如く修行するに、得る所の功德自ら覺知せず。所以は何ん。唯如來のみ有りて、此の衆生の種、相、體、性、何の事を念じ、何の事を思し、何の事を修し、云何に念じ、云何に思し、云何に修し、何の法を以て念じ、何の法を以て思し、何の法を以て修し、何の法を以て何の法を得といふことを知れり。衆生の種種の地に住せるを、唯如來のみ有りて、如實に之を見て明了無礙なり。彼の卉木叢林、諸の藥草等の、而も自ら上中下の性を知らざるが如し。如來は是一相一味の法なりと知しめせり。所謂解脫相、離相、滅相、究竟涅槃、常寂滅相にして、終に空に歸す。佛、是を知り已れども、衆生の心欲を觀じて之を將護す。是の故に、卽ち爲に一切種智を說かず。汝等迦葉、甚だ爲稀有なり。能く如來の隨宜の說法を知りて、能く信じ能く受く。所以は何ん。諸佛世尊の隨宜の說法は、解り難く知り難ければなり。』爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

『有を破する法王、世間に出現して、
衆生の欲に隨ひて、種種に法を說く、
如來は尊重にして、智慧深遠なり、

久しく斯の要を默して、務ぎて速かに說かず、
智有るは若聞きて、則ち能く信解す、
智無きは疑悔して、則ち永く失ふ爲し、
是の故に迦葉、力に隨ひて爲に說きて、
種種の緣を以て、正見を得しむ、
迦葉當に知るべし、譬へば大雲の、
世閒に起りて、徧く一切を覆ふに、
慧雲潤を含み、電光晃曜し、
雷聲遠く震ひて、衆をして悅豫せしめ、
日光掩蔽して、地の上は淸涼に、
靈雧垂布して、承攬すべきが如く、
其の雨普等にして、四方に俱に下り、
流澍すること無量にして、率土充洽す、
山川險谷の、幽邃に生ひたる所の、

卉木藥草、大小の諸樹、
百穀苗稼、甘蔗葡萄、
雨の潤す所、豐足せずといふこと無し、
乾地普く洽ひ、藥木竝び茂り、
其の雲より出づる所の、一味の水に、
草木叢林、分に隨ひて潤を受く、
一切の諸樹、上中下等しく、
其の大小に稱ひて、各生長することを得、
根莖枝葉、華果光色、
一雨の及す所、皆鮮澤することを得、
其の體相、性の大小に分れたるが如く、
潤す所是一なれども、而も各滋茂するが如し、
佛も亦是の如し、世に出現すること、
譬へば大雲の、普く一切を覆ふが如し、

既に世に出でぬれば、諸の衆生の爲に、
諸法の實を、分別し演說す、
大聖世尊、諸の天人、
一切衆の中に於て、而も是の言を宣ぶ、
「我は爲如來、兩足の尊なり、
世間に出づること、猶大雲の如し、
一切の、枯槁の衆生を充潤して、
皆苦を離れ、安穩の樂、
世間の樂、及び涅槃の樂を得しむ、
諸の天人衆、一心に善く聽け、
皆應に此に到りて、無上尊を覲るべし、
我は爲世尊なり、能く及ぶ者無し、
衆生を安穩ならしめんが故に、世に現じて、
大乘の爲に、甘露の淨法を說く、

其の法一味にして、解脱涅槃なり、
一の妙音を以て、斯の義を演暢す、
常に大乘の爲に、而も因緣を作す、
我一切を觀ずること、普く皆平等なり、
彼此、愛憎の心有ること無し、
我貪著無く、亦限礙無し、
恆に一切の爲に、平等に法を說く、
一人の爲にするが如く、衆多も亦然なり、
常に法を演說して、曾て佗事無し、
去來坐立に、終に疲厭せず、
世間に充足すること、雨の普く潤すが如し、
貴賤上下、持戒毀戒、
威儀具足せる、及び具足せざる、
正見邪見、利根鈍根に、

等しく法雨を雨して、而も懈倦無し、
一切衆生の、我が法を聞く者、
力の受くる所に隨ひて、諸の地に住す、
或は人天の、轉輪聖王、
(一)釋梵諸王に處する、是小の藥草なり、
無漏の法を知りて、能く涅槃を得、
六神通を起し、及び三明を得、
獨山林に處し、常に禪定を行じて、
緣覺の證を得る、是中の藥草なり、
世尊の處を求めて、我當に作佛すべしと、
精進定を行ずる、是上の藥草なり、
又諸の佛子、心を佛道に專らにして、
常に慈悲を行じ、自ら作佛せんこと、
決定して疑無しと知る、是を小樹と名く、

【一】釋梵は帝釋(Indra)と梵天(Brahmā)となり。前者は忉利天の主、後者は色界初禪天の主なり。

神通に安住して、不退の輪を轉じ、
無量億、百千の衆生を度する、
是の如きの菩薩を、名けて大樹と爲す、
佛の平等の說は、一味の雨の如し、
衆生の性に隨ひて、受くる所不同なり、
彼の草木の、稟くる所各異るが如し、
佛此の諭を以て、方便して開示し、
種種の言辭をもつて、一法を演說すれども、
佛の智慧に於ては、海の一滴の如し、
我法雨を雨して、世間に充滿す、
一味の法を、力に隨ひて修行すること、
彼の叢林、藥草諸樹、
其の大小に隨ひて、漸く茂好を增すが如し、
諸佛の法は、常に一味を以て、

諸の世間をして、普く具足することを得しめたまふ、
漸次に修行して、皆道果を得、
聲聞緣覺の、山林に處し、
最後身に住して、法を聞きて得果する、
是を藥草、各增長することを得と名く、
若諸の菩薩、智慧堅固にして、
三界を了達し、最上乘を求むる、
是を小樹の、而も增長することを得と名く、
復禪に住して、神通力を得、
諸法の空を聞きて、心大いに歡喜し、
無數の光を放ちて、諸の衆生を度すること有る、
是を大樹の、而も增長することを得と名く、」
是の如く迦葉、佛の所說の法は、
譬へば大雲の、一味の雨を以て、

人華を潤して、各實を成ずることを得しむるが如し、
迦葉當に知るべし、諸の因緣、
種種の譬諭を以て、佛道を開示す、
是我が方便なり、諸佛も亦然なり、
今汝等が爲に、最實事を說く、
諸の聲聞衆は、皆滅度せるに非ず、
汝等が所行は、是菩薩道なり、
漸漸に修學して、悉く當に成佛すべし。』

授記品第六

爾の時に世尊、是の偈を說き已りて、諸の大衆に告げて、是の如き言を唱へたまはく、『我が此の弟子摩訶迦葉は、未來世に於て、當に三百萬億の諸佛世尊を奉覲して、供養恭敬し、尊重讚歎して、廣く諸佛無量の大法を宣ぶることを得べし。最後身に於て、佛に成爲ることを得ん。名をば光明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。國をば光德と名け、劫をば大莊嚴と名けん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。國界嚴飾して、諸の穢惡、瓦礫、荆棘、便利の不淨無く、其の土平正にして、高下、(一)坑坎、(二)堆阜有ること無けん。瑠璃を地と爲して、寶樹行列し、黃金を繩と爲して、以て道の側を界ひ、諸の寶華を散じて、周徧して淸淨ならん。其の國の菩薩、無量千億にして、諸の聲聞衆、亦復無數ならん。魔事有ること無けん。魔及び魔民有りと雖も、皆佛法を護らん。』爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

『諸の比丘に告ぐ、我佛眼を以て、

【一】坑坎はくぼち。
【二】堆阜はなが。

是の迦葉を見るに、未來世に於て、
無數劫を過ぎて、當に作佛することを得べし、
而も來世に於て、三百萬億の、
諸佛世尊を、供養し奉覲して、
佛の智慧を爲て、淨く梵行を修し、
最上、二足尊を供養し已りて、
一切の、無上の慧を修習し、
最後身に於て、佛と成爲ることを得ん、
其の土淸淨にして、瑠璃を地と爲し、
諸の寶樹多くして、道側に行列し、
金繩道を界ひて、見る者歡喜せん、
常に好香を出し、衆の名華を散じて、
種種の奇妙なる、以て莊嚴と爲し、
其の地平正にして、丘坑有ること無けん、

諸の菩薩衆、稱計すべからず、
其の心調柔にして、大神通に逮り、
諸佛の、大乘經典を奉持せん、
諸の聲聞衆の、無漏の後身にして、
法王の子なる、亦計るべからず、
乃ち天眼を以ても、數へ知ること能はじ、
其の佛は當に壽、十二小劫なるべし、
正法世に住すること、二十小劫、
像法亦住すること、二十小劫ならん、
光明世尊、其の事是の如し。』

爾の時に大目犍連、須菩提、摩訶迦旃延等、皆悉く悚慄して、一心に合掌し、世尊を瞻仰して、目暫くも捨てず。卽ち共に聲を同じうして、偈を說きて言さく、

『大雄猛世尊、諸釋の法王、
我等を哀愍したまふが故に、而も佛の音聲を賜へ、

若我が深心を知しめして、授記することを爲らるれば、
甘露を以て灑ぐに、熱を除きて清涼を得るが如くならん、
飢ゑたる國より來りて、忽ちに大王の饍に遇へらんが如く、
心猶疑懼を懷きて、未だ敢て卽便食せず、
若復王の敎を得ては、然して後に乃ち敢て食せんが如く、
我等も亦是の如し、每に小乘の過を惟ひて、
當に云何してか、佛の無上慧を得べきかを知らず、
佛の音聲の、我等作佛せんと言ふことを聞くと雖も、
心尙憂懼を懷くこと、未だ敢て便ち食せざるが如し、
若佛の授記を蒙りなば、爾乃快く安樂ならん、
大雄猛世尊、常に世間を安んぜんと欲す、
願はくば我等に記を賜へ、飢に敎を須ちて食するが如くならん。」
爾の時に世尊、諸の大弟子の、心の所念を知しめして、諸の比丘に告げたまはく、「是の須菩提は、當來世に於て、三百萬億那由佗の佛を奉覲して、供養恭敬し、尊重讚歎し、常に梵行を修し、

菩薩の道を具して、最後身に於て、佛と成爲ることを得ん。號をば名相如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。劫を有寶と名け、國をば寶生と名けん。其の土平正にして、頗梨を地と爲し、寶樹莊嚴して、諸の丘坑、沙礫、荆棘、便利の穢無く、寶華地に覆ひ、周徧して清淨ならん。其の土の人民、皆寶臺、珍妙の樓閣に處せん。聲聞の弟子、無量無邊にして、算數譬諭の知ること能はざる所ならん。諸の菩薩衆、無數千萬億那由佗ならん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。其の佛常に虛空に處して、衆の爲に法を說きて、無量の菩薩、及び聲聞衆を度脫せん。』

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

『諸の比丘衆、今汝等に告ぐ、
皆當に一心に、我が所說を聽くべし、
我が大弟子、須菩提は、
當に作佛することを得べし、號をば名相と曰はん、
當に無數、萬億の諸佛を供して、
佛の所行に隨ひて、漸く大道を具すべし、

最後身に、(三)三十二相を得て、
端正姝妙なること、猶寶山の如くならん、
其の佛の國土、嚴淨第一にして、
衆生の見ん者、愛樂せずといふこと無けん、
佛其の中に於て、無量の衆を度せん、
其の佛の法の中には、諸の菩薩多く、
皆悉く利根にして、不退輪を轉せん、
彼の國は常に、菩薩を以て莊嚴せり、
諸の聲聞衆も、稱數すべからず、
皆三明を得、六神通を具し、
(四)八解脫に住して、大威德有らん、
其の佛の說法には、無量の神通、
變化を現ずること、不可思議ならん、
諸天人民、數恆沙の如く、

(三)三十二相は應身佛の肉體上に於ける三十二種の特相。卽ち、足定平、千輻輪、手指纖長、手身柔軟、手足縵網、足跟滿足、足趺高好、腨如鹿王、手過膝、馬陰藏、身縱廣、毛孔生青色、身毛上靡、身金色、身光面各一丈、皮膚細滑、七處平滿、兩腋滿、身如師子、身端嚴、肩圓滿、四十齒、齒白齊密、四牙白淨、頰車如師子、咽中津液得上味、廣長舌、梵音深遠、眼色如金精、眼睫如牛王、眉間白毫、頂肉髻成を云ふ。

(四)八解脫は八背捨ともいふ。八種の解脫觀なり、この觀に依りて欲界の五欲を背捨し執著を捨つ。卽ち內有色想觀外色解脫、內無色想觀外色解脫、淨解脫身作證具足住、空無邊

皆共に合掌して、佛語を聽受せん、
其の佛は當に壽、十二小劫なるべし、
正法世に住すること、二十小劫、
像法亦住すること、二十小劫ならん。』

爾の時に世尊、復諸の比丘衆に告げたまはく、『我今汝に語る、是の大迦旃延は、當來世に於て、諸の供具を以て、八千億の佛に供養奉事して、恭敬尊重せん。諸佛の滅後に、各塔廟を起てん。高さ千由旬、縱廣正等にして、五百由旬ならん。金銀、瑠璃、硨磲、碼碯、眞珠、玫瑰の七寶を以て合成し、衆華、瓔珞、塗香、抹香、燒香、繒蓋、幢旛を塔廟に供養せん。是を過ぎて已後、當に復二萬億の佛を供養すること、亦復是の如くすべし。是の諸佛を供養し已りて、菩薩道を具して、當に作佛することを得べし。號をば閻浮那提金光如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。其の土平正にして、頗黎を地と爲し、寶樹莊嚴し、黃金を繩と爲して、以て道の側を界ひ、妙華地に覆ひ、周徧淸淨にして、見る者歡喜せん。四惡道の地獄、餓鬼、畜生、阿脩羅道無く、多く天人有らん。諸の聲聞衆、及び諸の菩薩、無量萬億にして、其の國を莊嚴せん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十

處解脫、識無邊處解脫、無所有處解脫、非想非非想處解脫、滅受想定解脫身作證具足住の八種これなり。

小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。」爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

『諸の比丘衆、皆一心に聽け、
我が所說の如きは、眞實にして異ること無し、
是の迦旃延は、當に種種の、
妙好の供具を以て、諸佛を供養すべし、
諸佛の滅後に、七寶の塔を起て、
亦華香を以て、舍利を供養し、
其の最後身に、佛の智慧を得て、
等正覺を成じ、國土淸淨にして、
無量、萬億の衆生を度脫し、
皆十方に、供養せらるることを爲ん、
佛の光明、能く勝る者無けん、
其の佛の號をば、閻浮金光と曰はん、

菩薩聲聞、一切の有を斷ぜる、
無量無數にして、其の國を莊嚴せん。』

爾の時に世尊、復大衆に告げたまはく『我今汝に語る。是の大目犍連は、當に種種の供具を以て、八千の諸佛を供養し、恭敬尊重したてまつるべし。諸佛の滅後、各塔廟を起て、高さ千由旬縱廣正等にして、五百由旬ならん。金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、眞珠、玫瑰の七寶を以て合成し、衆華、瓔珞、(五)塗香、(六)抹香、燒香、繒蓋、幢旛を以用つて供養せん。是を過ぎて已後、當に復、二百萬億の諸佛を供養すること、亦復是の如くすべし。當に成佛することを得べし。號をば(七)多摩羅跋栴檀香如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。劫をば喜滿と名け、國をば意樂と名けん。其の土平正にして、頗黎を地と爲し、寶樹莊嚴し、眞珠華を散じ、周徧淸淨にして、見る者歡喜せん。諸の天、人、菩薩、聲聞、其の數無量ならん。佛の壽は二十四小劫、正法世に住すること四十小劫、像法亦住すること四十小劫ならん。』爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說きて言はく、

【五】塗香は白檀沈香等を磨り水に和して塗る香料。
【六】抹香は沈檀等を搗きて粉とせる香料。
【七】多摩羅跋栴檀香如來（Tamālapattracandangandha）は目犍連成佛の名。多摩羅跋は香草、栴檀は香木の名なり。

『我が此の弟子、大目犍連は、
是の身を捨て已りて、八千、
二百萬億の、諸佛世尊を見たてまつることを得て、
佛道の爲の故に、供養恭敬し、
諸佛の所に於て、常に梵行を修し、
無量劫に於て、佛法を奉持せん、
諸佛の滅後に、七寶の塔を起てて、
長く金刹を表し、華香伎樂をもつて、
而も以て、諸佛の塔廟に供養し、
漸漸に、菩薩の道を具足し已りて、
意樂國に於て、作佛することを得て、
多摩羅、栴檀香と號けん、
其の佛の壽命は、二十四劫ならん、
常に天人の爲に、佛道を演說せん、

聲聞無量にして、恆河沙の如く、
三明六通ありて、大威德有らん、
菩薩無數にして、志固く精進し、
佛の智慧に於て、皆退轉せじ、
佛滅度の後、正法當に住すること、
四十小劫なるべし、像法亦爾なり、
我が諸の弟子の、威德具足せる、
其の數五百なるも、皆當に授記すべし、
未來世に於て、咸く成佛することを得ん、
我及び汝等が、宿世の因緣、
吾今當に說くべし、汝等善く聽け。』

840
40
51